んど南齊の興亡と始終して、制度具備し禮樂起り典章完く、鬱然たる文運太平の風觀る可く、餘威塞外に及べり、潢水(亞剌木倫)の南、黄龍の北に居る通古斯族東胡の部酋莫賀弗勿干は部落萬餘口を帥ゐて入附し、白狼水(老河)の東に移りて契丹の祖と爲り、今の階州文縣西徼の外鄧支山下に居りて自鄧支と號し、國を宕昌の南に立つる白水の羌も亦入貢し、宕昌王梁彌機は吐谷渾に逼られて出奔せしも、魏はその後梁彌承を立てゝ主となし、吐渾谷王伏連籌も亦世子賀虜頭を遣はして入朝せしめ、貢獻東西よりたへず府庫盈溢し、後魏の盛滿是に至りて極まれり、然も代の功臣舊族は多くは國風を慕ひ、帝が中州の儒士に信任して、都を遷し習俗を變易するを悅ばず、新興公丕以下爲に反を謀る者生じ、事破れ志遂げざりしも、尙秋は洛陽に朝し、春は部落に還りて雁臣と稱せらるゝ者多く、奢侈柔弱の風また漸く行はれて、泰奢の間に衰微の兆候を胚胎せり、

齊の初世

江南は宋の孝建二帝以來政綱弛紊し簿籍訛謬多かり、齊起るに及び高帝道成民籍を檢定し、病囚診治の法を發し、又魏の入侵を拒ぎて之を破りしが、四百八十二年(建元四)帝殂し、太子頤立ちて武帝と爲り、律書を編成し、宋書を撰せしめ、數使

齊の明帝の殘虐

を遣はして好を魏に修め、よく十二年の泰平を保ちしが、殂するに臨み、位を太孫昭業に授け、高帝の姪鬱をして之を輔翼せしむ、鬱權勢中外を傾け不臣の志を蓄へ、疎族蕭衍を引きて廢立を謀り、昭業を弑し、その弟昭文を立て、大に虐殺を行ひ、二月間に高帝の皇子鏘、鑠、鋒、銳、鑑、鈞、武帝の皇子子敬、子隆、子懋、子倫の諸王を殺し、遂に帝を廢して海陵王と爲し、尋て之を弑して自立し、魏の孝文帝自將として齊を伐ち諸將をして邊境を侵略せしめ、沔北爲に震へども尙殘虐を擅にして更に武帝の子子明、子罕、子貞を殺し、病篤きに至り悉く高武兩帝の子孫十王を誅し、前後四年の間に高帝の後殲き、慘烈劉宋の晩時に讓らず、鬱も亦殂して明帝と謚せられしは寧笑ふ可し、太子寶卷位に即きしも嬉戲度なく、後宮火を失せしを機として大に芳樂、玉喬の諸宮殿を造營し、服御綺麗を極め暴縱至らざるなく、左右をして刀を捉り救に應じて妄に大臣以下を誅殺せしめて刀救と號し、蕭衍の兄尙書令蕭懿亦殃死す、衍乃昏主の暴虐を制すと稱し、兵を江陵に起して帝を廢して東昏侯となし、皇弟寶融を擁立して和帝と爲し、自相國梁王となり、五百二年(魏の景明三)四月遂に帝位を篡ひて、梁の高祖武帝と爲る、始蕭氏の江南を得るや魏人

梁、齊に代る

その功なきを刺りて國祚長からざるを豫言せしが此に至りて果して殘虐流血の間に七主を更へ凡に二十二年にして滅亡し終れり、

魏の宣武帝の南征

蕭衍梁帝となる前恰も三年、北魏の孝文帝殂落し、宣武帝恪立つ、此に至り齊の明帝の皇子寶寅北走して魏の闕下に伏し、兵を得て梁を伐たんことを哀願し、暴風大雨と雖も休まず、宣武帝之を憐れみて南征を始め、都督元英は梁の義陽を降して中山王と爲りて梁の皇弟臨川王宏の北征の師を破り、梁の漢中太守夏侯道遷は地を以て魏に降り、魏の將刑巒は梁州を取り、晉代より獨立せし武興の羌を滅して東益州を置き、梁は成を求むと雖も宣武帝はきかずして其在世中南北の兵結んで解けず、帝は又北邊に九城を築きて柔然の南侵を防ぎ、國學を營み鹽池の禁を罷めしが、その最心を用ひしは佛教にして親佛書を講じ永明寺、間居寺を創建せしかば、遠近風を傳へて佛に事へざるはなく、沙門の西域より來る者三千餘人、州郡の寺院一萬三千餘、一び太武帝の迫害に遭ひし北方の佛教復隆々として興れり、五百十五年(延昌四、梁の天監十四)帝殂し、太子翊位に即く、則孝明帝にして、太后胡氏制を稱す、此時魏は累世の强盛を經て、四方の珍貨輳集して府庫充盈

魏の豐富と佛教の興隆

し、胡太后帑を絹藏に至り從者百餘人をして絹を取らしむるに、少き者も百餘疋、或は過重頓仆する者あり、高陽王雍は富國中に冠たり、河間王琛之と豪奢を爭ひ宴會には水晶鉢、瑪瑙椀、赤玉巵を用ひ、銀槽を以て十餘頭の駿馬に食ましめ、常に「石崇の我を見ざるを恨む」と誇り、此他宗室權倖皆豪侈を競ふ、胡太后乃洛陽に永寧寺を營み、九層の浮圖高九十丈、その相輪十丈、佛殿僧房に珠玉錦繡を鏤飾し、未曾有の盛を極め、諸州をして各五層塔を立てしめ、五百十八年(神龜元)宋雲慧生命を奉じて赤嶺(西寧府外)を超えて西域に入り、北印度の乾陀羅國に至り、三年を經て佛經百七十部を得てかへり、諸王以下各寺を立てゝ壯麗を衒ふ、此によりて府庫漸く虛しく民力疲弊し、遂に百官の祿を減削するの已むを得ざるに至る、加ふるに太后內行修まらず、侍中元乂之を北宮に幽して政を擅にし與奪情に任せ紀綱大に壞れ百姓困窮して亂を想ふに至れり、

魏の衰亂

始魏の平城に都するや、其緣邊に六鎭を置きて游衛に備へ資給優厚なりしが、南遷の後また奮の如くならず、況や財理紊亂の此に及びてをや、諸將士皆怨嗟し、沃野鎭の民に南單于の苗裔破六汗拔陵といふ者兵を擧げて諸鎭を動かし、頻に

爾朱氏の變

官兵を破る、之を見て莫折大提は秦州に、乞伏莫於は秀容(山西朔平府)に起り、柔元鎮(大同府天鎮縣)の杜洛周は幽定瀛三州を陷れ、五原降戶の反黨葛榮は殷、冀兩州を陷れて相州を侵し洛周を殺してその衆を併せ、此他寇盜日に滋く、加ふるに梁兵亂に乘じて境を犯し、建陵(海州沭陽縣)曲木(仝縣の西)、瑯琊の諸城を陷れ壽陽を取りて男女七萬五千を獲、廣陵、渦陽に克ちて、北魏の封疆益す逼り、天下爲に騷然たり、嘗て道武帝の北方に起りて慕容燕と中山を爭ひし時契胡部落の大人爾朱羽健といふ者帝に從ふて功ありて秀容川に封ぜらる、此に至りその玄孫爾朱榮は畜牧資財を散じて驍勇を招き賊を討ち功を以て安北將軍と爲り、兵勢頗る盛にして魏庭を動かす、偶胡太后は元乂を誅して再び朝に臨み、帝の年寖長じて相協はざるを以て之を毒弑せしかば、榮は君側を清むと聲言し、五百廿八年(永安元)、梁の大通二三月兵を晉陽に起して洛陽に入り、太后を河に沈め、獻文帝の皇孫子攸を立てゝ孝莊帝と爲し、葛榮以下の諸賊を平げ、自相國天柱將軍と爲り、功を負ふて不臣の志を懷く、帝怏々樂まず、榮の入謁を待ち手から之を誅す、榮の從弟爾朱世隆一族を帥ゐて反し帝を弑し、節閔帝泰を立てゝ自太保となる、是に於て冀

魏室の分裂

東、西、魏の內政

州刺史高歡は兵を起して洛陽に入り、帝を廢して爾朱氏を擊破し、孝武帝修を立てゝ自大丞相と爲り、府を晉陽に開きて勢威魏庭を傾け、雍州刺史久賀拔岳を誘殺す、故葛榮の部將鮮卑の宇文泰宇は黑獺此謀に與りしが、遂に岳の衆を統べて長安に據り魏の關西大都督と爲りて高歡の招きに應ぜず、對抗の勢を作す、孝武帝は之を見て高歡の威を避けて長安に奔り宇文泰を丞相と爲し、却つて泰に弑せられ、歡は清河王の世子善見を奉じて洛陽より鄴都に遷り、泰は南陽王寶炬を立てゝ長安に據り、建國以來約一百四十餘年を經て、魏の帝室は東西に分裂し、拓跋元氏なほ虛器を擁すと雖も實は高、宇文二氏の爭となれり、

かくて北方は喪亂以來農商皆生業を失ひ、殊に東西分裂の後戰役やまず公私困竭して民餓死する者多し、東魏の高歡よりて倉を諸州に設けて穀を積み海濱には鹽を煮、調絹を減じ、賦を均くし戶を括し、群臣を會して麟趾格を定め、外は吐谷渾と交り、齊と和す、魏は宇文泰はしば〳〵東魏と攻伐しながら、亦富國强兵の法を講じ、新制を定め官員を省減し屯田を置き、權衡度量を更め禮樂を制し、行臺に學校を設け、大誥を行り、司馬晉以來の文章の浮華を革め、外は柔然の女を納れ

梁の武帝の四十八年

て帝后と爲し、使を遣はして突厥に通ず、然りと雖も南北の治亂今や一轉地を換へて、宣武帝以後北魏衰亂の間に南朝は梁の武帝新興の勢を張りて太平を致すこと既に久し、抑も武帝は自奉極めて儉素、澣濯の衣を着、菜蔬を食し、州鎮、郡宗、鄉豪各一人を置きて遺賢逸才を求めしめ、律二十卷令三十卷を頒ち、五禮を修め雅樂を正し、孔廟を立て東晉以來宋齊二朝皆國學あるも講授の實擧らざりしを忠へ、新に五經博士を置き、博士祭酒を分派して州郡に學校をたて、帝親しく國子學に臨幸し、皇太子以下王侯の子弟をして皆學に入らしめしが、又佛法を好み、五百二十年(普通元)菩提達磨南海に浮びて江南に至りしより、更に深くその敎に歸依し、三び同泰寺に幸して捨身し、親涅槃三慧の諸經を講じ、長干寺の阿育王塔を修し、同泰寺に十二層浮圖を築かんことを企て、その在位四十八年間、嘗て北朝泰平の日には亂離に苦しみし江南の民は皷腹擊壤の治平を樂みき、然も奢奢衰因相依るは時運の免れざる所にして、塔廟供養の費多くして、帝の儉素なるも尙府庫漸く匱しく、安康日久しくして民俗奢侈に流れ武備自廢し、奉佛の餘風慈悲を旨として刑辟弛み、牧守貪賤にして使者州縣を干擾す、唯江北は內亂相つぎて南願

侯景の亂

の遑無きと恰もさきに江南の北上を爲し得ざりし如きが故に、國家幸に事なきを得たるも、帝の晚年侯景の亂起りて、遂に梁室衰亡の端を發せり、

魏室は分裂以來東西相拒ぎて干戈頻りに動きしが、十三年を經て、五百四十七年(東魏の武定五、梁の大清元)東魏の丞相高歡卒し、子高澄職を襲きて丞相となりしに、大行臺河南都督侯景謀畧多くして頗る澄を輕んじ、河南十三州を擧げて魏に降り、更に梁に降る、梁の群臣北朝の叛臣を納れて邊和を失ひ且國難を惹起せんことを憂へて武帝を諫めしも、武帝は好機得易からずとなして可かず、景を河南王に封じ、兄の子蕭淵を遣りて景と與に東魏を伐たしむ、師敗れ淵明は擒となり侯景は走りて梁の壽春(壽陽)を襲ひて之に據り、武帝が東魏と和を約すと聞きて大に怨憤し、帝の子臨賀王正德と結び、兵を擧げて反して江を渡る、江南時に事なきもの四十七年之を聞きて擧國駭震解崩しよく防ぐ能はず、武帝遂に景を大丞相と爲し、詔して援軍を止めしも、憂憤遂に病をなして殂す、年八十六、太子綱立つ、簡文帝是なり、然も武帝の子蕭綸は江夏に、その弟蕭繹は江夏に、武帝の孫蕭詹は襄陽に、其他諸皇族兵を所在に起し、皆侯景を討つを名としながら、成敗を傍觀

して敢て宗室の急に赴く者なく、各自立を圖りて攻擊を事と爲す、侯景乃諸方を陷れて簡文帝を弑し武帝の曾孫棟を立てしが、尋で之を廢し自帝と稱す、蕭繹是に於て綸、詹の諸皇子を逐ひ、五百五十二年(承聖元)王僧辯、陳霸先を遣りて侯景を誅じ、帝棟を殺して位に江陵に即く、元帝是なり、

侯景の亂は斯くて平らぎしも、東魏の高澄薨じ弟高洋代りて丞相と爲り、亂に乘じて江南の諸州を侵し、悉く淮南の地を略有し、五百五十年魏主孝靜帝善見に迫りて位を禪らしめて齊帝と爲り勵精治を務め梁の蕭綸を納れて梁王となし、西魏の境を壓し、河南は洛陽より、河北は平陽より以東の地を得て勢威大に揚る、之を文宣帝となす時に魏の宇文泰も亦梁の蕭詹を納れて梁を圖り、府兵二十四軍を置き、九命九秩の典を作り、時の魏帝欽(文帝寶炬の子)を廢し弟恭帝廓を立て、國姓拓跋を復し、故の魏の卅六國九十九姓を再興し、五百五十四年(恭帝の元年、梁の承聖三)梁を伐ちて江陵に入り元帝を捕へて之を殺し、蕭詹を助けて帝と爲し、湖北を保ち、魏の正朔を奉ぜしむ、史家之を稱して後梁といふ、之より先、梁の王僧辯は蕭淵明を奉じて元帝の子蕭方智を奉ぜる陳霸先と爭ひしが、僧辯は敗死し、霸

齊東魏に代る

陳、梁に代る

先は方智を廢し自立して帝と爲り國を陳と號して梁に代る、時に魏の宇文泰既に薨じその子覺は帝を簒して自天王(閔帝)と號せしも、從兄宇文護に弑せられ、庶兄宇文毓たち、國を周と號す、所謂明帝にして、魏は道武帝より十三世百五十年にして東西に分裂し、東魏は十七年を經て先づ亡び、西魏は後るゝこと五年にして、五十五年の國祚を保ちし梁と共に五百五十七年に滅び、江南は概ね陳に、江北は多く齊に、漢水湘江以西一帶の地は別に後梁を外藩となせる周に歸せり、支那の史家大抵梁魏の衰滅を佛教の流毒餘弊に歸すと雖も、晉以來骨肉相殘の風は諸朝孤弱の因を爲せること多きを閑視す可からず、

周、西梁に代る

柔然突厥の替

今や一世紀半に亘りて漠族を屈伏したる魏の匈奴朝滅びたるを以て陳、齊、周の盛衰を敘する前、少しく、同種族より出でゝ支那北方の憂たりし柔然の始末をいはざる可からず、始五世紀の末魏室隆昌の世に當り、高車の阿伏至羅部落十餘萬を有して柔然に屬し、四百八十七年(魏の太和十一)柔然の伏古敦可汗の魏を侵さんとするを諫めてきかれず、從弟窮奇と西に走り、自立して王となり、後柔然を蒲類海に破り、その佗汗可汗を殺せり、佗汗の子醜奴は壯健にして善く兵を用ひ、

立ちて豆羅伏跋豆伐可汗と號し、西の方高車を破りてその王を殺し、諸部を平定して國勢を挽回し、五百十六年(魏の熙平元)使を遣はして魏に通ず、後五年醜奴殺され、弟阿那瓌立ちしが、族兄示發に逐はれて魏に奔り、其援を得て國に歸らんとせしに、從父兄婆羅門已に示發を破りて、自彌偶可社句可汗となれるを以て進む能はず、高車王伊匐爲に婆羅門を擊破し、魏も亦邊塞保安の爲に二人を調停し阿那瓌を吐若奚泉(懷朔鎮北無極山下)に、婆羅門を西海郡に置きて、柔然を兩分し、相牽制せしむ、南單于の後破六韓拔陵の魏に叛くや、阿那瓌大に之を破り、自救連頭兵豆伐可汗と號し、これより漸く魏に臣事せず、却つて魏の分裂の亂に乘じて數邊患を爲す、宇文泰大に之を患へ、その女を納れて文帝の后となし、東魏も歲幣を厚くしてその歡心を買ふ、然るにその屬部突厥は阿史那姓の土耳古族にて、その先は西海の右に居り、後移りて世〻金山(阿爾泰山)の陽に居り、土門といふもの勇略に富みてその酋長となるに至り、高車を破りて始めて強く、魏の西邊を浸し、婚を柔然に求めて斥けられしを憤り、五百五十二年襲ひて頭兵可汗を殺し、自伊利可汗と號し、その妻を爲可賀敦、子弟を特勒別將を之設といふ、次て伊利可汗沒し、弟

齊の文宣帝の失政

木杆俟斤嗣ぎ立ち、剛勇にして智數多く用兵に長じ、翌年また柔然を攻む、柔然國を擧げて齊に奔る、齊の文宣帝爲に突厥を擊ちて柔然を納れ、可汗庫提を廢し、故頭兵千汗の子菴羅辰を可汗と爲して馬邑川に置き、廩餼綵帛を給與す、突厥の木杆逆擊して之を破り、新に西嚈噠を破り、東契丹契骨に勝ちし勢に乘じて、宇文泰に迫り强ゐて魏に奔りし柔然の餘衆三千餘人を長安に誅戮せしめ、全く柔然を絕滅せしは、五百五十五年にして、實に拓跋魏の全滅と壓に二年の差あるのみ、而して柔然に代りし塞外の大民族は突厥なり、突厥の史實は更に南北合一の後に詳記す可く、柔然の結末を以て再び支那本土にかへり、陳、齊、周三國の關係を述ぶ可し、

齊は文宣帝始めて東魏に代るや、意を政術に注ぎ、內外肅然として治まり國勢太昌なりしが、數年を出でずして功業に矜りて漸く驕恣となり、內は丁匠三十餘萬を役して大に三台宮殿を治め、外は黃櫨嶺(汾州府永寧州の西北)より北の方、社平戍(朔平府左雲縣)に至るまでの長城、幽州夏口より西の方、恒州に至るまで、西河の總秦戍(大同府の西北陝西上安府の界)より東の方、海に至る長城及び內長城等

凡五六百里に亘る長城を築き、二十五州鎮を置き、府藏の積蓄不足して百官の祿を減殺して用途に充つ、且帝酒を嗜み淫佚肆行を逞うし、高氏の婦女は親疏を問はずして往々褻黷し、二弟を幽し諸將を殺し、五百五十九年(天保十)に殂して群臣一人の泣く者なく、太子殷位に即く、偶陳の武帝も亦殂せしかば、故の梁の丞相王琳は喪に乘じて陳をうち、敗れて齊に奔る、齊の文宣帝の弟演は帝殷を廢して自立して孝照帝となり、大に前朝の失弊を改革し、屯田を置きて轉輸の勞を止め王琳を楊州刺史と爲して陳を圖らしめしが、幾ならずして馬より落ちて殂し、弟湛立ち、律令を班ち田賦を制す、武成帝といふはこれなり、時に北周の宇文護はその主明帝の明敏を憚りて之を弑し、皇弟邕を立てゝ武帝と爲し、十二丁の兵制を立て、大律を頒ち、杖鞭徒流死(磬、絞、斬、梟、裂)の五刑二十五等を定め、貴臣の食邑を命じ、百官の笏を制し、突厥の木杆可汗と兵を連ねて齊を犯し、五百六十四年(周の保定四)齊の河清三)春武成帝の師を晉陽に破り雒陽を圍む、齊の蘭陵王長恭は美貌にして勇武あり、來り救ふて大に周師を破りしが、之より周齊の攻伐已まず、既にして齊の後主緯立つや長恭を殺し數〻周と爭ひ、寵嬖に親任して國政紊る、陳は武帝

周齊の攻爭

北齊の滅亡

の後兄の子文帝蒨、文帝の子臨海王伯宗を經て、武帝の姪宣帝頊に及び、齊國の式微に乘じ、將を遣はして江北の數郡を奪ひ壽陽に克ち、連りにその地を蹙迫す、周の武帝齊の內憂外患交起り、朝政昏亂し百姓吸然たるを見て、兵を起して遂に齊師を破り、五百七十七年(周の建德六)春鄴都を圍み、帝緯及び太子后妃等を擒にして齊を滅ぼし、遠く先秦朝覲の古禮を復して梁主を鄴に朝せしめ、宮室の壯麗なるを毀ち、權衡度量を定めて大に周威を張りしが、翌年突厥の入寇を攘ひ病を得て還りて殂落し、太子贊立ち、大司馬楊堅の女を納れて皇后となす、宣帝これなり、北齊の高氏は帝を稱すること五世通じて僅に二十八年に過ぎずして周に併せられ、天下は陳周の對立となりしも、楊氏の勢を得るは夙く此に起れり、蓋宣帝は驕侈奢欲を逞うし、位を太子闡に傳へて、自上帝に比して天元皇帝と號し、五后を並べ立て、楊堅が外戚の位望隆きを忌みて之を除かんと謀りしも成らず、幾もなくして殂せしかば、堅は外戚を以て朝政を輔任し、自大丞相隋王となり、五百八十一年(陳の大建十三)春二月周主闡の禪を受けて皇帝の位に即き悉く周の二百十一州五百八郡を得、周は五主廿五年にして滅び、闡は次で弑せられ靜帝と謚せられ

隨周の禪を受く

隋、陳を滅す

ぬ、

楊堅既に隋帝となり、五百八十七年(開皇七、陳の禎明元)後梁を滅ぼしてその主蕭琮を莒公に封じ、冬十月淮南行省を置き、第二子晉王廣を尚書令行軍元帥と爲し、その弟秦王秀等と共に南陳を伐たしむ、その師九十總官總べて五十一萬八千、旌旗天を掩ひ舟楫江を蔽ふ、時に陳の宣帝頊已に殂して七年、後主叔寶位に在りしも淫佚にして民心を失ひ、天塹の長江南北を限れるを恃み、伎を奏し酒を縱にして隋に備へず、五百八十八年正月隋の總管賀若弼、韓擒虎兵を引きて江を渡るや、建康の甲士尚十餘萬あるも、佞嬖の言に任せて戰はず、弼は兵を卒ゐて城に入り、擒虎は宮城に赴きて陳主叔寶を景陽井中に獲、晉王廣次で入り圖籍を收む、始陳の水軍都督周羅睺は江夏を守りて秦王俊を拒きしが、建康陷ると聞きて降り、陳の皇弟湘州刺史叔愼は兵を長沙に起せしも敗れて擒となり、嶺南の數郡も亦隋に降り、四月晉王廣は師を班へして京師に至り、俘を献じて勝を太廟に告げ隋主功を論じ賞を行ふて天下を統一し、五主三十三年を經て陳滅ぶ、史の記するところに據れば晉の武帝の盛時その戶約二百四十六萬、口千六百十六萬餘ありしが五胡の亂を經て南北朝に及び、南宋江南に偏在して武帝の世には九十萬戶、四百六十八萬口を有し、後周は三百五十九萬戶、九百萬口、此に至りて陳の滅ぶるや江南は又五十萬戶、二百萬口に過ぎず、時に隆替あり、土地に廣狹あるも、略南北實力の如何を見るに足る可く、而して南北を通じてなほ後漢桓帝の世の千六百萬戶、五千萬口の多きに及ばざるは分裂紛爭の世精算なきと民口流離の難多かりしを證す可し、

六朝の文學

東亞細亞大陸分裂して三國と爲り、吳江南に據りてより、晉、宋、齊、梁を經て陳に至りて之を六朝といふ、此間禍亂相踵ぎて名教振はずと雖も文華見る可きものありて、所謂六朝の文學を成せり、その特色は華麗なる詩賦を中堅として盛に對偶排律の巧を求め、從つて文章も亦四六駢儷の極に達して、理致を主としたる直往沉摯の文字少し、是革命喪亂多く、一朝の豪快榮華を屠して、重厚沈著の氣風銷したるに因れり、魏の曹操は赤壁の役に槊を横へて短歌行を吟し、その子文帝丕、(子桓)陳留王植(子建)と與に三曹と稱せられ、中に就きて植は六朝詩人の第一と稱せらる、其下に劉楨、王粲、ありて孔融、徐幹、陳琳、阮瑀、應瑒と合せて鄴下の七子の

名あり、晉の時は阮籍を唱首と爲し傅玄、張華一時の雄たりしが潘岳出づるに及びて排偶の源開けて詩風一變し、宋の謝靈運、顏延之に至りて漢詩淳樸の風全く盡きたり、其間陸機の才藻左思の縱橫なる詩を經て自然を歌へる隱士陶潛(淵明)の詩の如きは全く時調の外に立てるものなり、宋詩は謝、顏二家並稱せられ、鮑照之に次ぐ、その詩風優麗にして齊に至りて益纖巧に趨り艶麗益甚しく謝眺の作最後人に賞揚せられ、梁には武帝、簡文帝の下に沈約、江淹、范雲、任昉の徒ありて輕靡の風盛に宮體詩の名あり、梁には徐陵あり、北朝は詞氣貞剛なれば詩に適せず唯周の庾信あるのみ、散文には子類に魏の劉邵の「人物志」、晉の傅玄の「傅子」、葛洪の「抱朴子」、梁の元帝の「金樓子」、梁僧祐の「宏明集」、史類に宋の范曄の「後漢書」、晉の陳壽の「三國志」、梁の沈約の「宋書」等あり、此等著書の外雜文則序記表章論贊の類見る可きもの少からず、梁の高祖の長子蕭統(昭明太子)は遠く周秦以後の雜文を編次して「文選」といひ、大に時に行はる、以上僅に六朝文學の梗概に過ぎずと雖も、大陸分裂時代尙幾多の文字ありしを證するに足れりと信ず、

東亞細亞大陸の統一

抑禹域南北の爭は自然の勢にして遠く源を三苗征伐に發し、戰國より秦漢に至りて常にその傾あるはさきにいへるが如し、漢末の亂三國の鼎立以來、僅に西晉十餘年の小康を除けば四海一君を奉ぜざる實に四百年に及ぶ、而るに隋は天下を統一して、內に對して隋唐三百年南北混一全盛の端を開きしのみならず、外に對して塞徼の外民と交涉を開き、東は朝鮮半島を動かして、東海の中に卓立せし我邦と大陸との交涉葛藤を惹起し、西は突厥以下の諸族と進退消長して、遠く中央亞細亞諸民族の興亡に影響し、遙かに西方世界の史圈と連らんとす、漢代の昔を追憶するに止らず、東西交通相聞識するの步武は漸くひらけ、今や大に世界的飛動の期に迫らんとするの傾あり、故に此間に於ける西方パルチアの安息朝、羅馬帝室の史を見て東歐西亞推移のあとを叙し、かへりて再び隋唐西域の上に及ぶ可し、

第二　薩賛朝と羅馬の季世及歐洲新民族

第四章　薩賛朝の興起、羅馬の衰相

パルチア王國の組織、波斯薩賛朝の開基、ゼンドアヴエスタの欽定、アルデシル王の治、アントニウス帝、アレキサンデル帝、マキシミヌス帝、ゴルヂアヌス帝、サポレ大王、ゴト族の南遷、ゴト羅馬の邊境を侵す、サポレ大王の四侵、ゴト再羅馬を侵す、アレ援る、ヴレリアヌス帝、サポレ大王の四侵、ゴト三び羅馬に迫る、東四の女傑、マニー及其教法、三十僭主、ゴト三び羅馬に迫る、東四の女傑、マニー及其教法、カルスの東征、兩アウグスツス兩カエサルの共治、波斯羅馬の交渉、羅馬府衰微の因由、

パルチア大王國の組織

榮枯の因果免れず、泰奢の波高くして衰亡の潮流・暗きは東西並に避け難く、威令西天に及びし漢室は桓靈二帝の世に衰へ、東方亞細亞の大平原に三國鼎立の勢成り、葱嶺の外區は大月氏迦膩色迦王の後復振はず、アンドフラ朝亦衰ふるに當り、パルチアのアルサケス家も命を革むに至りき、パルチアは所謂諸王帝國組織にして、單に民種の雜多なる、地方の異俗殊風なる、四裔の利害を異にせるのみならず、各州藩王の權、州民の勢大にして、メヂア、ヒルカニア、アルメニア、百兒士亞の強はパルチアの敵たる可く、バビロニア、バクトリア、アッシリアの智はパルチアを凌ぐに足る、故に始より尾大掉はず、離畔分崩の禍數起り、バクトリア東に據り、アルメニア西に動搖し、北ヒルカニアは夙にヂロガセス一世の時に反し、南バビロニアもヒメルス王の時既に殆んど自立せんと爲したり、故に帝國は猶諸州藩王の大聯邦、安息王室は其盟主たるに似たり、然るに建國以來日既に久しく大王數政を失し稍もすれば內訌起り外憂を招く、大勢の歸趨稍周末王綱弛みて諸侯覇を企てしに近し、然らば孰れかよく西秦の業を爲す者ぞ、嘗て亞細亞の西半を威服して歐洲と爭ひクル、ダラヤウシュの英名嚇々たりし百兒士亞人は自諸州民中に卓越傑出し、技術風俗文學皆パルチアの野風と相容れず、且その拜火教は阿歷山大王の東方蹂躪以后ペルシア本州にのみ行はれ、アルサケス王朝の前後を通じては、天地禮拜、祖先欽崇の域を脫せざりしが、時世推移し、人文開發して諸州の民新理想を啓き、ペルシア人は拜火教の聖義を此間に顯揚して動搖せる西亞細亞の人心を傾けんとせるあり、ペルシアの再び起る豈偶爾ならむや、

波斯薩賢朝の開基

バルチア王アルタバヌス五世のヂロガセス四世と國を爭ふに當り、波斯藩王アルタクセルクセス(アルデシル)あり、卑族の出系譜の信ずべきなきも、アケメニア王統の後苗サッサン、革工バベクの妻と通して之を生むといひ、一名をバベカンと稱す、少にして雄略あり、アルサケス王室の式微を視、父系の貴きに誇りて自立の志を抱き、ペルシスを以て反し、東の方カルマニア(ケルマン)を擊つ、アルタバヌス見て、ヂロガセスの地を削ると爲して憂へず、カルマニア既に下り、アルタクセルクスの師メヂアを侵畧するに至り始めて驚き、急に大兵を發して波斯を征して大に戰ひ(二)び敗れしも屈せず、終に國を擧げて之とペバハン、シュステルの間エラヒ河畔なるオルムヅの平野に戰ふ、殺傷相當り雌雄決せざりしに、バルチア軍中反應者生じて王師敗れ、アルタバヌス王戰沒す、時に二百二十七年五月なり、王の長子アルタヴスデス位に即きて大王と號し、叔父アルメニア王コスロエスの援を借りアルタクセルクスと相防ぎ、一(び)敵を逐ふて波斯州に追りしも、父王の敗殂より諸州動搖して多く敵に應じ、亂緒收む可からず、終に自敵の虜囚となり、建國以來四百八十年を經てバルチア帝國亡び、アルタクセルクセスはアルサケス宗室の女を納れて妃と爲して之に代り、保羅珊のバルクに諸州王を會して位に即き、舊圖に據りて、イシュタクル(バルセポリス)に都を奠む、恰も羅馬のアレクサンデル・セヴエルス帝の世に當る、薩賢朝の始祖アルデシル是なり、

ゼンドアヴエスタの欽定

此時に當り、バルチア四百八十年の治世を經てバクトリアの大聖ゾロアステルの教光幽かに、經典ゼンドアヴエスタの旨明ならず、異說紛々分れて七十餘家の流派を爲す、アルデシル王、遙に古百兒士亞王朝の後を承け、新波斯を起すや、國中に令してゾロアステル教の聖師を徵集し異同を校訂し新結集を爲して國教の基を立てんとす、聖師大に悅び來り會する者無量八萬、中に就きて名增智識を擧げしめ、折半して四萬と爲し、減じて四千と爲し、四百と爲し、四十と爲し、終に學德兼秀の七聖師を撰ばしめて議定せしむ、七聖師の首班アルダー・ヂラーフ沐浴齋戒し、素衣を被り麻酒を飲んで醉臥する七晝夜にして覺め、陽光の天神オロマスダオ(オルムヅド)に謁して親しく神誥に接せしを語り、以つて經典の異議を正し始めて經典を書紀して國中に頒行し、宗法と國法とを結合して、バルチア時世の餘習を一掃し、聖師をして國政の樞機に參與せしめ、錢貨面上に永刼不滅の靈火

アルデシルの治

を鑄て蒼生歸依の念を起さしむ、後歷世の錫錢皆之に倣ふ、而して王の施政は一にダラヤヴシュの故制に倣ひて州藩王を並置し、世襲の君主ある地は貢賦を輸せしめ、農耕を奬勵して富國の資を養ひ、常備軍を置きて强兵の實を擧げ、羅馬のアレキサンデル・セエルス帝の三道の入寇軍を擊退して多少の精英を損じたるも、十四年の間、西方亞細亞罕覯の盛治を致し、政令ながく後世子孫の遵奉する所となり、今日なほ其遺法を存する者多し、但興隆の勢に乘じて、亞細亞の羅馬人を攘ふ可しとの希望は終に成らず、晩年位を子サーポーレー(サポル)に讓り二百四十年を以て殂落せり、

アントニウス帝

始めエメサに天降の黑石あり、太陽神エラガバルスとして尊崇拜祀せらる、羅馬カラカラ帝の妃妹ユリア・マエサの孫ベッシアヌス其祭祀長たり、カラカラ弑に遭ふて、マエサ巨萬の資財を以て此に近れ、財を散じて士を招き、二百十八年五月ベッシアヌス詐りてカラカラの落胤と號し、立つてアントニウスと曰ひ、志利亞に至り、六月マクリヌス父子を弑し、翌年夏羅馬に入る、羅馬の父老その絹衣冕冠粉

アレキサンデル

黛を施せるを見て、東方の俗に化せしを嘆ぜしも、帝は意と爲さず、天位を得たるを太陽神の德に歸して、大に之を尊崇し、自エラガバルスと號し、金砂を街路に布き、白馬の神輦に黑石に載せて驅り、バラチヌス山に神廟を搬め、淫虐を擅にす、衆怨嗟して帝を弑し、遺骸をチベル河に投じ、徒弟アレキサンデルを擁立し、祖母マエサ、母マメア政を攝す、時に二百二十二年三月、新帝年十七、

アレキサンデル位に登り、幾もなくしてマエサ薨ぜしが、母后マメアは政典に通じ學德共に秀でたる司直ウルピアヌス以下十六人の賢良を議員中より簡拔して國事を參議せしめ、帝は德高くして學を好み文辭に長じ、身幹偉大にして武技を善くし、終日政務を視て倦まず、外祖カラカラ帝の弊政を矯正し大に革新の實を擧ぐるに力めたりと雖も、軍士の權重く宰臣を脅かして新政を拒み、良相の斥けらるゝ者甚多し、偶新波斯のアルデシル、パルチアのアルサケス王朝に代りたれば帝其更代に乘じて東征せしも利あらず、將士の心を失ふ、始セエルス帝のトラキアに在りて少子ゲタの生誕を祝する日、國中の民來り會せし中にゴト人とアラニ女との間に生まれし雜種の少年マキシミヌスあり、狀貌魁偉、臂力人に

絶し、疾走角力毫も疲色無し、帝異と爲し、用て禁衛の騎衆に列ねたり、是よりマキシミヌス諸帝に歴仕し累進して今帝の時に及び第四軍の將と爲りしが、竊に不臣の心を蓄へ、帝西征してゲルマニアの反賊を擊ち、二百三十五年五月大軍レヌス河に陣するに至り、帝及び母后を弑し、軍士に擁せられて帝となり、セヱルス帝統に代れり、

マキシミヌス

マキシミヌス素外夷の賤族に出で、貴族諸將の竊に己を輕んずるを知れば、レヌス、イステル河邊に留りて直ちに伊太利に入らず、大に牒監の徒を州縣に縱ちて密告の途を開き、籍沒流放徒死の禍相踵ぎ貴種名門皆恐れ避く、帝尚足れりとせず遂に令して諸市の公財を沒し、廟祠の金銀、帝王英傑の像を奪ひ、銷して錢貨と然す、由つて怨望の聲天下に滿ち、二百三十八年春亞非利加の民先づ叛き、州の執政代ゴルヂアヌス父子を奉じて紫袍を上つり、政廳をカルタゴに置き、使を羅馬に遣はして議院を說く、ゴルヂアヌスの父系はグラヅクス兄弟より出で、その母はトラヤヌス帝の苗裔なるを以て、議院は直ちに其帝たるを許し、議員廿人を半島防禦官と爲し、壯丁を國中に募りてマキシミヌスを拒まんと謀り、府民亦悅んで之を贊け、伊太利響應す、然るにマウレタニア奉行カペリアヌス賊徒蹬人を率ゐて急にカルタゴを襲ひて、ゴルヂアヌス父子を殺し、マキシミヌス大軍を以て西北より歸らんとせしかば、議院慄怖し、吏才に長せるバルビヌス、軍略に秀てたるマキシムスを議員中より推して帝位を授け、更に民望に賴りて、故ゴルヂアヌスの孫年甫めて十三なるを立てゝ帝と爲し、マキシミヌスを防ぐ、四月マキシミヌス、アルプス山を超えてアキレイアを圍む、市民野を清めて之を守りしかば、マキシミヌスの軍屋舍糧穀莫く、炎暑疾病に苦み、軍令の峻酷を含みて帝を弑し、五月圍解く、報羅馬に聞するや一府歡喜して三帝を迎へ、三帝は議院蒼生の爲に盡瘁せんことを誓ふ、禁衛の將士其擁立せしところは敗死し、議院擁立の諸帝位に在るを見て、權勢を削がれんことを憂へ、宮中に亂入し、二帝の紫袍を遞ぎて虐弑し、數月の間に六皇族を斬り、ゴルヂアヌスの年尚幼きを以て立てゝ帝となす、是ミシテウス(チメシテウス)禁衛長官となりて兵權を掌握せり、

ゴルヂアヌス

波斯のサポレ大王

波斯のサポレ大王は頗る父アルデシル一世の風あり、即位の始まづハトラの反將を降し、二百四十一年威を西境に示さんが爲めメソポタミアを侵して、ニシ

ゴト族の南移

ビスを陷る、羅馬の禁衛長官ミシテウス、帝ゴルヂアヌスに說きて親征せしめ、波斯の王師をレサイナに破りてニシビスを復せしも、毒に中りて卒し、代りて軍を領せし亞剌比亞人フィリップ士心を得て、二百四十四年三月帝をエウフラテス、アボラス合流の地に害し、自立して皇帝と爲り、羅馬に歸りて內外上下の心を迷はさんが爲に、二百四十八年四月二十一日、百年大祭を施行す、蓋し羅馬開府以來星霜茲に一千年、帝祖アウグスツス一び此祭儀を行ひてよりクラウヂウス、ドミチアヌス、セエルスの三帝之を舉行し、此に至りて第五祭に當り、チベル河坡に三夜の靈儀を行ひ、宴をマルスの野に張り燈を羅馬全府に點じて稀世の盛觀を極めたり、然れども內訌は此によりて已まず、モエシア駐兵の亂を伐ちし議員デキウスは反つて其兵衆に擁せられて伊太利に還り、二百四十九年フィリップ帝を弑して自立す、後數閱月ゴト族はじめてイステル河邊に入寇す、

抑ゴトはゲトの民の義にして、ゲトは脅種の義なり、古謠の傳によれば、此種族はじめ歐北スカンヂア島(スカンヂナヴィア半島)に起り、基督紀元の後幾くもなくスエヰ海(東海則バルチック海)を渡り、現時のポムメラニア、プルシア地方に遷徙し

ゴト羅馬帝國の盛を援る

し、羅馬の兩アントニヌス帝以來漸々南に下り、ゆく〳〵テウトン、スラヴ兩民族の遺種を併せ、ボリーステヂス(ドニーベル)河の支流貫通して柏樹森々たるウクライヂの地に居る、民俗義を尙び勇を好み堅忍健戰アンセス神を奉ず、中に勇を以て名となすアマリング、猛を以て號と爲せるバルヂング家ありて名望隆く、其民も亦テルヰング、グレウツングの二部に分る、彼は所謂井シゴト(西ゴト)此は則オストロゴト(東ゴト)にして、外に別種ゲピド部あり、三世紀の始羅馬の東北藩屏と爲りて金帛を受けしが、フィリップ帝の時之を與へざりしを以て、ゴト王オストロゴタ(アウストラグタイ)兵三萬を以てイステル河南下メシアを侵し、マルキアノポリスを圍み償金を得、還りてゲピド王の師を破る、二百五十年オストロゴタ殂し、クニヴ代つて部衆を領しメシア、トラキアを侵略し、ニコポリス(勝城則ニコピ)を圍む、恰も此時デキウス羅馬帝と爲り、ゆきて之を救ふ、ゴト兵之を擊破し、退きてフィリップポリスを陷れ、前帝フィリップの弟を擒にす、デキウス散卒を收めてイステル河上を守り、バルカンの諸路を扼して敵の歸路を斷つ、ゴト死地に陷り、降を乞ふてゆるされず、大に羅馬軍とアブリッタ(フォルム・トレボニィ)に戰ふ、デキウス帝

奮戰して殆んど之を破りしも、地利を失ひて沼澤に陷り、皇子と倶に亂軍の間に殂して軍崩潰し、ゴトは勝に乘じてメシア、トラキア、イルリアを剽掠すれども禁ずる者無し、羅馬の老將トレボニアヌス・ガルス代つて帝と爲り、力を以て爭ひ難きを知り、歲幣を約して邊を侵す勿らしむ、衆帝の約を悅ばず、加ふるに疫癘猖獗死者多く、デキウス皇子亦斃れ、人心益動亂す、ゴト羅馬の富み且與し易きを知り、約を破りて再びイリヽアを侵す、エミリアヌス之をイステル河外に攘ふて歸るや、羅馬軍奉戴して帝となし、二百五十三年五月ガルス帝をスポレトの野に弑す、而も四月を出でずして、ガルスの將ヴレリアヌス兵をガリア、ゲルマニアに募りてエミリアヌスを斬りて帝となる、ヴレリアヌスは英明の主たれども時に年已に六旬、子ガリエヌスを擧げてともに政を視せしめしに、ガリエヌス不德にして政を失し、內亂を思ひ反を謀る者競ひ起り、外フランク、アレマンニ、ゴト、波斯の諸蠻列强爭ふて邊を犯し、羅馬の國步轉難局に向へり、

ヴレリアヌス羅馬帝となる

波斯のサポレ大王はニシビスを失ふて後十餘年間累世の仇敵ツラーン人を擊ち、バクトリア叛きて東疆の要地を失ひしを以て、失を西境に償はんため、人を遣りてアルメニア王コスロエスを殺し、虛に乘じ急に攻めて王子チリダテスを走らし、カルレ、ニシビスを陷る、羅馬帝ヴレリアヌス老軀を扶けて親征し、二百六十年エデッサ城下に戰ひ利を失ひて擒にせらる、サポーレ乃星馳アンチオクを取り志利亞、キリキアを風靡し、タウルス山外に出でゝ、カッパドキア國都ケサレアを壞殘し、諸州の民財を奪ふて東す、パルミラのオデナッス壯士を志利亞、亞剌比亞に募り、その歸路を脅かして財貨を奪ひしが、羅馬は外交多難にして皇帝の師を顧る能はず、そはウクライチのゴト時に黑海北岸の地に蔓衍し、ケルソネス、タウリカ（クリミア半島）を領知して水師を興し、二百五十八年海の東岸に沿ふて南し、ビチーウスを侵しトレビゾンドを屠りてかへり、次でその西岸に沿ふて南して、ニコメヂアを取り、ビチニアの諸市を刼かして、ヘラクレアに泊し、二百六十二年にはボスポルス、ヘルレスポンド二峽を過ぎて希臘半島を抄掠し、上古七不可思議の一に算へられしエフェスゝのヂアナの神廟を燒き將にアドリア海邊に出でゝ伊太利に入らんとす、ガリエヌスは父帝東征して還らざるに佚樂自放毫も意と爲さゝりしも、今やゴトを防かざるを得ず、乃ゴトの一將に執政の職を授けし

サポレ王の四侵

ゴト復羅馬を侵す

アレマンニ人の伊太利侵畧

かば、他の諸將爲に和せず、或は海に浮び或はメシアを經て退きしが、西北またアレマンニ、フランク諸蠻の寇あり、始日耳曼諸族は羅馬帝國の北境を侵して歷世その憂を爲す、中に就きてスエボ部最强健にして、雄名ボアヅア(オデル)、イステル兩河の間に鳴り、諸部從屬するもの多く、總稱してアレマンニといふ、こゝに至り大舉入寇し、アルプス山を超え、ロムバルヂアの平原に出で、ラヱンナに至る、適羅馬帝父子は波斯ゴトと爭ふて在らず、羅馬爲に震慴せしが、民兵を募りて辛うじてこれを退くるを得、次でガリエヌス帝はスエボのマルコマンニ部酋にパンノニアの地を割き、其女を納れてアレマンニと和せり、是より先殆んど二十年獨立自由の氣に富めるレヌス、アルピス兩河口の日耳曼族カーウキ、ケールスキ、カッチ等諸部の民は聯合同盟して、フランク(自由の民)と號し、漸く侵路を西南に開き、ピレナイス山外を畧して、西班牙を掠め、都城タラゴナを屠り、海を超えてマウリタニアに入り、三世紀の中葉より新民族跳梁の端を發し、爲に歐南の風雲漸く急ならんとす、豈是羅馬が英主を要する時に非ずや、而もガリエヌスは詩賦辯舌、園藝庖丁の技に精しきも、軍國の器に非ず、父帝の爲に怨みを雪ぐを思はず、侵掠

三十僭主

離畔の邊患を憂へず、故に草莽の英雄雲の如く起り、地方に割據して帝號を僭冒する者十九人、多くは布衣匹夫に出で、一世の名主たるに慚ぢざるものも尠からず、オデナッスの如き其一人にして、ガリエヌス帝の裁可を得、羅馬議院よりアウグスッスの尊號を受けて東方に雄視せり、世或は諸豪の寡孤遺族の尊號を僭承する徒を合せ算して、汎稱して三十僭主といひ、雅典の所謂三十僭主とは自異なりと雖もこれが爲に州縣分崩瓦解し、天災地異また並び起り、饑饉疫癘相踵ぎ、羅馬府民死する者日に五千人、アンチオクは爲に戶口の半を失ひ、帝國の威信全く地に墜ちんとす、然るに二百六十八年、十九僭主の一人たるアウレオルス、下イステルより入寇して羅馬に迫り、ガリエヌス帝親征して、三月之をメヂオラニウム(ミラノ)に圍みしが、一夜其下に弑せられて殂す、遺命によりて將軍クラウヂウス帝位に陣中に即き、城を拔き、末路の羅馬帝國また一振の運を開く、

ゴト三び羅馬に迫る

ゴト族は嚮に南侵して富を得しより、戀々として羅馬帝國の隙を窺ひしが、二百六十九年スラヴ諸部と老幼婦女を擧げ全衆三十萬人を盡くし、海路を經て、マケドニアに出て伊太利に迫る、クラウヂウス帝大に之とナイス、(土耳古ニッサ)に

戰ひ、其衆數萬を殺せしも、ゴトは屈せず、メシア、トラキア、マゲドニアの山海に轉戰し、勢稍衰へてヒムス山地方に退く、此時ゴト若し志を得ば、歐南の文華地に委して世界史の一局面を轉ぜしならんに、年暮れ天寒く食盡き病行はれ、翌二百七十年春漸く黑海の濱に還れり、爾も羅馬帝また病に染みて殂しゴト再び南征を謀る、羅馬の將軍アウレリアヌス、帝の遺命によりて位を繼ぎ、ダキアの鎭兵を撤してその地をゴトに與へ、其民をイステル河南に移して新ダキア州を建置し、ゴト兵二千を徵して東北の藩屏と爲して和を約し、アレマンニ族の入寇を攘ひ、羅馬府の城壁を擴大修築して地域を擴張し且外敵の襲擊に備ふ、

斯くて北方の外患は免れしも、內憂未だ除かず、十九僧主從つて起り從つて仆れしも、なほ西はガリア、西班牙、ブリタニア、東は埃及、志利亞、小亞細亞の各女傑を戴きて皇帝に來庭せざるあり、始めフランク人を討ちし將軍ポスツムス自立し、後ポクトリヌス代り立ち、その殂するや母ポクトリア英傑にして、ガリアの猛將勇卒を指顧し、二僧主を擁立して政柄を秉り、金銀銅貨を鑄行して西方に雄視す、ポクトリア殂するに及び、二百七十一年アウレリアヌス帝伐ちて僧主を滅ぼし

東四の女傑

西方の三州を復し、勢に乘じ東に轉じて女傑ゼノビアを擊つ、ゼノビアはオデナッスの寡婦、明眸皓齒、稀世の美人にして、慧聰才略あり、オデナッスの死後、東方の女王と號すること五年、徐に自立を圖る、是に於て羅馬帝をアンチオク、エメサに邀へ戰ひて皆敗れ、故鄕の地たる亞剌比亞大漠中の椰子林パルミラに據りて嬰守して降らず、心私に波斯大王の來援を期す、適サポーレ大王殂落し、糧餉また匱しく、駱駝の最駿きに騎りて東走して、途上エウフラテス河に至りて、アウレリアヌス帝の輕騎に獲らる、時に二百七十三年なり、アウレリアヌスよりてパルミラを屠り、アレキサンドリアの叛徒を平げ、翌年羅馬に還れり、帝は羅馬諸帝中稀有の英主にして外寇を攘ひ內亂を定め、上下皆其武に服し德に懷きしが、亦諸皇の非運を免れず、二百七十五年再び東征して波斯を擊ち、三月途上に弑せらる、位に在ること四年九ヶ月、九月史家タキッスの裔タキッス帝と爲り、塞種のアラニ部族をメオチス湖邊に破り、カウカス、山下に至りて諸將士と合はず、二百七十六年四月カッパドキアのチーアナに殂す、八月プロブス立ちて帝と爲り、アウレリアヌスの遺業を紹ぎ四方諸蠻を威壓して、レヌス河外に日耳曼族を擊ち、イステル河

の上流ダヌビウスより、レヌス河の支流ニケルに至る三十餘里の長城を築きて北狄の入寇に備へ、二百八十三年埃及に幸して土木を興し、ニィル河を浚へ堂宇、橋梁宮殿をつくる、八月に至り天灼くが如く衆工役に耐えずして蜂起して帝を弑せり、

マニー及び其教法

波斯大王サポーレは羅馬帝を擒にして未曾有の名を成したる後、ペルシス（ウァルス）にサポール府を開き、專内治を圖り實力を養ふて復兵を用ひず、さきにバルチアの盛なる、建築彫刻一も見る可きなかりしも、今や古百兒士亞の遺風また揚り、その建築粧飾の一派は後來亞剌比亞人の傳ふる歐州サラセン式を爲し、宗教は此頃基督教の東流するに從ひ拜火教と接着して新に摩尼教 Manichaeism を生ぜり、これより先二百四十年頃この國にマニー生る、本名はクブリクス、性宏雅不偏にして情意强く、始基督教に歸依せしが、猶太の利末教儀、波斯の聖師オルムヅ・アーリマーンの教法、及び當時既に四方に流行せる印度の大聖釋迦の佛教等に並び通じ、諸教法の雜を芟り眞を採りて新に一派の教を開き、聖典エルタンクを述作し、天下諸教の經典に優れりと稱す、摩尼教是なり、拜火基督兩教徒サポーレ王に迫りて之を國外に逐はしむ、マニー遠く東に走り印度支那の境に遊ぶ、王は希臘ビザンチウムより工藝の徒を招きて大に之を保護奬勵せしが、在位三十一年にして二百七十一年に殂落し、子ホルミスデス（オルムヅ）立ち、マニー諸種の技工を齎らして東方より還り、ヴラテス一世の時捕へ殺されしも、波斯の技藝進歩し刺繍の帛、縉絹の織物皆是より盛んに、古今其例少からざるが如く、新教の祖はやがて新文明の植拓者たりき、

カルスの東征

羅馬は世襲の帝統一び絶えて後、歷帝賢愚、明暗の別なく殆んど皆終を善くせず、アウレリアヌスの後は禁軍帝を立つることも已み、プロブスの世議院擁立の擧も亡び、帝位空しくして、カルス衆に推されて直ちに帝を號し、子カリヌスを留めて羅馬を守らしめ、自少子ヌメリアヌスと與に波斯を擊つ、時にホルミスデスの後バーラーム（ヴラーテス）一世波斯に君臨せしが、東の方事を印度地方に搆へて急に應ずる能はず、使を遣はして和を求む、カルス帝きかず、連にセレウキア、ク

テシフォンを陷れ、二百八十三年十二月チグリス河邊に達して雷火の爲に震死す、軍中恐れて神怒に觸れしと爲し、師を班へして徐ろに西し八月を經てボスポルスに達す、ヌメリアヌスは初より庶弱軍旅に耐えざりしが此に至りて遂にヘラクレアに薨ず、乘その舅アリウス・アペルの害する所と爲し、親衛長官ヂオクレチアヌスを奉じて元首と爲し、アペルを誅す、時に二百八十四年九月なり、羅馬に留守せるカリヌス帝は淫恣にして舞樂を好み寵嬖を任用して政を視ず、變報を得て、二百八十五年大兵を率ゐて東に向ひ、ヂオクレチアヌス遠來の羸兵をメシアのマルグスに破りしも、其下に弑せらる、ヂオクレチアヌスよりて大權を得て新政を始め、羅馬帝國中興の業を成せり、

兩アウグスツス兩カエサルの共治

抑ヂオクレチアヌスは議員の奴家に生れ、實母の鄉里ダルマチアのドクレアの名をとりて自名く、性摯實文華を斥け將略少きも治術に通じて自帝祖アウグスツスの風あり、がリエヌスの亂後諸帝緊肅の後を享け勵精治を圖り即位の始二百八十六年勇將マキシミアヌスを擢んでゝアウグスツスの號を授け、與に大政に參らしめ、二百九十二年更にガレリウス、コンスタンチウスを舉げて皆カエサルと稱せしめて、各女を以て之に妻はし、眞甥の親を結びて分權背義の禍を防ぎ、がリア、イスパニア、ブリタニアはコンスタンチウスに、イステル河上イリヽア地方はガレリウスに、伊太利、亞非利加はマキシミアヌスに分治せしめ、ヂオクレチアヌスは親トラキア、埃及、亞細亞を統治して民政を分掌し、四人協力同心相輔けて大政を決す、是よりさきブリタニア峽なるゲッソリアクム(ボロン)の水師提督カラウシウス反して、ゲルマニアの賊船を脅かして貨財を奪ひ、ブリタニア島に據りて帝と號し、大陸の沿海に出沒して鈔畧を逞うす、羅馬乃其地を與へてこれを招安せしが、此に至りてコンスタンチウス襲ふてゲッソリアクムを陷れ、カラウシウス其下に殺さる、次で兩カエサルはレヌス、イステル兩河の地を定め、兩皇帝は亞非利加を征し、マキシミアヌスはマウリタニアを平げ、ヂオクレチアヌスはアレキサンドリアを取りて、ヌビア人をリヂアの漠中に走らし、紅海沿岸の匪凶を剿したり、

波斯羅馬の交渉

曩にアルメニア王子チリダテス波斯王に逐はれて羅馬に遁れしより、其地波斯に屬すること斯に二十六年、二百八十六年ヂオクレチアヌス帝チリダテスを

國に復す、漢魏交代の亂に際して東方より來投せし塞種の貴人マムゴ(或はいふマムゴは漢の宗室にて魏の簒奪に遭ふてアルデシルの世波斯に來投せりと、事詳ならず)以下皆迎へ歸す、偶波斯の二王子オルムヅ、ナルセス位を爭ふ、チリダテス此間に乘じ故アッシリアの地に寇す、既にしてナルセス波斯王と爲り、羅馬のアルメニア王を復せしを怒りて兵備を修む、ヂオクレチアヌス帝乃自アンチオクに幸し、將軍ガレリウス進んで三びメソポタミアの野に戰ひて大に敗れ、地理西軍に利ならざるを思ひ、二百九十八年二萬五千を以てアルメニアの山路より出て、夜に乘じて敵を襲ひ、大に捷ちて波斯の王妃王子を得たり、ナルセス王瓔を蒙りて遁れ、大に懼れて、メソポタミアを割きエウフラテスの支流アボラース(カーボラス)河を波斯羅馬の境界と爲し(一)チグリス河北のインチリヂ、ザブヂケヂアルザヂ、モキソエヂの四州、河南のカルヅエヂ州を割き(二)、チリダテスの即位、アルメニア國の獨立を認め(三)、オベリアの民カウカスヽの諸溪を以て羅馬に屬するを許し(四)て、和を成せり、これより、波斯、羅馬の間好和破れざるもの四十年、以てチリダテスの世を終れり、

羅馬府衰微の因由

三百三年羅馬の兩帝は凱旋の盛儀を行ひ、殊に波斯の地を得しは前代未聞の偉勳として、帝國の威光此に極まれるが如く、四方皆珍異を獻じて之を賀せり、然れども帝威の凌夷、羅馬府の衰微は實に此に起れり、蓋し帝國起りて以來羅馬は歴世帝王の都城四方の共に仰ぎ瞻る所なりしに、ヂオクレチアヌス帝に至り、上世共和の遺制たりし議院協贊の空名を滅し、大に帝威を重くせんため、即位以來二十年間殆んど羅馬府に入らず、マキシミアヌス帝はゲルマニア種族威服の便によりてアルプス山南のメヂオラヌムに蹕を駐め、造幣廠、馬戲場、劇場、混堂、宮殿樓閣より重壁に至るまで一に羅馬府に擬し、ヂオクレチアヌス帝はイステル、ユウフラテスの中間亞細亞、歐羅巴兩大陸の境たるニコメヂアに居りて、亦羅馬府と拮抗し、緋衣冕旒珠履を穿ち、謁見には匍匐の禮を制し、大に東方の風俗を採用して盛に帝權を張る、加ふるに簒奪の禍を除き失政の害を避けんが爲に、二帝二主並立の制を永制と爲し、帝國を四分して、伊太利、東方には兩アウグスツス、イステル、レヌス兩河の地には兩カエサルを置き、互に輔協せしかば、素樸なる羅馬府の一帝室は變じて、四君威嚴を競ひ驕奢を街ふに至る、從つて府庫數空しく賤稅

年と共に重くして、民負擔に苦しみ、漸く怨嗟の聲あり、惜む可し、英主の明斷は却つて帝國分裂の兆、國力銷耗の源と爲り、羅馬議院は國政協贊の虛名をすら失ひ、羅馬府は歐南大帝國の首都たるの實を失へり、

三百五年五月一日羅馬の兩アウグスツスは位を兩カエサルに讓りて、ヂオクレチアヌスはソロナに、マキシミアヌスはルカニアに退隱し、コンスタンチウス、ガレリウスは皇帝と爲りて、ガレリウスは姪、マキシミヌスとセエルスとを擧げて兩カエサルと爲し、コンスタンチウスが病んで死せんとするを見て竊に帝權一身に歸せんとを期せり、蓋羅馬衰亡の第一階と云ふ可し、

第五章　羅馬帝國の分裂と基督教の興隆

基督教の羅馬に行はれざりし所以、卑渉始て羅馬の廟堂に入る、ヂオクレチアヌス帝の基督教禁遏、コンスタンチヌスの出身、羅馬六帝の分治、コンスタンチヌス大帝の統一、基督教の興隆、コンスタンチノポリス、コンスタンチヌス大帝の新制度、ヴンダルの興起、コンスタンチヌス大帝の三子、サポレ二世、コンスタンチウスとユリアヌス、

基督教の羅馬に行はれざりし所以

基督正教對アリウス派、ユリアヌス對基督教、ユリアヌスの波斯征伐、ヨヰアス、羅馬帝國の東西分裂、

羅馬帝國衰替の兆發するに當り、興隆の運に遭ひしは基督教なり、基督一ひ教を說きてより茲に三百年、その教當に大に興る可くして興らざりしは抑理あり、教徒の信念堅固にして異宗外教を排するに急に、帝國の古典神儀を蔑如し、力を自教の宣傳に專にし、擅に徒を會し社を結び、他を憚りて夜陰式禮を擧げて世の疑惑を顧みず、當代君民の忌惡する所となりしが故に、教祖紀元半世紀の後、教徒は夙に羅馬燒亡の罪を得てネロ帝の慘刑に觸るるに至る、蓋排異擯外は猶太教徒猶基督教徒の如きも、彼は一團の民族祖宗の遺法を遵守するものにて、一派の教旨を傳播して切に多神教徒を化せんとする基督教徒に異なれば、自迫害を禁らざりしのみ、ネロ帝の後ドミチアヌス帝の世基督教徒の刑辟に觸るゝ者多く、トラヤヌス、マルクス・アウレリウスの如き英主の治下尙危害を避くる能はず、アドリアヌス帝の賢明なるも此教徒を罪し、コムモヅス帝の淫虐なる愛妃の教徒たりしを以て反つて禍を免れ、セエルス帝は詔して此教の宣傳を禁せしが、爾後

卑涉始て羅馬の廟堂に入る

東方出身の諸帝は多く此教を認許し、教徒は地を羅馬府中に得て、院宇を設け、高僧は宮裡に出入し、マメア后は教法を歸聽し、其出アレキサンデル帝は基督の像を便殿に奉安し、卑涉(ピンニップ)(督教主)始めて廟堂に交るを得たり、マキシミヌス帝の世一時之を虐害せしも、二百四十四年フィリップ帝位に即きて大に新教を崇尊して自宗門に歸依せしと疑はる、後二帝の世を通じて教徒復迫害をうけ卑涉の徒死する者多く、ガリエヌス帝以降四十年間復此災を免れて、教法年と共に傳播しヂオクレチアヌス帝の時興隆の勢駸々として進み、羅馬祖宗建國の神傳、多神の教義は爲に壓仆せられんとす、此に於て神教の徒と累世の仇敵たるヂオプラトン派の哲學者とは連合協力して基督教を排除せんとし、ガリレウス帝亦之を贊可して、波斯を破りて還るや、ヂオクレチアヌス帝にニコメヂアに見えて基督教禁過の急を說き、三百三年二月二十四日掃宗以來未曾有の禁令を發し、悉く國內の教會を廢し資財を公沒し、擅に集りて教を說く者は死に處し、卑涉、不勒斯比得(長老)の聖典を收めて焚き、公民の教を奉ずる者は榮位高官に任ずるを得ず、奴隸は放釋の恩典を剝ぎて、法律の保護を免せり、而して遇東方の基督教徒に不穩を圖りし

ヂオクレチアヌスの基督教禁令

者ありて、ヂクレチアヌス帝はその公安を害せしを怒り、更に峻酷の苛法を布きて督教主、長老、幹事、讀師、齋師を禁錮し、有司に命じて陰を廢き慝を摘み誅償至らざるなからしむ、但帝は此禁過令發布の後幾ならずして位を去りしが故に、ガレリウスの政令行はるゝ地は愈苛令に苦しみしも、之に反してコンスタンチウスの統治の領地にはたゞに迫害を免れしのみならずして寬待厚遇を蒙り、教門興隆の運は此一家の盛衰と相因るに至りき、

コンスタンチヌスの出身

コンスタンチウスの子コンスタンチヌスは父尙微なりし時、二百七十四年ダキアのナイスゝに生る、長じてヂオクレチアヌス帝に從ひ、埃及、波斯に轉戰し、武功を以て累進し、私に大志を懷き壓色を斥け勤愼自重んず、ヂオクレチアヌス殂し、ガレリウス貪緣を援きて權勢の扶植に力むるや最之を忌みて、陷擠せんと謀る、コンスタンチヌス乃夜に乘じてニコメヂアを遁れ父コンスタンチウスの庭に奔り、父帝カレドニアの蠻族を征してエブラクムに殂するに至り、三百六年七月衆軍に擁せられてアウクスツスの尊號を受く、ガレリウス已むを得ずして之に西方統治權を假せしも、セヱルスをアウクスツスとし、コンスタンチヌスをカ

羅馬六帝の分治

エサルと爲して、四主の末位に置く、始帝國の政令、尙分れざるや、羅馬は帝都、伊太利は畿內の地たれば、費資を他州の租賦に取りしに、今統領の地四域に分れて、伊太利も亦租賦を免れず、然るに羅馬府民伊太利人は先例を固執して輸租稅を非と爲し、議院は諸帝の外に去りて擅恣なるを憤り、禁軍の餘類は權威を失ひしを怒り、相煽搖動亂し、前帝マキシミアヌスの子マキセンチウスを立てゝ帝と爲し、邊州出身の諸帝を廢して、羅馬の自由强盛を恢復せんとす、前帝マキシミアヌスも亦起ち、再び紫金を佩びて帝權を擁し議院及びマキセンチウスをたすく、西皇帝セエルス變を聞きて急に赴き救ひしも及ばず、衆皆敢に赴きしかば、ラエンナに奔る、マキセンチウスよりてラエンナを圍み、三百七年春セエルス自刄す、よりてマキシミアヌスは親アルプス山を超えてコンスタンチヌスと會見し、女を以て之に妻はして、アウグスツスの尊號を讓り、相連和して東帝に當らんとす、ガレリウス之を聞き大兵を募りて西征してナルシに至り羅馬を距ること僅に四十里、而も伊太利は既に西帝に應じたれば、奈何ともする能はず、空しく兵を班へし、十一月リキニウスを擧げてセエルスの後嗣と爲したり、埃及、志利亞を領せる

コンスタンチヌスの羅馬統一

カエサル・マキシミヌス之を見てまた帝を稱す、故に三百八年羅馬帝國は東西に分裂し、西にはコンスタンチヌス、マキセンチウス兩帝、マキシミアヌス帝を擁し、東にはリキニウス、マキシミヌス兩帝はガレリウス帝の威令を奉じ、六帝並立して、ガリレウス帝が希圖せし帝國統一の業は全く水泡に歸せり、

かくて六帝は陽に和平を粧ふと雖も、陰に異圖を畫して相和せず、時機の至るを待ちしに、マキシミアヌスはマキセンチウスと合はずして出奔して、コンスタンチヌスに據りしが、三百十年二月に自刄し、翌年ガレリウスは潰瘍を患へて殂落し、マキシミヌスは西亞細亞を、リキニウスは東歐羅巴を分ち、東西等しく老帝を失ひて和平忽破綻し、リキニウスはコンスタンチヌスと、マキシミヌスはマキセンチウスと連合せり、コンスタンチヌスよりて兵四萬を發して伊太利に入りマキセンチウスをエロナに破り、南侵して羅馬に迫り、三百十二年十月二十八日大にチベル河畔のサキサ・ルブラに戰ふ、マキセンチウス破れてチベル河に溺る、此を以てコンスタンチヌス帝は帝國の西半を擧げて羅馬府に入り、留連三月、悉く禁軍を廢停して禍根を絕つ、羅馬これより兵力なく、また永く帝都たる能はず

して、帝は諸市府を巡幸せり、三百十三年リキニウスはメヂオラヌスに至りコンスタンチヌス帝の皇妹を娶る、マキシミヌス帝其虚に乘じて西侵し、ビザンチウムを陷れしが、リキニウスの急に歸り救ふに遭ひて、之とヘラクレア附近に戰ふて大に敗れ、一晝夜に六十餘里を走り、ニコメヂアに還り憂憤して殂落す、是に於て羅馬の六帝存するもの西にコンスタンチヌス、東にリキニウスある耳、然るに一年を出でずして東西二帝爭ひ、パンノニアのキバリス、トラキアのマルヂア等に戰ひて、リキニウス帝皆破れ、僅にトラキア、小亞細亞、志利亞、埃及を保ち、コンスタンチヌス帝は五州の地を得、威令西はカレドニアより東はペロポンチスに及ぶ、時にゴト族は治平五十年に亘り瀕疲已に癒えて勢舊に復し、三百二十二年其王アリクアカ(アルーヴカルス)東西兩部及びスラヴ諸族の衆を擧げてイステル河南を侵す、コンスタンチヌス帝北征して河北のダキアに入り、四萬人を出さしむるを約し、還りてリキニウス帝を謀る、兩帝の好和八年なりしがこゝに至りてリキニウス帝機先を制し、三百二十三年大に水陸の師を興し、七月アドリアノポリスに西帝の師を邀ふ、東西の師各十萬、リキニウス敗れてビザンチウムに入り、其水師も西帝の皇子クリスプスの爲にヘレスポンドに破らるると聞きて、遂にカルケドンに遁る、而も猶屈せずして餘衆を會して再びクリソポリス(スクタリ)に戰ひ、復一蹶す、帝の妃は西帝の皇妹なるを以て兄夫の爭を調停し、リキニウス地を献じ帝位を辭して和を爲せしが、次て殺さる、さきにヂオクレチアヌス帝が帝權を分ちてより此に至るまで三十七年にして、コンスタンチヌス大帝復帝國を統一し、ヂオクレチアヌス帝が羅馬非都策と基督教隆興の運は此に成れり。

基督教の隆興

コンスタンチヌス帝は父帝の薫陶を受け遺業を紹ぎ、夙に基督教徒を信任して大事に參與せしめ、諸帝と爭ふや、毎にその虐遇に窘める教徒の內應によりて得るところ多かりしを以て、終に親しく基督教に歸依す、ケサレアの督教主エウセビウスは帝のマキセンチウスと戰ふ時、空中に十字架顯じ天神陣頭に立ちて軍を率きしに感じて改宗せりといふと雖も、是固より教家異靈を說くの類のみ、然も既に一ぴ歸依して天命を受くと稱しては、更へ難く信し易きは情勢の然らしむるところにて、三百十三年帝はメヂオラヌスを下して教禁を解き、リキニウ

スを說服して、信敎の自由を天下に布告し、空中に顯せしといふ十字架の形を旗徽と爲りて、至る所を風靡し、帝國を統一し、十字旗の士氣皷舞の効多きを以て、檄書を移して、基督敎を以て國敎と定め、國中をして直ちに改宗せしむ、故に帝が死に瀕して始めて洗禮を受けしは、宗祖の遺風たる多神敎に復歸するの微意を存せしよりは、寧ろ最後に生前の諸惡を洗被せしに似たり、かくて帝及び帝の子孫が建てし基督敎會堂は古羅馬の訟廳を摸して造り、一ぴ用ひし十字旗はながく所定の徽標と爲りてコンスタンチノポリスの宮門に飜れり、

コンスタンチノポリス

コンスタンチノポリス(コンスタンチノプル)は帝の都城なり、ヂオクレチアヌス帝が一たびニコメヂアに遷りし以來諸帝また羅馬に處る者なく、帝も亦東方波斯を威壓せんが爲、新に地を亞細亞、歐羅巴の境上に求め、ビザンチウムの地、ボスポルス峽を隔てゝ直ちに亞細亞の極西端と望みて黑海の口を括し、北金角灣を擁し、南プロポンチスに濱して東西交通の要衝、南北水運の鍵開たるを以て、都城を此に築き、諸種の特典を約して羅馬及び東方の豪族右門、天下の富庶、州縣の工匠賈人を招き致し、府內を十四區に分ち、三百三十年五月十一日を以て開府して新羅馬と名く、後百年を出でずして一學舍、一馬戲場、二劇場、八浴堂、百五十三私混堂、五十二閣、五金庫、八貯水場、四議廳、十四敎會、十四宮殿、大廈高樓四千三百八十三、戶口の數、富盛の度、羅馬を凌駕し、コンスタンチノプルの名千六百年後の今なほ著るし、都城既に新なり、文武治政の法又自新ならざるを得ず、其官制は爵にィルストレス(顯)、スペクタビレス(貴)、クラリシミ(名)の三等あり、議員たりし貴紳及び州縣の長官は名爵、官職更に高きものは貴爵、顯爵は最顯貴にして、コンスル、パトリシアヌ、禁衞長官、羅馬及び新羅馬府長、騎步兩軍の總管、七宰臣のみ之に敘するを得、此に所謂コンスル、パトリシアヌは古名を存して實は全く異なり、ヂオクレチアヌス帝上世共和政の遺制を廢して以來、皇帝コンスルを撰ぶも、その職は執政に非ず、每年擧行する戲場演戲の監官にて其長秀の終身官をパトリシアヌス(父老)といふ、大概寵嬖の臣又は退職の宰臣之に任ぜり、中央朝廷の七宰臣は宮庭の雜事を總理する宮內長官、朝政を總理する宰相、法制詔勅を掌る式部長官、大藏長官、帝領內藏長官、及び步騎兩軍の總管にして、地方の政治はアウグスツス帝の世諸州奉行民政兵權を兼ねて州王に等しく、邊疆强くして尾大棹はず、コムモヅ

コンスタンチヌスの新制度

ス以後地方に據りて自立する者百人に上りしかば、こゝに至り民兵二政權を分離し、六長伯八總管を置く、始チオクレチアヌス帝は禁軍長官諸政を總べて宰相の地を占めしが、禁軍既に亡くして彼の四帝の禁軍長官の後は各、東方、イリヽクム、伊太利、ガリア四方の長伯と爲り、民政を分監し裁斷を掌りて州吏を總率し、羅馬と新羅馬の府長は府政を司りて四方伯と並立す、六長伯是なり、而して長伯の下に帝國を東方、埃及、アシアヤ、ポンチカ、トラキア、マケドニア、ダキア、パンノニア、伊太利亞、亞非利加、ガリア、西班牙、ブリタニアの十三管區となして各副伯を置きて分治せり、後幾らずして宰臣權威を恣にして諸州を分置するに及びては、三執政代、三十七執政、五正商（コンクトル）、七十一頭領（プレシデント）通じて一百十六州區の多きに至れり、土地制度は地を幾カプトに分ちて人民に班與し、毎年の租額を分課し、土地の班與なき者は人頭稅を課して租賦に代ふ、官吏の任用法はユスチニアヌス帝の世法學發を起し、卒業生を採用して諸州區の文官に任用し、兵政は騎步兩軍各總管を置き、レヌス、上下イステル、エウフラテスの三軍、及び帝國內の四軍管區を通じて八總管をたて、ブリタニアに三、ガリアに六、イスパニア、伊太利に各一、上イステルに五、下イステルに四、亞細亞に八、埃及に三、亞非利加に四、合せて卅五侯伯を置きて軍を掌り、總管の指揮を受けしむ、總べて五百八十三營、六十四萬五千の兵あり、是をコンスタンチヌス皇帝以后所定制法の一斑となす、

ヴンダルの興起

此時に當りてヴンダル北に興れり、ヴンダルは素スエヴの一種なりと云ふ、或は日耳曼種、或はスクラヴ種、或は自一別種を爲す者なりといひ、起源甚明ならず、ゴト族の南遷と前後して南下し、ゴトの爲に迫られてティス河畔のサルマチアを人と合し、救を羅馬に求む、恰もコンスタンチヌス帝の世に當れり、ゴト王アラリク之を聞きて先づ發し、三百卅二年羅馬を侵せしが敗れて退き、轉じてヴンダルを擊つ、羅馬救はず、ヴンダルの長ボスマルはゴト王ゲベリクとマロス河に戰ひて敗死し、サルマチアの精兵殆ど盡き、餘衆卅萬、羅馬に內附し、パンノニア、トラキアに移る、然るにコンスタンチヌス帝は內治外交に力め新都新教新制度を立てゝ天下の耳目を新にし、アウグスツス以后の英主と稱せられしに、三百卅七年五月廿二日病てニコメヂアの離宮に殂落す、年六十四、皇儲クリスプスは先后の出、

コンスタンチヌスの三子

勇にして功ありて帝の忌諱を蒙り後后(マキシミアヌス帝の女)に讒せられて、イストリアのポラに幽死し、仲子コンスタンチウスは後后の出にて、帝の殂するや、先づ都城に入り、二叔父、七從弟を始め宗室宿將を誅殺して自立してトラキア及東方の地を得、伯コンスタンチヌスは新都に據り、季コンスタンスは伊太利、亞非利加を取て、帝國を三分す、時に伯年廿一、仲廿、季は甫めて十七、皆政令治法に通ぜず、仲コンスタンチウスは東波斯と爭ひ、伯季二帝は兵を搆へて相爭ひ、三百四十年伯コンスタンチヌスは敗死し、後十年を經てコンスタンスは其下の爲にビレナイ山下へレナに弑せられ、將軍マグチンチウス其遺圖を繼ぎて帝と號し、ゴトラニオはイリヽクムに據て自立し、外には波斯に明君サポーレ二世あり、ゴトに英主エルマナリク出でゝ羅馬の內訌に乘ぜんと謀り、西亞南歐爲に騷然たり、

サポレ二世

波斯はナルセス大王の後、ホルミスダス繼ぎ、ホルミスダスの殂するや、后孕めるありて三百九年サポーレを生み、直ちに立てゝ王となす、亞剌比亞エマン王タイルは王の幼きを見て入寇し、都城を陷れ、國內また離畔の徒多く、薩賢王朝は一時累卵の危期に臨む、サポーレ因りて武技を練り、政兵の學を修め、十六歲にして政を親らし、自將と爲りて叛徒を擊ち、ダーイルを降し、護國王(トーロクノナ)の尊號を受け、二十八歲にして悉く國內を平らげ、居常祖父の爲に怨を羅馬に報ずるの志あり、たゞコンスタンチヌス帝を憚りて發せず、コンスタンチヌス帝殂して羅馬內訌起るに及びて兵を出だし、コンスタンチウス帝をカーボラス河畔のシンガラに破り、九戰九勝士氣大に振ふ、而も三びニシビスを圍みて拔く能はず、マサゲタ人東疆を侵すときゝ和を約して東にかへる、コンスタンチウスも伯季二帝相尋で殂し西方動亂するを以て喜んで和を聽き、西にかへりてエトラニオの衆を招き、三百五十一年夏マグチンチウスと下パンノニアに轉戰し九月之をムルサに破り、

コンスタンチウスとユリアヌス

翌年更にセレウクス山下に破りて之を殺し、自帝國統一の君主となる、然りと雖も帝は治才將略ある無く、奄官事を用ひ、宮內長官エウセビウス權威を弄び、三百五十四年冬、皇從弟ガルスを除き、その弟ユリアヌスを殺さんとす、時に東方は帝の西歸の後また動亂し、西はフランクは今のバタヴィア地方を、アレマンニはアルサスローレン地方を掠め、四十五市を畧せしかば、帝は親東征し、ユリアヌスをカエサルと爲して西征せしむ、ユリアヌス命を奉じて西し、ガリアに轉戰すること四

年にして亂を平げしも、帝は波斯王サポーレがアミダ、シンガラ、ベザブデを陷れしを救ふて及ばず、大雨に遭ふて退き、ユリアヌスの高名を忌み、使を遣はしその兵を奪ひて東征の用に充てんとす、將士因りて强ゐてユリアヌスを奉じて帝となし、ユリアヌス固辭せしも聽かれず、軍を三路に分ち、二軍をして東に向はしめ、自別軍の精鋭三千を拔きて將と爲り、壹尙暗き中部歐羅巴の深林に入り、山河を跋涉してイステル河の上流に出で、流に浮びて下ること百餘里、コンスタンチウス帝の備なきに出てゝ急にシルミウムを陷る、コンスタンチウス之を聞き驚愕畏怖熱を病みて殂し、ユリアヌスは迎へられてコンスタンチノポリスに入る、時に三百六十一年十二月なり、

基督正教とアリウス派

さきにコンスタンチヌス大帝は基督教の禁を解きて國教と爲せしが三百二十五年三位一體の說につきてビチニアのニケアに會集あり、天神神子非一體說を持せしアレキサンドリアの長老アリウス師弟の論破れて、イリゝクムに流謫せられしも、其徒は自一派を立てゝ屈せず、三百三十六年赦されてコンスタンチノポリスに還り、アレキサンドリアの督教主長アタナシウス、アンチオクのユウスタチウス、コンスタンチノポリスのパウロ等は皆免せられ、正教大に擯斥を蒙むる、就中アタナシウスは自正教擁護を以て畢生の任と爲し、前後四十六年アリウス派と爭ひて不朽の名を殘したり、然るにユリアヌス帝は年少にして雅典に在りて深く哲學を脩めしを以て、聲色名利を愛せず、位に即くに及びて勤勉國事を視、器宇はカエサルに及ばず、細心はアウグスツスに讓るも、アレキサンデル、セエルス以後廿年來の明君と稱せらる、然るに、初基督教徒たるコンスタンチヌス一家に虐待せられ、東方諸州に流離して、基督教徒の爭論、信條の變異を視、多神教と抱一せるニオフラトン派の哲理に熱中せし故、書を著はして基督教を駁し、信教の自由を許し、古神廟を修繕し、古儀典を復興し、軍中に令して宗祖の遺法を奉ぜしめ、希臘の文人詞客を招きて基督教の諸僧を退け、十字旗上の基督の號を削り、豫言者がながく壞殘されむと誓ひし言を破らんが爲に、エルサレム殿廟の復興を企て、三百六十三年春アリ、ピウスに命じ天下諸國の猶太人を召集して役を興さしむ、イスラエルの諸子、千歲の好機至れりと狂喜し、四方來集し資財を拋ち

ユリアヌス對基督教

工事を助く、而も帝殂し大風地震の天災つぎ起り、事遂に成らずして已めり、帝は又基督教徒は劍を持して俗界に立つ可きにあらずとて、令を發して內外諸官に任ずるを停め、多神教徒は祖宗の遺法により祖先に孝なりとして登用せし故、官吏專恣勢に扶りて奸を爲す者多し、時にカッパドキアのゲオルグ狡獪にして富み國人に忌まれて出奔し、アタナシウスの後を繼ぎて督教主長と爲り、三百六十一年刑辟に觸れて死し、後世聖徒と尊崇されき、

ユリアヌスの波斯征伐

ユリアヌス帝はコンスタンチノポリス入府の後數月大兵を發して東に幸し、三百六十二年夏アンチオクに至り、神教の復興、基督教の禁遏策を講じ、留ること半年、翌三百六十三年三月此地を發し、エウフラテス河を渡りカレーに至り、始めて波斯侵畧の意を發表し、宗室プロコピウス、埃及公セバスチアヌスに三萬を與へてニシビスより、チグリス河に出でしめ、自六萬五千を率て、エウフラテスに沿ふて下り、キルケシウムに達し、メソポタミアの野を横きり、諸市を略してクテシフォンに迫り、二將の至るを待つ、二將はアルメニア王の來援を待ち期に後れて至らず、帝意を決し船を毀ち二十日の糧を裹み、波斯の亡徒を嚮導として進みしに州縣皆野を清めて城に嬰りて出でず、道遠く天暑く糧盡き導者亡げ、路を失しバクダッドの東方に彷徨し、始めて敵の欺く所となりしを知り、六月師を班へしてカーボルスに向ふ、沿道の敵兵爭ひ起りて尾擊す、ユリアヌス帝且戰ひ且退きしが、一日天暑く甲を卸して追敵を拒ぎ脇腋を刺されて戰沒す、實に三百六十三年六月廿六日、在位僅に一年八ヶ月、年三十二、衆敵中に在りて遲疑の間を得ず、直ちに總管サルルストを推して主となす、サルルスト辭す、乃晃冠をヨビアヌスに上り、且戰ひ且走り、チグリス河畔のサマラに至り、三日にしてゾラに達し、使を波斯王に遣はして和を求む、サポーレ王は嚮に祖王ナルセスが失ひしチグリス河畔の五州とニシビス、シンガラ及びメソポタミアの堅壘たるムーア人の一市を割かんことを求む、ヨビアヌスは一个の功なくして帝たりしを以て變起らんを恐れ意西歸に急なれば、直ちに之を諾し、三十年間の休戰を約し、五州の民を移し三城の兵を撤し、アンチオクに退き、ユリアヌス帝の遺骸をキリキアのタルスに葬り、墳陵ながく影をキドヌスの流にひたして弔往の蹟となれり、

ヨビアヌス

羅馬帝國の東西分裂

ヨヰアヌス帝は軍中に即位して直ちに十字旗を樹てゝ基督教の復興を示しアンチオクに入るや、天下に布告して、ニケア集會の正教を奉じ、督教主長アタナシウスの位を復し、滞留六週日にしてコンスタンチノポリスに向ふ、途上三百六十四年二月十七日ダヽスタナに次りて暴に殂落す、殂因詳ならず、文相武將悉く吏士をビチニアのニケアに會して後嗣を議す、衆またサルストを推す、サルストまた固辭して即かず、終に伯子ヴレンチニアヌスを擁立す、ヴレンチニアヌス時に年四十四、長幹魁貌勇健を以て稱せらる、弟ヴレンスを舉げてアウグスツスの號を冒さしめ、六月ナイスヽ附近に於て盛儀を舉げて、之に下イステルより波斯の境に至る五十州を割與して、コンスタンチノポリスに都せしめ、自イリヽクム、伊太利、ガリア地方を領しメヂオラヌスに至りて、帝國分領の實を舉ぐ、將軍プロコピウス乃退きて野に耕せしが、州吏の虐迫に遭ひ、三百六十五年九月故舊を糾合し東都に入りて帝と稱し、州縣響應してヴレンスに服せず、時に東ゴトのエルマナリクは、西ゴトを羈屬し、メオチス湖畔のヘルリ(波蘭土)に居りしエチヂ、北海沿岸のエスチイ以下諸部族を服し、ゲルマニア、スキシアの大版圖を統轄して、阿歷山大王に比稱せられしが、衆を發してプロコピウスの爲に聲援を張る、ヴレンスの將相よりてサルストを擧げて兵馬總管と爲して之を伐たしむ、サルスト命を承けてプロコピウスを破り、三百六十六年五月之を捕殺し、ゴトの衆を擊退し、東方の亂全く平らぐ、而して此に至りて千百年來の羅馬大帝國は終に東西二帝國に分裂し了りき、

第六章　東西羅馬帝國と新興民族

分裂當時の東西羅馬帝國、ヴレンチニアヌス帝と新民族、フン族の四侵、ゴト對ヴレンス帝、テオドシウス帝對ゴト、マキシムスの叛、アルボガステスの亂、テオドシウス帝の基督教保護、東羅馬帝室の內亂、ゴト王アラリクの侵畧、ラデガストの南下、アラリクの伊太利蹂躙、アタウルフ、トロサの西ゴト王朝の起原、金口ヨハネ、ブルケーリア女皇、アルメニア、波斯羅馬に分屬す、西羅馬のヴレンチニアヌス三世、ボニファキウスの變、ヴンダル亞非利加に據る、フン王アッチラの南侵、アッチラ東羅馬の和約、西羅馬のアエチウス、西羅馬西北徹の新民族、シャロンの戰、アッチラの伊太利侵畧、アッチラ殂後のフン族、ヴレンチニ

アヌス三世の末路、ヴンダル王ゲンセリクの北渡、西羅馬帝位の動搖、

西羅馬帝國の滅亡、

三百六十四年、支那は東晉の哀帝興寧二年、六月羅馬帝國は東西に分裂せり、その際恰もプロコピウスの反ありし爲、東西兩帝刑を峻にし法を苛くし、斬焚打死の禍に陷る者頗多かりしと雖、政令嚴肅、奢泰の風無く、諸州に名醫を置き嬰兒を保養し首邑に學校を開き希臘羅甸の語學を敎へ、諸市に鎭兵を置き、猶太多神諸敎諸派一も禁ずるなく、主として基督敎を奬勵しアリウス派殆ど西帝國に迹を潛めしも、頗東方諸州に行はれ東都及びアンチオクは之に屬し、アレキサンドリアのアタナシウス派と拮抗し、加ふるに東帝ヴレンスはアリウス派の洗禮を受けしを以て、アタナシウスは復放流せられしが、三百七十三年五月その示寂するや、埃及は震駭して異敎の侵害を蒙るに至れり、

分裂當時の東西羅馬帝國

羅馬四境の諸民族は帝國の分裂に乘じて漸次頻起し、歐南の天下を擾るの兆夙く顯はれ來れり、アレマンニは三百六十五年以後、數帝國の邊境を侵す、ヴレンチニアヌス帝親征して之を擊退し、レヌス河岸に堡壘を築きしが、この時プルグンヴレンチニアヌスと新民族

ヂまた既に起りてアレマンニと拮抗し、ガリア、ブリタニアの沿海には輕舟を浮べて煙波の間に出沒し、抄掠寇盜を職とせる索遜人あり、愛蘭土とカレドニアの西岸にはスコット、東岸にはピクトありて相爭ひ、或は索遜と連和して、帝國の西陲を動亂し、三百六十七年西羅馬のテオドシウス命を奉じて海に浮びピクト、スコット二族を塞外に攘ひ、新にヴレンチア州を置き、黑人フィルムスのマウリタニア、ヌミヂアに據りて叛けるを討ち平げしが、東北にはカヂ、パンノニアを侵略し三百七十五年ヴレンチニアヌス帝親征してイステル河を渡り戰ひて克ち、十一月河畔のブレヂチオ(ブレスブルグ附近)に駐輦す、カヂの使至りて罪を謝す、帝情激して急に殂落す、年五十四、長子グラチアヌス帝位をつぎてトレヴス宮裡に在り、軍中異母弟ヴレンチニアヌスを奉ずるを見て爭はず、之をメヂオラヌスに迎へ立つ、叔父ヴレンス帝遙に輔翼の名を假すも、實は半臂の用を爲さず、功臣テオドシウスは讒者の陷擠する所となりてカルタゴに斬られぬ、

フン族の西侵

此時に當りて東方亞細亞は、五胡中國を擾りて晉室南遷し、諸民族大陸の平原

に龍挈虎拋の爭擾を演じ、餘波中央亞細亞を風動してフン族の西侵を致せり、フン族は漠の匈奴、東に敗れて遠く西に奔り、葱嶺を超えて中央亞細亞に跳梁し、現時のヴルガ、タナイス兩水の間にアラニ(阿蘭)を破りて地を奪ひ衆を併せ(或はいふフンは歐北のフィン族にて、突厥種の匈奴に非ずと)王バラムバルに至り、進んで東ゴトに迫る、ゴト王エルマナリク大に憂懼して、三百七十五年に殂落し、宗室ヰニタリは兵を起してフン兵を防ぎて敗れ死し、ヰデリクは西ゴトに奔り、王子フニムンドは衆を率ゐてフン王に降り、バラムバルはゴト王家の一公主を納れてその衆を服す、エルマナリクの世、西ゴトは三判官政を執りて東ゴトに屬し、就中アターナリク東羅馬に通聘して最盛なりしが、此に至りフン族に破られ、數百騎と西北トランシルヴニアの山地に逃遁し、二判官フリチーゲルン、アラヰウは使を東羅馬に遣はしてヴレンス帝に謁して內附を求む、帝武器と兒童とを收むるを約せしめて、イステル河南に移るを許す、之に因りて三百七十六年ゴトの精銳二十萬、老幼婦女を合せて約一百萬、兵器を持して河を渡り、下メシアに遷移し、州吏の貪婪を憤り、マルキアノポリスに戰つて勝ち、火を放ちてトラキア州を抄略

ゴトとヴレンス帝

す、ヴレンス帝嚇怒し、救を西帝グラチアヌスに求め、親ゴトを征してフリチーゲルンと戰ふ、雌雄決せず、三百七十八年ゴトは河北の衆を悉くし、東ゴト、フン、アラニ等の後援を得て、アドリアノポリヌに逼る、ヴレンス帝遽へ擊ち、八月九日府外に激戰し流矢に中りて殂し、全軍殆んど顚り、餘衆潰走す、ゴトよりてコンスタンチノポリスに迫りて威を示し、利貨を載せて徐ろにトラキアの西山を極め、伊太利の微外、アドリアの沿海を蹂躪して過ぐ、西帝グラチアヌスは期に後れて至り、ゴト防ぎ難くして、アレマンニはガリアを侵掠し、帝國危きを思ひて英傑の士を求め、さきに讒死せしテオドシウスの子テオドシウス俊秀時に合はずして西班牙に隱れ耕すと聞きて、三百七十九年一月之をシルミウムに徵し見、强ゐて東皇帝の冕冠を授け、東帝國領外更にィリヽア、マケドニア二州を加へ與へてゴトに當らしむ、テオドシウス時に年三十五、アドリアノポリスの一敗以后羅馬の士民ゴトの名を聞きて心膽寒く上下皆鬪志無きを見て、本營をマケドニアの首府テッサロニカに置き、諸城を修築して徐ろに征畧を議して人心を安んじ、フリチーゲルン殂し、アタナリク西北より還りて西ゴトの主となりしも、年既に老いて復昔

テオドシウスとゴト族

日の勇無きを見、三百八十二年十月これに地を與へて和を約し、ゴト族を服す、實にヴレンス帝殂後四年を經たり、幾もなくして東ゴトの井デリクの餘衆イステル河流に還りて帝國の邊徼を侵せしも、三百八十六年破れて、和を請ふて內附す、テオドシウス帝よりて西ゴトをトラキアに、東ゴトを小亞細亞に居らしめ、將軍を改め任じ、その衆四萬を簡拔して盟軍（フェデラティ）と名け金襟を記章として帝國の守衛に充つ、是により羅馬內國の兵は漸く衰へて戰に耐えず、外蠻跋扈制し難きに至り、帝國崩壞の一因と爲りしは惜む可きなり、

西羅馬帝グラチアヌスは初宰臣の輔佐に扶りて失行なかりしに、年長じて親ら政を視るにおよび、放縱にして、嬉戲田獵を愛し、アラニの强兵を徵して禁衞と爲し諸方の怨嗟を意とせず、西班牙の人マキシムスにテオドシウスの故舊なり、テオドシウスが帝となりて尊卑隔絕せしを見て深く自慚ぢ、三百八十三年ブリタニアの鎭兵を以て反し、水陸兩軍を發して急にガリアに入る、グラチアヌス三百騎を以て東に奔り弟ヴレンチニアヌス帝に賴らんとして途に追兵の爲に弑せらる、テオドシウス帝は變急にして至り救ふに遑あらず、訃に接して恩主の爲

マキシムスの叛

に怨を報ぜんと欲するも、ゴト族の抄掠を蒙りてなほ久しからず、州縣荒廢兵を起すに至らず、暫くマキシムスと和し、アルプス以外に居らしめ、伊太利、亞非利加、西イリヽクムのヴレンチニアヌス二世の領域を犯す勿らしむ、マキシムス陽に諾し、陰に精兵を提げてアルプス山を超えメヂオラヌスに迫る、ヴレンチニアヌス二世母子アキレイアに蒙塵し、エチチアより海に浮びてテッサロニカに遁し、東帝テオドシウスに妹かラを與へて救濟を求む、テオドシウス乃義によりて起ち、マキシムスをサウス河上に破り、北ぐるを逐ふてアキレイア市外に虜にして之を斬る、時に三百八十八年なり、斯くてテオドシウスは羅馬府に入りて凱旋式を擧げ、伊太利に在ること三年にして東に歸り、ヴレンチニアヌス二世の位を復し、フランクの勇士アルボガステスをガリアの兵馬總管と爲す、アルボガステス私黨を樹て忠良を搆陷し、西羅馬を簒はんと謀る、ヴレンチニアヌス帝悟りて其職を免す、アルボガステス懼れて私に帝を弑し、詞客エウゲニウスを擁立して東帝の認諾を請ふ、テオドシウス帝情勢を察知し、表に和して裏兵備を修め、三百九十四年夏アルボガステスを北伊太利フリギヅス河（寒水）の陽に擊ち、大に破れて四道

アルボガステスの亂

テオドシウスの基督正教保護

を斷たれ、進退殆んど窮せしが、敵中反應者ありて、再び戰ふて大に勝ち、エウゲニウスを斬る、アルボガステス走りて自殺し、西羅馬帝國は東帝テオドシウスの手に歸せり、

テオドシウスはコンスタンチヌス大帝に亞ぎて基督正教派を保護し、三百八十年テッサロニカの正教督教主（ビシップ）アコーリウスの洗禮を享け、詔を下してアタナシウスの三位一體說を採用し、アリウス派を異端と爲して嚴禁し、二ヶ月を出でずして悉く國中の教會を正教に歸せしめ、三百八十一年五月コンスタンチノポリスに百五十人の督教主を會して、第二宗教會議を開き、ニケア會集所定の說を欽定し、十五年間に十五令を發して、別派異端の撲滅に盡力したるが、此時東にバシル、グレゴリオ等雄辯の僧あり、西にアムブロセあり皆帝王の權威にも屈せずしてアリウス派を排せり、故に羅馬古傳の神道は漸く微にして、三百九十年帝が勅令を以て犧牲及び祭祀を爲すは國敵を以て論じ罪死に當る可しと定むるに至りて、一千年來の古風終に泯滅し、基督教は拔く可からざる根底を羅馬帝國に定めたり、

東羅馬帝室の內亂

三百九十五年一月テオドシウス皇帝病んで殂す、伯子アルカヂウスは年十八にして東皇帝と爲り、叔子ホノリウスは年甫て十一にして西皇帝の位に即きしが、實權は東羅馬はルフィヌスに、西羅馬はスチリコの掌裡に在り、始ルフィヌスは女を納れてアルカヂウスの后と爲して威權熾なりしも、其先帝の西征に從ふや、宮內長官たる奄侍エウトロピウスは一フランクの女を納れて帝の親任を得てルフィルスを毀る、既にして帝殂し、スチリコは帝の姪を妻とし遺命を以て兵馬總管となりしかば、ルフィルスは詔を矯めて東兵を徵す、ゴト人ガイナス、スチリコの計を受け兵を率ゐて東し、コンスタンチノポリスに至りルフィルスを斬りエウトロピウスと通同し、アルカヂウス帝を奉じて文武の政權を分ちしが、後幾もなくして東ゴトを煽搖して、專權の奄侍エウトロピウスを誅するを名として亂を起さしむ、アルカヂウス帝恐れてエウトロピウスを誅せしも亂やまず、ガイナス兵を引きて都城に入る、都城の兵並び起りてゴト兵七千を斬りガイナスを走らす、ガイナス北方に遁れんとしてフン族に途を斷たれて敗死す、時に四百一年一月にして、東羅馬は幸に奄寺權官の專權を免がれしも、是より皇后エウドキシアの專

ゴト王アラリクの侵略

横起れり、

之より先テオドシウス帝の殂するや、ゴト變を懼れて動搖し、アルカヂウス帝盟軍（フォエデラティ）の資給を省減するに及びて遂に叛く、西ゴトのベルチング家のアラリク年壯にして善く兵を用ひ、叛徒の魁首と爲り、トラキア、ダキア地方は既に久しく抄掠し盡くして遺利なきを以て、三百九十五年夏進んでマケドニアに入り、南に轉じて希臘半島を剽畧し、翌年羅馬の總管スチリコのためにエリス、アルカヂアの間に圍まれしが、奇兵を用ひて圍を脱し、コリント灣口を渡りエピルスに入る、東羅馬の諸臣スチリコの功を立つるを忌み、ゴトと和して、アラリクを東イリヽクムの將軍と爲す、スチリコよりて轉じて亞非利加にフィルムスの子ギルドを破りて西歸し、女マリアを納れて西帝ホノリウスの皇后となして地位を固む、是に於てアラリクは西ゴト王と爲り、東西兩帝國の間に居りて、形勝を扼し、東方は略抄畧を逞うし盡くしたれば、西の方伊太利を侵畧しゴトの旗を羅馬府頭に建てんと志し、四百二年の末急に起つてメヂオラヌスを攻む、ホノリウス帝蒼皇出でゝラヱンナに奔る、スチリコは風雪を冒してアルプスの峻嶮を踏み、ガリア、ゲルマニア、ブリタニアの精兵勇士を集め、翌春伊太利に歸りてゴト兵と戰ひ、アラリクの歩軍をボレンチアに壓殺す、アラリク屈せず、直ちに鉄騎を提げてアペンニチ連山を横ぎりて羅馬を襲ふ、羅馬震駭し、スチリコは利を以て和を爲さんとを求む、アラリク聽かず、ゴトの諸將極諫して和を約し、師を班へす、羅馬乃陷落の災を免れ、盛典を擧げて外蠻の討攘を賀し、劍客の比武を演ず、基督教の一僧身を殺して之を止め、比武の遊戲此に已む、時に四百四年なり、ホノリウス帝は一びメヂオラヌスの破れ易きを知りてより、ラヱンナの形勝に駐蹕してまたかへらず、爾後三百餘年ラヱンナは伊太利の首都となれり、然るにスラヴ種の魁首ラデガストはボスツラ河邊の大平原より南下し、仝種のヴンダル、日耳曼種のスエボ、ブルグンヂ、塞種のアラニ諸部を從へて、四百五年伊太利半島を席捲し諸城市を略取し、フロレンチア（フィレンツァ）を圍む、スチリコ兵を集めて來り救ひ、長圍を築きて蠻軍を圍み糧道を絶ち、ラデガストを降して之を斬り、復伊太利を救ひしが、ラデガストが導きし諸蠻の餘衆之より四方に散じて刼掠を恣にし、相續きてガリアに入り、爲にアルプス山外十七州の地ながく羅馬帝德化外の區と爲れり、

ラデガストの南下

アラリク伊太利を蹂躪す

ゴトのアラリクは一び伊太利を去りしが、直ちに東皇帝と絶ち、スチリコと議して、羅馬の兵馬總管と爲り、金四千磅を得るの約を爲せり、蓋スチリコはアラリクの恐る可きを知りしを以て斯く和平を買ひしも、皇帝諸宰皆以て蠻族に諂附すとなして悅ばず、宮內長官オリムピウスは巧に帝を激して、四百八年八月スチリコを誅し、諸市に散處せる蠻人の妻孥を誅す、諸蠻の兵爲に憤慨し相率ゐてアラリクに歸し半島を奪はんことをすゝむ、アラリク乃前約の財貨を督促し、衆を招きて伊太利に入り羅馬を圍みて糧道を塞ぐ、府中食盡き餓死する者數千人に上るも、ラヴェンナの朝兵至り援けず、議院使を遣はして和議を求め、アラリクは黃金五千磅、銀三萬磅、絹衣四千襲、猩紅布三千、胡椒三千磅を得、十二月圍を解きて退き、和をホノリウス帝に說く、帝の功臣皆和を可とせず、アラリクよりてオスチア港を封じ府庫を奪ひて亞非利加輸入の穀類を略し、羅馬府民の食糧を絕ちて降を勸め、羅馬府長アッタルスを皇帝と爲す、既にしてアッタルスはアラリクに背きしかばアラリクまたラヴェンナに迫る、時に蠻將サルス帝に應じ三百騎を以てゴト軍を脅かして都城に入りアラリクの職を免すと公言す、アラリクよりて三び羅馬を圍み、府中之に應ずる者ありて四百十年八月廿四日夜門を開きてゴト兵を導き、アラリクは火を放ちて公堂民舍を燒き殿樓を毀ち、像型を銷し金紫財貨を滿載し、ホノリウスの皇妹プラキヂアを捕へて去る、開府以來千百六十三年にして羅馬は蠻人の手に落ちき、之よりゴトは半島の南北を蹂躪して、向ふところを擊破し、在るところを抄略し、南方をきはめてシキリア島に渡り、亞非利加を征せんとす、風波起り船舶蕩搖事成らず、尋でアラリク病んで殂す、ゴト乃コンセンチア市外のバセンチウス(バセント)河水を止め遺屍を河床に埋め、再び流を決して陵墓を水底に葬り、王妃の弟アタウルフ(アドルフス)を擁立す、アタウルフはアラリクの遺志を加へて、プラキヂアを從へて自西羅馬帝の駙馬と稱して和をホノリウスと約し、爲にサルスを擊破し、ホノリウスはガリアの反將ヨヰヌスを誅しプラキヂアをかへさば糧餉を與へんことを約す、アタウルフはガリアに入りてヨヰヌスを誅す、帝約に背きて糧餉を與へず、アタウルフよりてナルボ・マルチウスに據り、四百十四年一月プラキヂアと婚し、花燭の盛典一に羅馬皇室の式に擬し、以爲く由て以てガリアの民心を收む可くまた帝の好を保つ可しと、然も民は

アタウルフ

服せず帝は怒り、宰臣コンスタンチウス水師を興して海路を遮斷す、ゴト糧盡き止ること能はず、南ガリアを掠めピレネィ山を超えて西班牙に入る、始西班牙半島はラダガイウスの餘衆ヴンダル兵の略する所となりしが、此に於てアタウルフはバルキノ(バルセロナ)を取りて居り、幾ならずして四百十五年八月サルスの舊臣に弑せらる、六子皆害に遭ひ、妃プラキヂアも亦辱らる、バルチング系の疎族ワリア(ワリーア)立ちてゴトの衆を領しプラキヂアをラヱンナに送還してホノリウス帝と和し、小麥十萬石を受け、西班牙征署の許可を得て、三び戰ふて半島を服し、四百十七年ヴンダルの二將を捕へて帝に獻ず、コンスタンチウス時にプラキヂアを娶り帝に說きワリアを西班牙より新アクィタニア州に移し封ず、州はガリアの南半ガルムナ(ガロン)、ゾラニウス(ドルドン)二河の間に在り、酒油雜穀を產し、人間の樂土、帝國の天府と稱せらる、固よりヴンダルの抄署に疲弊し諸蠻族慓悍反服測り難き西班牙半島の比に非ず、ワリア狂喜し四百十八年封を徙し、都をトロサ(ツールス)に奠めぬ、尋でワリア殂して儲嗣無く疎族テオドリク撰ばれて後を承け、北はフランクを攘ひ、西はアルグンドに敵し、南は西羅馬帝國と壤を接

トロサの西ゴト王朝の起原

して、連りに邊境を拓くに力む、ツールースの西ゴト朝是なり、

金口ヨハヂ

志利亞アンチオクの名族ヨハヂ少にして贊を僞辯派の碩學リバニウスの門に執り金口(クリソストム)の號あり、東羅馬の權臣エウトロピウス東方を巡行して之を知り、三百九十八年拔擢して城都コンスタンチノポリスの督敎主長と爲す、府民喜隨渴仰至らざるなく、僧徒猜忌し後宮小人之を刺る、エウトロピウス敗死するに及び、アレキサンドリアの督敎主長テオフィルス、皇后エウドキシアの密旨を享け、僧侶水兵を率ゐてコンスタンチノポリスに至り、ヨハヂを彈劾して黑海の濱に放つ、府民怒りて蜂起し、僧侶水兵を襲殺して宮門に迫る、テオフィルス身を以て遁る、后帝アルカヂウスに請ひてヨハヂを召しかへす、民狂喜して之を迎へかへる、而もヨハヂは清節自强權門に屈せずして復エウドキシア皇后の旨に忤ひ、四百四年更生祭の式場にて蠻兵に捕へられて、遠くアルメニアのタウルス山中に放たれ後三年を經て更にピチウスに徙され、途黑海に出でんとしてコムナに寂す、年六十、然れども寃枉は寂後に伸び、三十年の後遺骸はコンスタンチノポリスに迎へ

プルケーリア女皇

葬られ、帝テオドシウスは上皇の爲に罪を謝し德識永く後人の仰ぐ所となれり、四百八年東羅馬帝アルカヂウス殂落す、子テオドシウス二世年甫めて七歳、アンテミウス輔弼の任に當る、六年を經て四百十四年皇姉プルケーリア位に即き、羅馬の女帝此に始る、プルケーリアは篤く基督敎を信じ、戒律を保ち、二皇妹と皆終身嫁せず、日々祈禱讃美を缺かず、齋戒斷食し、自奉ずる極めて儉素にして、宮中は寺院敎會の觀ありと雖も、テオドシウス一世の風をうけて、云爲莊重よく斷じ、弟テオドシウスを助けて泰平を致し、歐羅巴領はアッチラの禍を蒙りしも、亞細亞領の無事和平なりしは皆其力に賴れり、

アルメニア波斯羅馬に分屬す

波斯薩贊朝第一の英主サポーレ二世は嚮に清野の策を以て羅馬帝を屈し、三十年間の平和を約せし以來、專力を內治に勵まし、聖明の治よく四隣を撫綏せしが、位に在ること前後七十二年にして、三百八十年に殂せり、後バーラーム四世の時、羅馬はテオドシウス一世の世、三百九十年ながく東西兩强の爭地たりしアルメニアに內訌起り、王コスロエス辛くも之を統一せしも、四百十六年終に其地を

二王子に分讓し、チグラヂスは東半を以て波斯に、アルサクスは西半の地を領して東羅馬帝國に內附して大アルメニアと稱す、時に波斯王イヂゼルド(伊嗣俟)一世少子サポーレを東アルメニアに封ず、イヂゼルドの殂するやサポーレはアルメニアを捐てゝ東にかへり兄バーラームと王位を爭ふ、貴族右門皆二王子を助けず、別に王室の疎族コスロエスを擁立す、バーラーム亞剌比亞兵を率ゐてクテシフォンを襲ひ、コスロエス王貴族聖師等を服し四百二十年王位に即き、アルデシルをアルメニアに封じ、民心を攬るため聖師と結托して國內の基督敎徒を虐遇しその羅馬領內に遁れし者を追窮す、東羅馬帝テオドシウス二世之を拒む、バーラーム王怒り兵を興して戰ひしが勝敗決せず、四百二十二年和成る、然るにアルメニアの貴族、アルデシルの淫虐を苦み、之を廢しアルメニアを波斯王の直領とせんと請ふ、國內の基督敎徒之を爭ひしも、バーラームは貴族の言を納れて、遂にアルメニア王を廢し、其地を波斯の領州と爲す、此に至りてアルメニアはながく波斯、羅馬兩國に分屬せり、

四羅馬帝ヴレンチニアヌス三世

ポニファキウスの變

四百廿一年西羅馬の駙馬コンスタンチウス卒し、夫人プラキヂアは二子を伴ひてコンスタンチノポリスに遁る、後二年を經てホノリウス帝殂落し內亂起る、東羅馬帝テオドシウス兵を遣はして之を鎭撫し、プラキヂアの次子ヴレンチニアヌス(三世)を立てゝ、帝と爲し、皇女エウドキシアを立てゝ、皇后と爲し、內亂鎭定皇帝擁立の償に西イリヽクムを得、嘗て西ゴトの侵略ありて以來相背離せし東西兩帝國は再び相輔くるに至れり、ヴレンチニアヌス三世年正に七歲、母后プラキヂア爲に政を攝し、將軍ボニファキウスは帝后落魄の日常に侍して功ありしを以て、亞非利加伯と爲る、アエチウスはフン族と通じてボニファキウスをプラキヂアに譖す、ボニファキウス誅を懼れ救を西班牙のヴンダルに求む、ヴンダル人はゴト一び西班牙を去りてより再び勢を復し、魁首ゲンセリクは敢にしく訥なるも大志あり、此に於て快諾し、精兵五萬を以て、四百二十九年ジブラルタル峽を渡り、ムーア衆を併せて至り救ふ、時に朝臣后の命を奉じてカルタゴに至りてボニファキウスに會し、彼此の事情を悉くし、アエチウスの讒搆誣妄はじめて露れたりと雖も、ヴンダルの兵暨に諸方を攻畧し、終にボニファキウスをヒッポ・レギウスに圍む、圍むこと一年二ヶ月にして拔けず、ヴンダル食盡く、東羅馬の將アスパル、プラキヂアの請によりて來り援けてヴンダルに當りしも勝ずして、ボニファキウスと與に伊太利に還る、アエチウス此間にガリア兵を徵し、ボニファキウスを破りて之を殺せしが、爲めにプラキヂアの退くる所となり、パンノニアに遁れてフン族に降る、時に四百三十二年なり、是よりヴンダルの魁首ゲンセリクは擅に亞非利加を徇略し、四百三十九年カルタゴを陷れて地中海南に雄視せり、

ヴンダル亞非利加に還る

フン王アッチラの南侵

匈奴の遺種といふフン族は西方侵略を始めてより斯に百年、現時のヂルガ、ダニヴ兩水の地に蔓衍して勢昌盛なるも、抄掠略奪の爲に他の諸蠻と進退して未だ自揮つて南下せず、その西羅馬のアエチウスを助けしものは今の匈牙利地方に居り、酋長ロアス(ルギラス)數東羅馬を侵し、テオドシウスより歲幣金三百五十磅を得たり、ロアスの後、弟ムンヅクの二子アッチラ、ブレダ代つて衆を領す、アッチラは巨顱電眼、英略あり、其俗劒を祀りて軍神となせしに、アッチラ嘗て古劒を叢中に獲しかば、以て瑞と爲し、ブレダを襲殺して、其地を奪ひ、ゲルマニア、スキチアを掩

有し、北は北海を極め南はダニウ(イステール)を限り、西はライン(レヌス)河より東はブルガに達し、雄兵六十萬を有して北方の大王たり、故に四百四十一年大衆を率ゐてドナウを渡るや、アドリア海より黑海に至る二百里間を蕩盡し滔々たる大勢河を決するが如し、東羅馬帝テオドシウス恐懼措かず、ゲンセリク征討の軍をシキリア島より召し還へし、東の方波斯方面の鎭兵を撤し、全國の衆を悉くしてフン族の入寇を邀へ、一びウツス河に戰ふて破れ、二びマルキアノポリスに戰つて復敗れ、退きてケルソネス、を扼せんとして三び敗れ、僅に都城コンスタンチノポリスを嬰守す、アッチラ乃ヘレスポンドよりテルモピラエに至る間を橫行して抄畧を逞くし、パンノニアの貴族オレステス、スキリ部長エデコンに命じて羅馬帝の庭に至りて和を議せしめ、(一)シンギヅヌムよりノエに至るダニウ河南の地を割き、(二)歲幣を增して二千百磅と爲し、(三)鑑師料六千磅を支出し、(四)フンの俘囚をかへし、內應者を送り、羅馬の俘囚は贖還す可しと迫りぬ、テオドシウス帝よりて譯官に賄ふて敵を詐らんとして成らず、奄寺クリサフィウスは利をエデコンに啖はしアッチラを刺さんと企てゝ亦成らず、使節往復再四にしてアッチラの怒解

東羅馬アッチラの和約

けしも、羅馬は莫大の損害を受けたり、時に四百四十六年なり、

アッチラ攻畧の後五年を經て、四百五十年七月東羅馬帝テオドシウス二世殂し、皇姉女帝プルケリアは齡六旬の議員マルキアヌスを擧げて假夫となして紫金を佩びしめ與に國政を視せしむ、府中に罪を羅馬帝に得て謫徙されたる西羅馬の皇妹ホノリウス居り、アッチラと通じて怨を羅馬に報せんと企て、事露はれて伊太利に送還せらる、時に西羅馬はボニファキウスの沒後、アエチウス雜兵六萬を以て太后プラキヂアを脅かし、自騎步兩軍の總官を兼ねて兵政の柄を握り、南の方ヴンダルのゲンセリクと和し、西はガリア、西班牙を服し、ブリタニアを羈束し、フランク、スエヒを威伏し、嘗てパンノニアに在りて友たりし故を以て好をフン王アッチラと通じ、ヴレンチニアヌス三世を奉戴して柱石の臣と稱せられ、治平を致すこと二十年、後ブリタニアは羅馬の帝威海表に及ばず、鎭兵罷めかへるに至りて、ブリトン人再び起りて獨立し、四十年間僧侶貴族諸市の分治と爲り、西ゴトはテオドリク王の治世三十年、地を四方に拓き治を國內に布き、一王女はスエヒ君に嫁し、一王女はゲンセリクの王子に嫁せり、然るにゲンセリクは王子の妃隱謀

西羅馬のアエチウス

羅馬西陲北徹の新民族

を爲すを疑ひてこれを殺して、ゴト王と隙を啓き、援をフン王アッチラに求む、西ゴトの北にはフランクあり、初現今のアルッセル界のヂスバルグム壘に居りしクロヂオン諸部を征して地をライン、ソムメの間にひらき、こゝに至り其子メロヱウス位に即きて、所謂メロヴィンジアン朝の源を開き、王の兄はアッチラに應ず、是に於てフン王アッチラは且は皇妹ホノリウスの意を遂げ、且はヴンダル、フランクの望に應ぜんがため、四百五十一年匈牙利の庭を發して、ガリアに向ひ、フランクの衆を併せてオルレアンを圍みて將に之を陷れんとするに至り、西羅馬のアエチウス西ゴトのテオドリク王父子の軍來りしを以て、退きて之とシャロンの野に戰ふ、兩軍の死者十餘萬と云ひ或は三十萬といふ、以て激戰の狀想見す可く、テオドリク王は戰沒し、王子トリスモンド輜重を積んで壘と爲して自衛りてアッチラを破る、アエチウスはよりてゴトの勢を得んことを恐れ、王殂してツールース必ず亂あらんと說きて、王子トリスモンドを去らしめ、自亦引きかへる、然れどもアッチラは一敗を以て蹉躓せず、翌年再舉土を捲きて重ねて來るや、先づアクイレイアを拔き、パヅア、ヱロナ、ミラノ、パヴィア以下を粉齏して、馬蹄の蹈破する處春草を生ぜざる

シャロンの戰

アッチラの伊太利發軍

の慨あり、ヱネチアの亡民は之をアドリア海隅の州渚に避けて、後のヱチチア市の基を開き、伊太利は爲に震動して、アエチウスの勇も用うる所なし、羅馬の督教主レオは相貌堂々雄辯を以て鳴る、よりて帝の旨を承けてフン王の營に使しアッチラにベナクス湖上に見えて大に說きしかば、アッチラはホノリア公主と巨萬の粧資を要求して兵を退く、かくてアッチラは四百五十三年かへりてダニヴ河邊に留り、美人イルヂコを納れて華燭の典を擧げし夜、春夢永くさめずして不歸の客と爲りしが、アッチラを擊破せし西ゴトのトリスモンドが弟の爲に弑せられたるも、東羅馬の女帝プルケリアの殂せしも、皆亦此年なり、

後世ニーベルンゲン・リード中にエッチエルの名を殘せしフン大王アッチラ暴に殂して、北方の大國は分裂崩潰し、單に兩羅馬帝國北境の憂を除きしのみならず、ゴト族の興隆を致せり、これよりさきアッチラ部下に屬したる東ゴトはボニタリの孫アラメル、テーウデメル、ヴンヂメルノ三兄弟分治せしが、別種ゲヒドの君長アルダリクは三兄弟と共にフンに叛き、アッチラの長子にて塞種アカチィル族を統治せるエラクの軍と大にパンノニアのヂタド河邊に戰ひ、斬殺三萬、エラクを斬り、

アッチラ殂後のフン族

ヴレンチニアヌス三世の末路

アルダリクはカルパチア山より黑海に至るアッチラ大王王畿の地を奪ひ、東ゴトはボンナよりシルミウムに至る地を得、諸族之を見て紛々蜂起して皆地方に割據せしかば、エラク王の弟デンギシクは屢にダニウ河畔一帶の地を保つこと十五年、父大王の遺業を紹ぎて東羅馬を侵略せんとして敗死す、季弟イルナクはアッチラの目して遺業を守る可しと爲せし者、性温厚にして二兄に似ず、衰殘のフン族を率ゐて東北に退き、小スキチアの故地によりて匈奴の後を奉ぜり、淡史に記せる粟特國王と爲りし匈奴の忽倪巳王はこれならんといふ、後畏吾兒の北より起りて此地方を掩有するに至りて其王統全く絶滅せしが如し、

フン族の西亞細亞、中央歐羅巴の諸蠻を統一して南下するや、善くアッチラ王に抗敵せし者は唯アエチウスありしのみ、其西羅馬保全の功や重しと謂ふ可し、然るに狡兎死して良狗烹られざるは稀に、其功高く權重くして子ガウデンチウスの爲めに公主エウドキシアを得んと企て、ヴレンチニアヌス帝の爲めに忌まれ、四百五十四年宮中に殺さる、議員ペトロニウス・マキシムス帝の爲に妻を奪はれて憤りしかば乃私かにアエチウスの遺臣をして、武をマルスの野に觀るに乘じ

ヴンダル王ゲンセリクの北波

四羅馬帝位の動搖

て帝を弑せしめ、四百五十五年三月自帝位に即く、恰も忽倪巳王の奄斃を服するの年に當れり、是に於てヴレンチニアヌスの妃エウドキシアは密使を亞非利加に遣り、入援をヴンダルのゲンセリクにすゝむ、ゲンセリクは亞非利加に據りて以來カルタゴの故業を追ふて水師を興し、シキリア島に克ち、ハレルモを屠り、カニアの濱を抄め、地中海上を横行せしが、依託を得て直ちに起ち、此年六月オスチア港に著し羅馬に入る、府民よりてマキシムス帝を斬る、さきにゴトのアラリク羅馬を陷いれてより此に至りて四十五年蠻王再び之を陷れたり、ゲンセリクは十四日間掠略を逞うし、エウドキシア母子を脅して貨財と與に船に載せて、カルタゴにかへり、皇女エウドキシアを長子フンメリクに妻はせ、羅馬の帝位を爭はんとす、ツールースの西ゴト王朝は西羅馬の變報を得て、其王テオドシウス二世、羅馬の兵馬總管アヂツスを擁立して帝と爲し、東帝マルキアヌス及び羅馬議院の意を得、自スエヂ族をイスパニアに伐ちて酋レキハリを斬る、故ヴリア王の外孫リキメル伯隙に乘じて起り、四百五十六年十月西帝アヂツスを廢して、マヨリアヌス(四百六十一年八月まで)リビウス・セエルス(四百六十七年まで)を立てゝ

西羅馬帝國の滅亡

權威を逞くし、內外の事を決せしが、常にヴンダルの水師海寇の侵掠を憂へ、終に東羅馬に降りて其命を乞へり、

東羅馬は四百五十七年マルキアヌス帝殂して、權臣アスパルはレオ帝を立てゝ好をヴンダルに通じ、西羅馬の衰亡を顧みざりしが、アスパル卒して後、レオ帝は西羅馬のリキメルの請を容れ、アンテーミウスを冊立して西帝と爲し、四百六十八年后エリナの弟バシリスクスを將として戰船一千一百、戎卒十萬を率ゐて、ヴンダルを征せしめ、殆んどカルタゴを拔かんとす、ゲンセリク火船を縱ちて敵船を燒き羅馬軍の半を殲くし、次で四百七十二年アンテーミウス帝はリキメルに弑せられ、ヴレンチニアス帝の駙馬オリウス代りしも亦廢せられ、フン王アッチラの遺臣にして羅馬に歸せしオレステス、四百七十五年蠻族を集めて帝を逐ひ一子ロムルス・アウグスツスを立つ、オレステスの舊友にオドアケルあり、アッチラ王の爲に羅馬帝に使せしエデコンの子にして、エデコンはアッチラ王の殂後東ゴトと戰ふて陣沒したるを以て、オドアケル亦西羅馬に仕へしが四百七十六年オレステスの卒するに及び、代りて蠻族を領し、羅馬の議院と議して、ロムルス・アウグスツス帝を廢してカムパニアに徙し歲費六千金を給し、西羅馬帝の領土をレオの義子にて東帝の位に即きたるゼノ帝に獻じ、自パトリシアヌスに任じて伊太利州の政を執り、アルプス山外の地を西ゴト王に統管せしむ、是に先つこと十年西ゴトのテオドシウス二世は弟エウリクに弑せられしもエウリクは自立してイスパニアを征服し、今また此幸運に會し、羅馬帝の治下に大王國を爲せり、唯此時フランクは既に勃興の源を開き、索遜人はブリタニアを蠶食し、ヴンダル王ゲンセリクは殂落し、羅馬は東西分裂以後百十一年を經、ヴレンチニアヌス三世以後二十年間に九帝を代へ、帝祖と羅馬開國の始祖との名を兼ねしロムルス・アウグスツス帝に至りて西帝國ながく滅びぬ、實に支那は南宋の末世、拓跋魏の文帝の盛世に當り、是より歐洲の形勢は一轉せり、

第三　東羅馬帝國、東ゴト及薩賛朝

第七章　東ゴトの盛世及波斯

ビザンチウム帝室の世、東ゴトの三君、ゼノ帝とテオドリク、東ゴトの伊太利征服、テオドリク王の治、その婚姻同盟策、フランクの興起、ツールス王朝の滅亡、東ゴトとフランク、テオドリク王の末年、ベルンのイエトリヒ、囉嗹と波斯と、波斯の難時、マジダーク教變の一、東羅馬と波斯と、マジダーク教變の二、希臘哲學の末路、

ビザンチウム帝室の世

傳へてロムルスの開基といひ、實にアウグスツスを帝祖と仰ぎし羅馬の地中海帝國は民族の大遷移に由りて革運の命迫り、匈奴の末遠く東方より至り、深林の民大に北より起る間に、ロムルス・アウグスツスを最後の主として帝統絶え、前にアッチラ大王、後にテオドリク大王出で歐南征戰統御の權柄は外蠻の手に委せしも、分れて東の方亞歐兩大洲の咽喉を扼守せるビザンチウムの帝室は、世界最上の地利を占め盛隆の天時に會し、後人の所謂羅馬第二の征服たる法典完成の世に至り、東は舊く西羅馬の敵たりし波斯と、西は新に其故地を侵畧するロムゴ

東ゴトの三君

バルドに抗せり、而してフランク尚强からず、サラセン未起らず、ビザンチウムの皇帝西方諸雄の仰望を受けて雄覇を稱するの時なり、此間數十年フンのアッチラ王黑海の濱に殂して後二年テオドリク中歐の野に生れ、テオドリク殂するの翌年ユスチニアヌス皇帝の位に即き、英明の代迭東西の偉業を見る可し、

四百五十五年東ゴトの三同胞の仲君テウデメル一子を擧ぐ、名けてテオドリク(チウダレイクス)といふ、時にゴトはビザンチウムの朝廷より歲幣を受けたるに、レオ皇帝の世寵嬖アスバル國命を執り幣財を割きて姻族たるゴトの一部長テオドリク・ストラボに頒與す、ゴトの伯君ワラメル憤怨し、兵を發して帝國の邊に入寇し、毎歲金三十貫を受くるを約し、姪テオドリクを質とす、時に四百六十二年なり、是よりテオドリクは帝都コンスタンチノプルに留り、王侯縉紳の子弟と交り、學藝を修練すること十年、其間東ゴトの地は兵革熄まず、その君ワラメルは戰沒し、テオドリクの父仲君テウデメル代り立ちしもゲピド、サルマニアに侵され、アラマン、スエボ、ルギアに攻められ、フンの遺類蓄業を復せんとするにあひ、始んど寧處を得ず、テオドリク年十八、始て國に歸るを得て、直ちに六千騎を以てサル

マチア王ベベイを斬り、シンギヅヌムを拔く、シンギヅヌムはもと羅馬帝領たるもテオドリクかへさず、羅馬帝亦内多事にして之を問はず、然もゴトは戰役久しく民庶業を失ひ、戶口滋殖して版圖狹く、抄掠剽畧の外策なきに至り、已むを得ず道を分ちて帝領を侵畧するに決し、季君ヰヅメルの衆は伊太利に入りて志を遂げず、ガリアに奔りて西ゴトに投じ、兄テウデメルはビザンチウム帝國の邊境を擾りて、マケドニアの地を獲しも、レオ皇帝と同じく四百七十四年に逝き、子テオドリクはゼノ帝の即位と年を同うして東ゴトの衆に君臨せり、

ゼノ帝とテオドリク

ゼノ帝本名はトラサコヂッサ、小亞細亞イサウリアの人、孱懦帝王の資にあらざるも、先帝の駙馬として天位を繼承せしが、太后ユリナ廢立を謀り、帝はイサウリアに遁れ、太后の弟ベシリスクス位を篡ふ、幾もなくしてゼノ帝位を復するや、テオドリク亦與りて功あり、帝乃歩騎三萬八千を約してテオドリクにストラボを誅らしむ、テオドリク命に應じて起ちしも、帝約に背きて兵至らず、ストラボに要撃せられしかば、反つて之れと合し、コンスタンチノプルに迫る、帝利を以つてストラボに啖はしめ二人を離間す、テオドリク憤り、急にマケドニアに入りエピルスに下り、兵艦を艤して西の方伊太利に航せんとす、適ストラボ馬より落ちて死し、その衆皆テオドリクに歸せしかば、帝恐れて四百八十三年ダニヴス河谷の地を與ふ、然れども尙やゝもすれば紛擾侵寇を免れず、五年の後帝はテオドリクに伊太利畧取の聖可を與へて禍をオドワケルに嫁して、帝國は幸にゴトの難を免かれたり、

東ゴトの伊太利征服

是に於てテオドリクは四百八十八年秋悉く東ゴトの衆を盡くし、男女老幼五十萬、輜重を載せ家畜を率ゐ、河を溯つて西に向ひ、道を扼せしゲピド族をシンギヅヌムに擊破し、サヴス(サウ)河に沿ひて進み、アルプスのユリア嶺を渉り初より殆んど一年を經て四百八十九年八月伊太利に入る、オドワケルの衆之をインソ河に邀へ擊つ、テオドリク勞兵を以て尙よく敵を破り、翌月復オドワケルにエロナに勝つ、オドワケル奔りて羅馬府に入らんとして拒まれ、ラヱンナの堅要に據り謀を以てテオドリクを窘めしも、内諸將和せず衆心一ならず、之に反してゴトは累代君民の恩義あり上下難を同うして異域に在りて屈せず、且羅馬の議院はテオトリクの爲に伊太利王の尊號をゼノ帝に請ひ、偶四百九十一年帝の殂落

にあふて事成らざりしも、西ゴト王アラリク二世は兵を出して東ゴトをたすけ、テオドリクの勢再び強く、ラヱンナ國をうくること二年半糧盡き力屈し、四百九十三年兩雄並立し共に伊太利を治むるの約成りて和を講じ、宴を會して之を祝す、終りてテオドリク自劒を揮ふてオドワケルを斬り、東ゴト遂に伊太利を得たり、

テオドリクの治

テオドリク既に半島を舉げて皇帝の實を有し、羅馬府之を認め、四百九十七年東皇帝アナタシウスも亦之に西皇帝の紫袍金冠を贈りて、嚮にオドワケルを待せしに異なるも、テオドリクは自王號を守りて東帝を陽尊し、兵馬の實權はゴトの衆に委するも、別にゴト政廳の命を奉ぜしめ、帝國の舊典遺法を遵行して更めず、當世の學者カシオドルス、ボエチウスを擧げて力を治道に用ひ、財政を調へ濫官汚吏を淘汰し關稅を正し度衡を制し貨幣を鑄、ゴトのアリウス派、羅馬のニケア信教派を調和し、古代の工藝美術を保護奬勵し、五百年一ぴ羅馬に幸したるも、常にラヱンナに居り、時にヱロナに移り、二都及びパヰア、ナポリ等の諸市府に寺觀、劇場、浴堂、宮殿を起し、商業を振作し農耕を勸め、ダルマチアの鐵鑛プルチウムの金鑛を探掘し漁獵を盛にし船舶を造り道路水道を開鑿して水陸交通の便を謀り、貧困を恤賑し、內治平を致すこと三十年之を羅馬帝國の末期に比すれば隆汚の差、雲壤啻ならず、世人見て蠻酋能く古帝國を復興せしと爲し、詩人騷客は地上の樂園此土に在りと頌し、伊太利の豐富は四方の仰羨する所となる、さかも其昌榮を見て機を窺ふて謀らんとする者多し、且伊太利王の名聲隆々たるも實力は悉く之に合せず、一フランクにだも如かざらんとす、テオドリクよりて婚姻同盟政策を講じ、王妹アマラフリダをヴンダル王に、王姪をツリング王に、二公主を西ゴトのアラリクと、ブルグンド王子シギスヰンドとに嫁し、自クロヰス王の女アウダソレダを納れて正妃と爲し、其出アマラスヰンター公主の爲に宗室の嫡流ミウタリク公子を尙して儲位に立て、悉く南歐の列强を繫聯して隱然テウトン諸王の盟主となり、列强も亦之を仰ぎて爭衡の機自逸せり、

東ゴトの婚姻同盟策

フランクの興起

東ゴトの盛なるに反し、西ゴトはエウリク三世殂し、アラリク二世繼ぎてより、復振はず、諸部漸く崩解し、北方フランク諸部君王を擁して相攻伐す、ライン河邊のサリー部長クロヰス(クロドヱク)年甫めて十五、衆五千を以て興り諸部を連合

して盟主と爲り、まづ羅馬のガリア總督シアグリウスに勝ちて、現時の白耳義地方を畧し、四百九十六年ライン、メイン合流の地に居るアレマンニ王を斬りて其衆を併せ、ブルグンドのグンドバド王妹を妃とし基督教を奉じ、西ゴトの諸僧侶皆窃に之に通じ、連りに救主北より至らんと說き、アラリク王制する能はず、フランク國勢轉熾にクロヰス王はアラマン人を破り、遂に義兄グンドバドを服し勢に乘じて西ゴト朝に迫る、テオドリクはクロヰスの女婿、アラリクの舅なれば、二國の間に立ちて和解を謀りしも成らず、五百七年フランク軍終に西ゴトを侵す、アラリク兵弱く資乏しく、東北の防備を撤しツールスを捨て戰を避けて西南に退き、ポアチエーに據りて、テオドリクの來援を待つ、クロヰスは東ゴトの必至らんを知り、直ちにツールスに入り、急に進みてポアチエーの南ヴクラドの野に戰ひてアラリクを斬る、王子アマラリク年甫て五、敗卒に擁せられて西班牙に遁れ、ツールス王朝茲に亡ぶ、而してテオドリクの來り援けざりしは適東羅馬帝と事を搆へしによる、初帝はテオドリクの强盛を忌みて之を謀る、テオドリクまた東北に備へん爲、後のセルヰア地方に居りて、自フンのアッチラ大王の後と稱するム

ツールス王朝の滅亡

ンド王を服し、五百四年將ピッチアをしてグピド王を征せしむ、帝乃ムンドの侵畧を名とし五百五年サビニアヌスに兵一萬を與へブルガリア人を合せて之を伐たしむ、是ブルガリア人史中に著るの始なり、ピッチア大に之をマルグス野に破る、帝憤慨し、水師二百艘を發してカラブリア、アプーリアを剽畧せしむ、テオドリク之を防ぎ輕舸一千を作り、五百八年六月東皇帝との和成るや直ちに股肱の勇將イッバをして南ガリアよりフランクを伐たしむ、イッバ連りに勝ちしかば、翌年クロヰス和を議しテオドリクはローン河東沿海の地(後のプロヴンス)を得、外孫アマラリクには亡父の遺領西班牙半島及びガリア東南沿海の地を與へ親其國政を監攝す、次きてブルグンド王シギスムンド愛妃の讒を聽きて王子を殺せしかば、后の父テオドリクは外孫の爲に兵を出して罪を問ふ、師至るに先ちシギスムンド王はクロヰスの諸子と戰ひて敗死し、新王ゴデマルは尙フランクと戰ひしかば、五百二十三年領土の南半を割きて和をテオドリクに求め、東ゴト王は一兵を損せずして地を拓き、勢愈强し、

東ゴトとフランク

羅馬帝國の遺墟に據りて東はビザンチウムの皇帝を折き、西はフランク王の

テオドリク王の末年

侵畧を制して巧に地中海上の列强を折撞し、內半島三十年泰平の治を致せしテオドリクの名は歐南を動かせしが、齡既に頽きて身神勞傷し、晩年輕躁の氣多く猜疑の念生じて失行多し、當代の鴻儒にして輔翼の功臣たるボエチウスは羅馬の名家に生れ、幼にして孤となり、長じて寛恕辯雄あり、篤く學に志し、希臘學を研め、エウクリドスの幾何、ピタゴラスの音樂、プトレマエウスの天文、プラトンの神學、アリストテレスの論理を註譯し、羅馬の學界に貢献し、晷儀、漏壺、渾天儀を使用し、大にテオドリクの知遇を得て重用せらる、五百廿三年春羅馬の富豪議員アルビヌス、ビザンチウム庭の密旨を受けてテオドリクを謀る、事發はる、ボエチウス爲に辯疏して忌諱に觸れ、パヴィア城中に幽せられ、獄中「哲學の慰籍」を著はし、翌五百廿四年遂に刑死す、眞シムマクス哀悼して王を怨み亦ラヱンナに召し殺さる、次で東皇帝アリウス派を禁ぜしかばテオドリク之を憤り羅馬教皇ヨハネ一世をコンスタンチノプルに遣はして勅令の撤回を求めしめ、其歸るや隱事を帝に奏して西征を勸めたりとの蜚語を信じて之を毒殺し、基督教の禁令を布けり、時に五百廿六年五月なり、幾ならずしてテオドリク病を獲、八月十三日遂に殂す、年七十二、王はラヱンナに都せしも、時にヱロナに在りしを以てベルンヂのトリヒ（エロナのテオドリクの轉訛）の英名ながく後世日耳曼歌謠の中に殘れり、

ベルンのアエトリヒ

嚈噠と波斯と

之よりさき大月氏は南は印度に破れ、西は波斯に侵され國力式微諸部崩解し、嚈噠（エフィタリテス、西史に所謂白匈奴）北方より崛起す、嚈噠は土耳古種、漢の丁零の裔と曰ひ、或は本大月氏の分種と曰ふ、干寅の西に居り、漸次南下して巴達克山を占め月氏の地を畧し、信度河に沿ふて印度に入り笈多王家に克ちて西北兩印度を降して、中央亞細亞を威服し、東は魏北の柔然と天山南路の地を爭ひ、西は波斯を伐つ、波斯史家は之を稱してハイアテーレーといふ、恰も羅馬帝とアルメニアを分ちしヴラーラン五世在位の日に當れり、ヴラーランは野驢（バーフラム・グール）を狩るを好みて野驢王の號あり、嚈噠の可汗東北邊を犯すと聞き、弟ナルセスを留めて都城タテシフォンを守らしめ、陽に使を嚈噠の營に遣はして和を求め歲幣を約し、言を會獵に托し自輕騎を率てアヂアベーヂに至り精勇を徵し、裏海エルボルヅ山間を東に馳せ、急に嚈噠の軍をメルヴ附近に襲ひて可汗を斬り、兵をオキス、河外に

出して再びその衆を破り、榜柱を立て境界を劃して還る、波斯史家の所傳に據れば王は尚勝に乘じて東に轉じ、地を印度方面に拓き、印度の伎樂を招聘し、大に東征を企つといふも信僞俄に決し難し、四百三十九年王野驢を狩りて流砂に陷沒して、暴に殂し、イヅデゲルド二世後を受け、四百五十七年に至り王子ペロセス(フィローヅ)二世位に即く、

波斯の羅時

ペロセスの治世にアルメニア亂を圖り嚈噠東北邊を侵して征旅已まず國帑消耗し士馬多く損じ、旱魃七年饑饉疫癘相つぎ死者數千に上り、益嚈噠の乘ずる所となり、一ぴ境を定めて和を請ひしも王は憤怨自禁ぜず、幾もなくして約を破りて東征したるも、素軍略に乏しく、四百八十四年敵の詐謀に陷り、師を失ひて殂落し、王妃公主敵手に落つ、王弟バラス(ヴラスガシュ)敗亡の後を承け、在位僅に四年に過ぎざるも、外少貢を輸して巧に嚈噠の意を和げ、故王の妃及公主を復し、アルメニアを下して嚮にイヅデゲルド一世の其地に布きし基督教の禁令を解き、拜火教の祭祠を毀ち其教徒を國外に逐ふを許して民心を收め、今日尚且得易からざる信教の自由を與へたり、然るに末年約貢を納れずしてまた嚈噠の禍至らんとするに及び、暴に殂して王位を望む者並び起る、前王ペロセスの王子コバードは嚈噠王クシュヂワヅの後援を得て之を破りて位に即く、實に四百八十九年なり、是より波斯嚈噠の舊敵は新交を脩めて相親み、王は今のドンヅルが兩河の間に居りてカウカスヽの峽より出でゝ數來寇する北方の強蠻可薩部を征して大に之を破り利品を載せて還り、將に前王朝の衰殘を醫し國家昌運に向はんとせしに、忽大聖師マヅダークの變起れり、

マヅダーク新教の興

マヅダークは波斯聖師中の高僧にて、人間平等の教を立てゝ君王民庶等權同位に共產共治に妻を共にし家を同うし、稍もすれば造惡の因緣たる婚姻を廢し、卵乳の外肉を啖はず、美衣を着ず、清淡を以て拜火教の大革新を斷行せんとす、老弱男女皆教を聽きて喜隨し、民間爲に風靡し、コバード王の如きも亦其雄辯に動かされて其教に歸依し、綱紀廢頽して貴賤上下の序破れ、邦家の憂連に至らんとす、モベッド(マギの僧官)貴族皆深く之を患ふ、アルメニア奉行王命を以てマヅダークの新教を民に强る、國人之を疾み密に使を遣はして東羅馬帝に訴ふ、事此に到りて波斯の貴族大官相謀り、コバード王を廢しオプリ并オン城中に徙し、王弟ザ

マスプを擁立し新教の唱主マツダークを捕へ誅せんとせしも、徒多く亂作らんを恐れ之を特赦す、ザマスプ王性悌友、よくコバードを遇す、コバードよりて間を得て城を超えて遁走し、嚈噠王クシュナワズに投じ、其女を納れ、精勇三萬を得て還る、ザマスプ敢て爭抗せず、直ちに位を讓りしも、反つてコバードの爲に兩眼を抉られて盲となりしは憐む可し、コバード既に復祚し再貴族の反抗せんを恐れ、自新教を信ずるも之を下に強るざるを約し、事始めて平ぎ、マツダークの教逐に昌ならずして了れり、時に五百一年なり、

東羅馬と波斯と

波斯羅馬干戈を收めてより邊境安きと斯に八十年に垂んとして戰雲復動けり、之よりさき十年、四百九十一年羅馬のゼノ皇帝殂して宮內の老吏アナスタシウス皇后の旨を承けて位に即きしが、波斯王コバードは將器ありて雄畧を好み、復祚の後直ちにフン、亞剌比亞の諸衆を併せて西征し、アルメニア、メソポタミアの藩壘を踏破し、五百二年アミダを攻め、圍むこと八十餘日にして之を陷れ、連りに羅馬軍を破りしが、累世の讐敵嚈噠の東北邊を窺ふにより、志を西に專にする能はず、將軍を留めて還り、爲に勝ち得し所を失ひ、五百五年巨額の償金を得てアミダを拊てゝ和を講じ、アナスタシウス帝亦東ゴトのテオドリクの勃興に遭ひて東顧の遑莫く、頻に堡壘を邊境に設け、民衆をニシビスを距る數里の地ダラに徙して東方の重鎭と爲し、以て他日の變に備へたり、

マツダークの教變の二、

西は羅馬を屈し東は嚈噠を防ぐ間にコバード王は復マツダーク派の隱謀を挫けり、マズダークは王の殊遇を受くること廿年、教義行はれ信徒增加して勢昌に、王の第三子プータースアルサス亦此に歸依したれども、他の三王子は其教を拒み且マズダークが新教の共妻旨義により自一妃孃を得んとするに及び益之を惡む、時に王齡既に高く、新教徒は新王立ちて自派の勢を削らんを恐れ、陰に黨を結び、王に强ひてプータースアルサスを立てしめんとす、王探知して廢立を謀ると爲し、言をプータースアルサスの祝賀に托し兵を伏せて大にマズダーク教徒を徵集し一舉して悉く之を誅除し、親拜火教に復宗し、教法の爲にイベリアを伐つ、イベリアは黑海の濱に在りて、其俗基督教を奉じ、塋域を有し、墳墓を營む、コ

バードは拜火教の儀に從ひ遺骸を方圓に棄てゝ隼鴉の食たらしめんとを之に命じて、遂に干戈に訴ふ、イベリア王グルゲチスは戰破れてキルカッシア山中のラフカに奔遁し、イベリアは波斯帝國の一部となれり、拜火宗教改革の一亂斯に局を結び、次で王は羅馬と戰ひ、波斯史上に光彩を添へしも、事は羅馬のユスチニアヌス帝と關するを以て其條下に讓る、

希臘哲學の終末

基督教興隆して多神諸教は異端と目せられしとともに、希臘のニオプラトン哲學も亦外道視せられ、舊神教と此哲學とは相抱合して遂に衰へ來り、ユリアヌス帝の後殆んど百年にして雅典のアカデミに倫理哲學を教へしプロクルス(四百十二年生、四百八十五年沒)は基督教の世界開闢說に十八ケ條の疑問を加へしも、また諸神の不可思議を拜し、卒、後尙其系統傳ふる者ありて、六世紀の始シムプリキウス以下の七賢を出せしが、五百十八年羅馬帝アナスタンウス殂落しダキアの民間より出でゝ禁衛の士たるユスチアヌス皇帝となり位に在ること九年にして姪ユスチニアヌスを擧げ帝と爲せしに、帝は五百二十九年勅令を發して雅典の學校を廢し、哲學を禁じ、七賢國を去つて一ぴ波斯に歸せしが後またかへりて民間に沒し弟子業を繼ぐなくして、シムプリキウスの遺著を存するも、希臘哲學は此に滅し去れり、

第八章　ユスチニアヌス帝の時代及羅馬法典

ニカの變、ユスチニアヌス帝の土木と內治、波斯、羅馬の交戰、蝗虫の害、ベリサリウス、ヴンダルを滅す、西ゴト王家の革命、東ゴト女后アマラスサンタ、ベリサリウス東ゴトを伐つ、サチギス王、フランク伊太利を劉略す、東ゴトベリサリウスに屈す、トチラ王の克復、及その末路、ナルセス、東ゴトを滅す、コスロエス一世の內治、外征、ブルガリア人の南下、ユスチニアヌス帝の殂落、地震、疾疫、羅馬法の起原、歷史、皇帝の法令、三法典、法學の變遷、哲學、法學の關係、法家の流派、ユスチニアヌス帝法典纂輯の業、その評、インスチチユチオチスの概要、人、物、行爲、犯罪

ニカの變

五百廿七年四月羅馬帝ユスチニアヌス皇帝の位に即くや年四十五、皇后テオドラ、政務に參してニカの變起れり、抑羅馬の俗は希臘に異り、有位帶勳の士太夫

は自技を競ふを慚ぢ、別に戲徒ありて演戲を掌る、就中馬戲者は服色によりて紅白の二黨となる、後若綠二黨を生じ、四黨各廿五回、總て一百戰車の競爭を以て一日の馬戲と爲す、よりて諸黨相凌轢するの風あり、綠黨の馬師の長女あり、國色雄資、幼にして父を失ひ綠黨の辱を受け若黨の爲に憐まれしを忘れず、長じて優と爲り最士民に喜ばれ、終にユスチニアヌスの寵を蒙り、宮に入りて后と爲り前怨を清めんとす、テオドラ是なり、帝諸黨に愛憎なきも、后の爲に稍若黨を援く、五百三十二年一月、滿月（イディス）の公祭を擧ぐるや、綠黨は馬戲場にて若黨と爭ひ、府中爲に騷動す、府長兩黨の首惡七人を捕へ誅す、綠若の二人逃亡し黨徒を煽動して府廳を燒き吏員を殺し軍際に抗す、適僧侶之を和解せんとして兵士の爲に害せられしかば、全府忽混戰の區と爲り、宗教の爲、神の爲と叫びて婦幼も屋に上りて瓦礫を投じ兵衆火を縱ちて市區を燒き、騷擾鼎の沸くが如く、富賈賢良は海を渡りて難を避け、亂民は故アナスタシウス帝の姪ヒパチウスを奉じて馬戲場に據る、帝皇城を守り船を艤して外に奔らんとせしが、后テオドラ之を諫め、若黨を招き、衆三千を發して馬戲場を圍み、反徒三萬を斬り、ヒパチウスを誅し、亂平ぐ、暴徒口にす

ユスチニアヌス帝の內治と土木

るところの暗號に因み、之をニカ（勝利）の變といふ、而も帝の世を通じて兩黨の軋轢は遂に已まざるなり、

帝の世西方は諸蠻並び起りて貧しく、東方の貨物動かず、且佾侶の專恣太しくして民庶怨み、ニカの變に聖ソフィアの聖殿兵燹に罹りしかば帝名匠トラレスのアンテミウスに命じて五年十一ケ月を費して之を再建し穹窿弦門の壯を極め、龕廟に珠玉を鏤め、後二十年を經て震災に遭ふや、また修理造築し、後世摩訶末教の靈域と化せしも、千四百年後の今尙巍然たる大堂、當世建築の範を遺せり、帝は又內宮殿樓閣を起し、都城近畿の地は縉紳豪右の別墅名苑相錯綜し、恰も天府樂土の觀あり、邊境には大に城塞を起して守備を固くし、ペルクラデより黑海に至りサヒエの合流よりダニウビ河口に至り、河に沿ふて八十城を置き、北はタウリカに長城を築きて守兵三千を屯し、東はエウフラテス河外のアミダ、エデッサ二鎭を置き、ダラ城を修め、東南は亞剌比亞の大漠を固とし、南はエチオピアの蠻族を制せしも、徒に帝國武力の銷沈を示して、樂土に似たる國內の富饒は却つて四方諸蠻の垂涎羨望する所となり、テムペの谷、テッサロニカの野は數抄略を蒙り、皇城の中

より烽火を望むに到る、況んや土木用兵の役繁くして、アナスタシウス帝が儉政によりて蓄積せし府庫夙に匱しく、貪夫嫉臣を擧げて民血を洩り、五百三十年以后カッパドキアのヨハヲ用ひられて最誅求に力め、國内怨嗟して帝室徒に富むとなせしも、實は負債に苦しみて帝の世を終れり、

波斯羅馬の交戰

ユスチニアヌス帝即位の始、波斯羅馬兩帝國の間に戰起り、コバード王の諸子兵に將として善く戰ひ、五百廿九年、王子クシャヤルシャは少兵を以て羅馬の名將ベリサリウスの大軍をニシビス附近に擊破す、ベリサリウスは素トラキアの賤族、ユスチニアヌスの尙微なるや、仕へて家奴と爲り、此に於て軍に將となり此敗ありしも、次で波斯軍をダラスに破りて其將バルサメヲスを殺し、ペロゼスを走らす、翌年波斯軍は再びベリサリウスをカリニクスに破り、黃金百餘貫を得て兵を罷む、五百三十一年コバード王中風を病みて殂落す、年八十二、在位四十餘年、波斯帝國の爲、薩賛王家の爲拮据經營の蹟太見る可きもの多かりしに、世多くは殘虐の主と爲す、最憾む可し、然れども羅馬の東方に得しものは、更に人文史上特記す可きものあり、之より先西方絹絁貴く、安息朝中に居て東西轉輸貿易の利を壟斷

すと稱せらる、アウレリアヌス帝の世絹の價は同量の黃金よりも貴し、後需用益多くして供給之に準して增し、價額亦從ひて減ぜしもなほ低廉ならず、ユスチニアヌス帝大に之を憂ひしが、時に基督教徒は既に胡椒の產地マラバルに在り、教會を錫蘭に營み、波斯の二僧は支那帝宮に在りしを以て遂に蠶卵を西方に傳ふるを得て絹絲を爲るに至れり、

ベリサリウスワンダルを亡す

ユスチニアヌス帝の即位はテオドリク大王の殂後僅に八ヶ月にして、西羅馬帝國の滅亡より此に至りて實に五十年、歐南はゴトの手に落ち、北非はヴンダルの有に歸せりと雖も、正統を以て論すれば固よりビザンチウム帝室の領土たる可し、且東ゴトは創業の英主殂して諸將寡婦幼主に服せず、ヴンダルは之より先ゴトのテオドリク王の妹たる后アマラフリダを殺し、此に至りて國王ヒルデリクは加特力正教を信奉してアリウス派に忌まれ、權臣ゲリメルの爲に幽閉せられて內訌起りしかば、ユスチニアヌス帝東波斯との和成るや、征東の將ベリサリウスを征南鎭西總督と爲し、大に西帝の遺領を經營せんとす、五百三十三年六月征師コンスタンチノプルを發す、埃及、キリキア、イオニア諸州の船舶五百、水手二萬、

兵三萬五千、馬匹五千、三月の糧を載す、三月の後カルタゴの南五日程カプト・ヴダに上陸して直ちにヴンダル都城に向ふ、スレクチ市まづ門を開きて迎へ降り、レプチス、アドルメツム以下風を望んで皆降り、ベリサリウス進みてカルタゴを距る廿里、ヴンダル王の城地クラッセに迫る、時にゲリメルは羅馬の征軍至るを思はず、弟をしてサルヂニアを伐たしめて兵衆在らず、カルタゴ附近に戰ひて敗れ、陰に人を遣りてヒルデリク王を刺さしめ、急に奔りてヌミヂアの漠中に遁る、ベリサリウス乃カルタゴに入りて歡迎を受け直ちに城壘を修補せしむ、ゲリメル間に乘じて散兵を集め、サルヂニアより歸りし弟の衆を併せプラに陣す、ベリサリウス之を擊破してゲリメルを南方に奔らし、初より三月を出てずして全くヴンダルを屈す、四方傳え聞きて來り歸り、サルヂニア、コルシカ、ミノルカ、井ヂサ悉く皇帝の威令を仰ぎ、帝は加特力教を復してアリウス派を禁じ、トリポリ、レプチスキルタ、カエサレア、サルヂニアの五公を立て、ヴンダルの舊領を七區に分ち、四領主、三頭目を置く、五百三十四年ベリサリウスはゲリメルを捕へて凱旋し、威望隆々古スキピオ以後第一人と稱せらる、

西ゴト王家の革命

東ゴト女后アマラスヰンタ

唇破れば齒寒し、ゴト今やテオドリクなく東方實にユスチニアヌスわり、海南のヴンダル屈して禍必ず海北のゴトに及ぶ可し、初テオドリクの外孫アマラリクの爲に西班牙の政を攝するや、將軍テウヂスをして國事を監し歲貢をラヱンナに納れしめ、其禍心を包藏するを疑ひしも、急に責めてフランクに歸せんとを恐れ、數徵せしも至らず、テオドリク殂してアマラリク年二十四、ナルボーンに都してローン河西の地を領し、フランク王クロヰスの女クロチルダを納れて妃と爲せしも、約に背きて其加特力教を奉するを許さず、フランク王は虎視膽々常に弱隣の隙を窺ひしかば機至ると爲し、言を逆約に籍き、妹クロチルダを復し、ゴトは西班牙に遁れ、五百卅年テウヂスはアマラリクをバルセロナに弑して王位を簒ひ、西ゴト王家の命を革む、而して東ゴトはテオドリク王殂して男子なく公主に尙せし太子エウタリクは王に先ちて薨じたれば、太子妃アマラスヰンターは遺命に因り太孫アタラリクを擁立して政を攝す、ゴトの俗素君王殂して男統絶ゆれば必ずしも王家を撰まず國中の英俊を立つ、故に今や女主を奉するを屑と

せずして、多くは將軍ツルヰンを立てんと謀る、ツルヰン前王知遇の恩に感じて從はず事乃已む、アマラスヰンターはゴトの疎剛を厭ひ羅馬人の文雅を愛し父王の世忌諱を避けて外に奔りし學者カッシオドルスを召還して宰相と爲しホエチウス父子の采邑を復して家名を立て、ゴトの濫暴を嚴禁し、加特力教徒を保護し、羅馬人の官吏を重用し地方の租賦を輕減し、一世の間遂に一個の羅馬人を罪せず、羅馬人爲に服せしも、ゴトの衆は悅ばず、母后がアタラリク王に騎射軍畧を教へずして讀書講學を進め文弱に陷るを憂へ、諸將相率ゐて后に謁して其非を諫む、アマラスヰンター力屈す可らざるを視、王を諸將に托し又容喙せざるを誓ふ、王は急に母后の嚴束を脱してゴト諸將に交り、蒲柳の質を以て酒色に耽溺し、餘生長からざらんとす、アマラスヰンター乃使をコンスタンチノプルに遣はし、父王殂落の年帝となりしユスチニアヌス帝に乞ひて、將來の禍亂を帝國に避けんとす、帝よりて先づ宮殿をヂラキンム(ヅラッゾ)に築きて之を迎へんと約し、アマラスヰンターは黄金四萬磅を載せて將に東に奔らんとし、發するに臨みて國内不平黨の領袖三將軍を邊境に派遣し、虛に乘じて王家の威を復せんとす、三將軍邊に赴くや皆刺客の手に殪る、蓋し王家の忠臣ツールヰンが策に出でたり、爲に非王黨の勢挫折し、アマラスヰンター又東せず、ユスチニアヌス帝は百方之を招かんと欲し、一方には女后の叔母にてヴンダル王家に嫁ぎ、隱謀發れて殺されしアマラフリダが前夫の出テーオダアドの女后を怨めるを見利を以て之を誘ひ、其領地ツスカニアを得んとし、他方にはベリサリウス既にヴンダルに克ちしを以て、アマラフリダが嫁資たりしシキリアのリヽバエウムを女后に求む、女后アマラスヰンター陽に諸臣と議して之を拒み、陰に機を視て國土を帝に捧げんと約す、帝大に悅び、更に都下の辯士テッサロニカのピエトロを遣はし女后と王姪と謀を合せんことを勸めしめ、后テオドラは女后の美を妒みて、別にピエトロに命じ女后をして東せざらしむ、然るにピエトロのラヱンナに入るに先ち、五百三十四年十月三日東ゴト王アタラリク肺を病んで殂す、アマラスヰンターよりて俄に甘言を以てテオダアドを誘ひ、自女王となり他を伊太利王と爲し、書を皇帝に贈りて繼承を奏す、幾ならずしてテオダアドはアマラスヰンターを羅馬の西北十餘里、ボルセナ湖中の一島に錮閉して獨位を簒ふ、次でアマラスヰンター浴室に弑

ベリサリウス、東ゴトをうつ

せらる、適ピエトロ至りてテオダアドの罪なきを辯し、自弑殺せりと稱しテオドえの重賞を受けたり、事隱微にして明にし難きもユスチニアスは之によりて宣戰の好辭柄を得たり、

抑此時帝國の兵備は太く衰へたれば假令稀世の名將ベリサリウスを以てするも、ゴトの內自動搖せるに非れば克つ可からず、故に帝は援をフランクに得んことを約し、ゲピドの將ムンヅスをしてアドリア海東より入らしめ、ベリサリウスに七千五百の兵を授けてシキリアより北上せしめ、ピエトロをして巧にテオダアドを說かしむ、ベリサリウスは兵を損ぜずしてシキリアを取り、ムンドはダルマチアのサロナを陷れ、テオダアド畏怖して國土を獻ぜんと云ひしも、ゴトの兵ゲピド軍をサロナに破り、ムンド父子戰沒するに及びて、ゴトの氣勢大に揚り、五百三十六年四月ベリサリウスはメッシナ峽を渡り、テオダアドの義子、南方の主將エベルムンドを降し、ナポリを圍むこと二十日、テオダアドの援至らざるもゴト兵よく守りて下らず、ベリサリウス終に水道より四百人を入れ、內外鼓噪相應じて之を陷る、テオダアド尙動かず、此に至りて羅馬附近のゴト始めて王を疑ひ、府

ヰチギス王

南レゲタに會して、功爲の賤人ヰチギスを立つ、テオダアド乃ラヱンナに遁る、怨を含む者オブタアリ新王の命を受け、晝夜兼程之を追ひて途上に殺す、ヰチギスはレウダリアに兵四千を與へて羅馬府を守らしめ、自ラヱンナに退き、テオダアドの一子テウダギサルを獄に投じて後禍を除き、故アマラスヰンター女后の公主マタスヰンターを納れて妃と爲して王統を正し、ガリア領を割き黃金二百貫を輸して援をフランクに乞ひ、切に兵備を修む、ベリサリウス三百人を止めてナポリを守らしめ、十二月九日羅馬に至り、敎皇シルヱリウスは門を開きて之を迎へ、ゴト兵は戰はずしてラヱンナに去り、レウダリアは囚へらる、ベリサリウス穀をシキリアに取り、兵を遣りてツスカニアを略してベルヂアに及ぶ、ヰチギス事漸く急なるを見、精甲十五萬を擧げ、五百三十七年三月來りて羅馬を圍む、ベリサリウス兵僅に五千を以て周匝五里に餘る府城を守り糧水の道絕え內外通ぜず、備に艱苦を嘗めて堅く守つて下らざる、こと前後一年九日、五百三十八年三月東方の援軍至り、ヰチギス圍を解きて退き、更にミラノを圍み、フランク王テウデベルトの兵を得て之を陷れ、市民四萬を屠り、婦女を婢妾と爲して、ブルグンヂアに

送り、城池を夷げ四周を威喝してリグリア全州を舉ぐ、ベリサリウスよりてゴトの將ヰサンドの守れるアウキシム、を陷れ、其衆四千を降して、ミラノ陷沒の報復を爲せり、ベリサリウスとヰチギスと斯く角逐せる間にフランク王アウストラシアのテウデベルトは大兵十萬を率て、アルプスを超えて北伊太利に下る、ゴト以て先約を履み來り援くと爲す、フランク王その備なきを攻めて之を破る、羅馬軍よりて以爲くフランクは皇師を援けてゴトを伐つと、然るにフランク軍進んで羅馬軍をも破り、連りにリグリア、エミリア諸州を抄畧して自利を計り、軍中疾病起るに及び、利品を獲せて北にかへれり、

フランク伊太利を割む

ベリサリウスは既に内外の憂を免れ、伊太利半島中威令の及ばざるはたゞラヱンナ府あるのみ、ラヱンナは兵尚多きも、ヰチギスは將畧なし、羅馬軍之を圍み糧道を絶ち王妃マタスヰンターによりて穀倉を燒く、城中食盡き力屈し、ユスチニアヌス帝も遙にベリサリウスの勳功大なるを忌みて和を圖らしむ、城中帝を信せずして、ベリサリウス王たらば之に降らんといふ、ベリサリウス權に之を諾し、五百三十九年十二月ゴトの迎ふる所と爲りて府門に入り、ヰチギスを宮中に

東ゴトはベリサリウスに屈す

徙し、ゴトの精英を簡拔して守衛と爲し、糧船を招きて府中を賑はす、帝聞きて益其異心を挿むを恐れしかば、適東波斯の事起るを名として之を召還し、ゴトの衆は抑留せんとせしも及ばず、ヰチギスの姪ウライヤをすゝめて王となさんとせしも、ウライヤ亦拒みて受けず、西ゴト王テウヂスの姪ヒルヂバドを奉ぜしむ、ヒルヂバド再びベリサリウスを立てんといひて用ひられず、遂に位にバヰアに即く、ベリサリウス乃前伊太利王ヰチギス及妃と與に五百四十年六月コンスタンチノプルにかへる、時に年三十五、ヰチギスは後縉紳と爲り、三年を經て薨じ、妃マタスヰンターは皇姪ゲルマニクスに再醮せり、

トチラ王の克復

ユスチニアヌス帝の世は法典を編輯して百世の範を垂れしも、土木兵革連に起り、財政靡亂し貪吏奸を爲す、ベリサリウス忌み徵されて後、酷薄貪婪「剪刀」の綽號を得しアレクサンドロス伊太利に趣きて誅求最甚しく、數月ならずしてゴト復畔き、羅馬兵は去りてヒルヂバドに歸し、皇軍總督無く諸將和せずして、大にトレヰソ附近に破らる、適ヒルヂバドは兇漢に斬られ、ルギアの人エラリク、ゴト王と爲りしも衆服せずして之を弑し、ヒルヂバドの姪、トレヰソの鎭將トチラ招か

れて王と爲り、バヅィラと稱す、皇軍の諸將帝命によりヱロナを襲はんとして能はず、急に南に走る、トチラ、之を追ひて途上に擊破し、再びムケラに戰ひてかち連りに諸市を拔きて、五百四十二年夏コノンの部兵一千をナポリに圍む、諸將救ふ能はず、ユスチニアヌス海陸二軍を遣はせしも破れ、ナポリ陷り、トチラは士卒を誡め敵を惠み下民を綏撫し、半島爲に靡く、帝の諸將敵する能はず情を具して帝に訴ふ、帝已むを得ずしてまたベリサリウスを起たしむ、五百四十四年三月ベリサリウス西征の途に上りしも、既に不遇の逆境に立ち神身漸く衰勞し諸將多くは命を用ゐず、兵士唯貪略を志して戰はず、トチラは年少にして氣鋭くゲチギスの比に非ず、さきにはよく少兵を以て大敵にかちしベリサリウスは今は大軍を擁するも少敵を盡くす能はず、精鋭の救助を帝に乞ひ、ヅラッヅに退きて兵の至るを待てり、是に於てトチラは羅馬府を圍む、トラキアのゴトなるベッサ固く守りて出でず、府中食盡きて援軍至らず、議院使をトチラの陣に遣はして和を議せしむ、トチラ城壁を殘壞し敵を助けし府民奴僕を誅せんといひしかば事成らず、府民乃ベッサに迫りしも、ベッサはベリサリウスの救必ず至る可しと爲して可かず、果し

トチラ王の末路

てベリサリウスは至りしも圍解けず、府民遂に外に走りて多く途上に死し、ベリサリウスは病みベッサ以下遁れ、五百四十六年十二月十七日トチラ羅馬府に入るや住民僅に五百を存す、トチラ甚之を憐み、使を遣はして和を皇帝に乞ひしも、帝は和戰一にベリサリウスに決すべしといひて應ぜず、適南方征討のゴト軍大に破れしかば、トチラ憤り羅馬府中を荒殘して牧野となさんといひしが、ベリサリウスの諫を得て已み、城壁を毀ち悉く府民を率ゐて去る、時に五百四十七年二月なり、ベリサリウス起ちて城に入り士卒に令して急に壘壁を修めしめ散亡の民を集む、トチラ驚きかへりて之を陷れんとせしも能はずして、之より衆望離る、然れども羅馬の恢復は一もゴト征服の道たらずして、ベリサリウスは神倦み、妻を遣はして召還を帝に請はしめ、五百四十九年早春遂に東に還れり、

時にトチラは使をフランクに遣りて王女を求めしに、王テウデベルト羅馬を保つ能はずんば豈伊太利王たらんといひて、拒みて應へず、トチラ之を漸ぢ、ベリサリウスの去りて後羅馬を陷れ破壁を修め、建築を起し議院を招會して、久しく廢れし馬戲を行ひて古都の壯觀を復し、船舶四百を艤し、レギウム、ダレンツムを

下し、シキリア島を伐ち、サルヂニア、コルシカを取り、希臘の沿海を脅かし、コルキラに上陸し、ニコポリス、ドゝナに抵り、書を皇帝に贈りて伊太利王たらんと請ひしも、帝應ぜず、教皇ボギリウス縉紳カテグスの歎訴を聽きて皇姪ゲルマニクスを將として西征せしむ、ゲルマニクスは將畧に通じ、殊にゴトのマタスヰンターを妃と爲せば、ゴト聞きて大に畏懼せしに、未だアドリア海を渡らずして病んで薨ず、帝乃奄孺ナルセスを總督に任ず、ナルセス時に年七十五、身弱きも志尚壯なり、軍資を吝まずして大兵を徵し直ちに北伊太利に上陸して南下せんとす、船舶足らずして能はず、大軍海に沿ふてラヱンナに至り、休息九日、アリミヌムの將ウスドリラをマレキア川に斬り、五百五十二年七月トチラとタギナ(タヂノ)に戰ふ、トチラ敵の力を盡くして來るを見、衆を勵まして曰く、若し勝たばユスチニアヌスを屈す可し、若し敗るれば吾曹遺類なけむ、勝敗ともに最後の戰なり、衆努力せよ、と、乃上下死を決して奮戰し爽味より晡に至り、死者六千、夜に入りてトチラ從騎と奔りて途にゲピドの一將に刺され、カプラに至りて殊す、位に在ること十一年、年三十六、英氣凛烈當時に冠絶して志遂に成らず、寧憐む可し、ゴトの散卒敗兵はトチラの殂後北に退き、將ティアを奉じて王と爲す、ナルセス進んで羅馬を陷れ、殺戮を逞うし、ゴトの殘卒火を府中に放ちて玉石共に焚け、ティア親ドチラが質とせし羅馬の貴族三百を屠り、久しく戰役に苦しみし伊太利人は此に至りて悲慘の極境に沈淪せり、

ナルセス、東ゴトを滅す

ティアは勢の日に衰ふるを見て巨額の黃金を贈りてフランクを招きしも、テウデバルド應ぜず、トチラの弟アリゲルンがゴトの財貨を守れるクマ敵の大軍に圍まるゝと聞きて至り救ひ、途にエスボウス山麓のサルノ河谷に至りてナルセスの衆に遭ふ、乃河を隔てゝ相對峙する二ヶ月、食盡きて奮鬪して死し、衆勢屈して尚降らず、唯再び戰はざるを約して免るされ、相率ゐて北方に去れり、然れども諸市に殘れるゴトの鎭兵は下らず、秋に入りて、久しく機を窺ひしフランク、アラマンの衆八萬伊太利に入るや、クマのアリゲルン、ルッカのゴトは羅馬軍に降りしも、他は皆フランクに應じ、火を所在に放ちて人を殺し財物を剽め、半島を横行してメッシナ峽に至り、ナルセス制する能はず、翌年春ナルセス始て之をヴルツルノ河畔カシリヌムに破り、フランクは北に退き、後一年の間に諸市相次て下り、ゴト

の衆或は放たれ、或は土民と混じて、クロビスの後ながく佛蘭西の先たるに似ず、英傑テオドリクの後は僅に八十年にして跡を拂へり、是よりナルセスは皇帝の外藩王としてラヱンナに駐まり、伊太利の政を執りしが、世益下りて半島益亂れ、帝の伊太利經畧は何の得る所なくして已めり、

コスロエス一世の內治

始波斯王コバードは少子コスロエス(コスルト、一字をアヌルシルワンといふ)を愛し、五百三十一年殂落に臨み遺命して之を立てしむ、長子カオセス(カオース)位を爭ひて內亂作りしも、聖師貴族皆遺命を重んじて應せず、次子ザメス新王を弑せんとせしも事發れ、王は諸兄弟諸父姪等四十王を戮して將軍貴族に及び、獨少年コバード逝れてコンスタンチノポリスに走る、王は又嚮に誅殺を免れて後陰に新教を弘布せしマヅダーク及び其徒十萬を誅して國內の動搖を鎭壓し、ダラヤヴシュ一世以來初て大に法令を革新し、藩王多くして統率なきを以て、之を四級に分ち、各級に總藩(副王)を置きて所屬に號令せしめ、親しく四方を巡幸して寃枉を伸へしめ、重罪は法院の審議を經て斷じ、虐官酷吏は謀反と罪を同くし、厚く

苛生を惠み、從來收獲によりて定めし租額を土地に就きて一定し、別に菓樹奴婢に課稅し農耕を進め軍制を改め道路を脩め、人煙稀薄の地には鎭屯を置きて移民を謀り兵營を設けて來往を衛り、盛に外人の歸化來觀を勸め、美術工藝を護り學術を好みて大學をシャポールに搬む、治平前後四十八年、內治の良政此の如き以て王の德を頌するに足る、加ふるに外征の蹟赫々たるものあり、洵に「正王」の尊號を得て贊薩王朝の黃金時代と稱せらるゝ所以なり、

コスロエス一世の外征

先王の末和を羅馬帝國に約して、波斯は黃金百餘貫を受けしも、コスロエス立ちて後羅馬帝が西征南伐志を擅にするを見て、其膨大を思へ、五百四十年親西征して志利亞に入り、連にヒエラポリス、ベロニア(アレッポ)、アパメア、カルキス等を攻めて贖金を强奪し、アンチオクを陷れて城市を毀ち、パレスチナ、エルサレムを剽め、將に陸軍は小亞細亞の野を掩ひ水師は黑海の涙に浮びてコンスタンチノポリスに迫らんとす、ベリサリウス乃伊太利より徵され還りて東に向ふや、五百四十二年王は戰はずして退きしが、其再び西して、羅馬の十五將兵三萬を引きてアルメニア山間より出づるや、僅に四千の波斯兵に擊破せられて和を議す、之より

先五百二十二年古コルキスの地に住せるラジカの民基督教に歸依して羅馬帝に應ぜしが、後また波斯に通じ、聖師拜火教を宣傳するに至りてまた擾亂を作し、其地東西交戰の區となり、ペトラ堅壘の圍の如き最激戰の狀を見る可し、初は波斯軍八萬難を排してペトラを陷れ千五百人を以て之を守る、羅馬軍來り圍み、城中の兵亡びて三百人を殘すに至り、メルメロエス衆三千を以て來り救ふ、羅馬の將ベッサス至り助けて之を圍み、波斯兵七百防戰に死し、其千餘人は陷るに及びて戰死し、殘るところ傷を蒙らざるはなし、而して波斯王は殆んど其地に克ちしに、メルメロエス病沒し嗣ナコロゲンは利を失ひ、五百六十一年に至り王は羅馬帝より償金を得て其地を棄てたり、然れども、ラジカの失はコスロエスが一世の一失のみ、アビシニア人の新に基督教に化して紅海を渡り亞剌比亞・フェリックスに渡來するを見て、王はその年を經て半島を風靡し遂に羅馬に通じて國患たらんを知り、海上より援兵を遣りて亞剌比亞人に力を借して之を伐たしめ總藩王（マニダバーン）を置き、半島を服し、また速に嚮嚮を攘ひ新興の突厥の西侵を防ぎ、五百七十二年復羅馬と戰端を開き、其東南の重鎮ダラを圍むと五ケ月にして陷れ、黃金四萬アウレイを得て休戰を約したり、時に羅馬のユスチヌス帝の世に當れり、五百七十九年王クテシフォンの王宮に殂す、位に在ること四十八年、アヌルシルワン正王の英名は永く波斯の史乘を照らせり、

ブルガリア人の南下

羅馬帝國の衰ふるや最勢を東歐に振ひしは雄名雷霆の如く鳴りしフン族なりき、然るにアッチラ大王一ひ殂して後亦振はず、遺衆メオチス湖畔、黑海の濱に退きテオドリク王に破られしが、東西スラヴと與に剽畧を業とし、所謂ブルガリア人として勢猖獗に、ビザンチウム皇帝が東波斯と和し南亞非利加を降し西は東ゴトを平ぐる間に北方より南下して、對北の警備なきコンスタンチノプルを震駭し、イオニア灣に至る三十二市を荒殘し、トラキア、ケルソネスヽ壘を踏破しヘルレスポンドを渡り、希臘を蹂躪し、五百五十九年冬其魁師ザベルガン七千騎を率て帝都の外數里の地に迫る、府中兵馬無く大官議員皆驚き惑ひ、府民心膽破る、ベリサリウス乃徵されて、兵數百を以て地利によりて之に當り僅に勝つを得しも、敵騎星馳逸し去りて追ふに及ばず、かへり來れば帝悅ばず、四年を經て弑逆の徒ありて事發はれベリサリウス亦與ると白せしかば、五百六十三年十二月ベリサ

ユスチニアヌス帝の殂落

リウスは獄に下り、後釋るされしも幾もなくして五百六十五年春遂に逝く、而してユスチニアヌス皇帝の三十八年の治世亦盡き、此年十二月十四日、八十三歳を以て殂落せり、次に羅馬法典完成の學を叙して帝の名を不朽に傳へしを示すの外、敢て玆に內治外征につきて功過を論ぜず、唯治世中の天災地異二三を記して已まむ耳、

地震と疫疾

帝の世彗星屢見はれ地數震ひ、コンスタンチノプル震ふこと四十日、五百廿六年五月アンチオク地震ひて死者、廿五萬と稱し、五百五十一年七月には民法の研究を以て有名なるアオエニキアのバリッス地震ひ學校毀たれ、多く有爲の俊才を失へり、而してエチオピア、埃及より疫癘發生して廣く天下に流行し、五百四十二年以后東は志利亞、波斯より印度に及び、西は亞非利加の沿岸より歐洲大陸に入り東西其災を蒙ること五百十四年に至りて前後五十二年、其盛なるやコンスタンチノプルの如き、初は每日五千人、後は一萬人の死者を出せしと稱す、假令正確の數知る可からざるも、由て以て帝國の衰微を來す一原由たりしや論なし、

羅馬法制の起原

ユスチニアヌス帝の外征は殆んど失敗に終れり、唯其名の千載の下に赫々たるは羅馬法典完成の大業に由る、帝が欽命の下に輯定せられしコデキス Codex ヂゲスツム Digestum (パンデクテ Pandectae) インスチチュチオネ Institutiones は間直接に現時諸國法治の典型精神と爲りたれば、假令羅馬帝國の運衰ふるも、征服と敎法との外別に西方を支配する此法の爲めに特に一段を劃かざる能はず、

上世羅馬の政府は撰擧王貴族庶民の二會議よりなり、元首は宣戰祭祀を司り、法案を發して貴族會の論議庶民會の協贊を經て始めて法律と爲る、王朝の末王權重く王政破れて後貴族權を私せしも、當初の治制尙存し、政權移下の勢抗し難くして十二銅表法成る、リヰウス、ヂオニシウス等の說によれば當時委員を雅典に遣はしソロン以下の法典を調査せしめ、之に基きて此法を作りしといふも、近時學者羅馬舊來の遺法なりとなす者多し、其孰に出でしを論せず、此法は當時羅馬第一の法として衆庶の尊重を受け、ガリア人の兵燹を遁れ法家の引援註記する所となりしかば銅表烏有に歸して後なほ遺制を存し得、唯歷世續出する諸法

羅馬法制の歴史

令多くして實際には其本を沒するに至りしなり、

始セルヰウス王の新法には公民會議にて第一級の公民投票の過半數を有し其法はレゲスLegresたりしに幾もなくして管區制と爲り、民庶稍立法權を得て其會議に出づるプレビスキタPlebiscitaは名を異にせるもレゲスと同しき効力を有し、次て共和時代には議院も立法に容嘴し、セナツス・コンスルタSenatus Consultaも亦法律の力を具へ、チベリウス以下諸帝は帝權を侵さゝるかぎり諸種の特典を設けて議員の歡心を買ひしかば、議院の議決しば〳〵法律となりて出でたり、然れども羅馬法の最主要なるものは司直(プレトル)の令なり、司直は有數の法律家を招きて年毎に法案を起草し、名義上裁判訴訟の法を公示し無私不偏を證する意にて、之を民庶に公布す、而して一び宣布せし條文精神は後にて變更する能はず、稱して永定と爲す、故に司直は十二銅表法を離れ得ざるが如きも、時勢の變に伴ひ條欵に不備を生ずれば時の宜によりて新に補修せり、アドリアヌス帝の時司直たりし有名なる法律家サルヰウス・ユリアヌスの制定せし永定の法令はよく前制の缺點を補ひて殆んど遺漏なく後世法令の典型と爲れり、

皇帝の法令

帝國の民皇帝法(レックス・イムペリ) Lex Imperii (即Lex Regia)によりて統治權を皇帝に歸してより、諸帝始めて立法に與りしも、アウグスツス以後トラヤヌス帝に至るまでは、なほ慣習の故例を重んじて、帝治以前諸官制の名を假りて法令を發布し帝の詔勅は議院の令中に挿入せられて世に出でしが、ハドリアヌス帝に到り、始めて自直ちに勅令として法を布けり、蓋し帝の英俊詢に此刷新を爲すに適せり、然るに爾後の諸帝之に倣ひ皆欽命上諭を發連して、テルツリアヌスがいへる如く、古法の深林を勅令憲法の斧斤を以て伐撫し、ユスチニアヌス帝に至るまで四百年間、公私の諸法令は一に帝意に出で、勅諭、勅許、勅宣、批准は諸州に行はれ、官守奉じ民庶服せり、奈何せむ、年移り時を經て法繁く令多く上意明ならずして適從に苦しむを、よりてグレゴリウス、ヘルモゲウスの二法家ハドリアヌス帝後コンスタンチヌス帝前の諸法を類纂し、次で少テオドシウス帝の時勅令を下してコンスタンチヌス帝後の諸法を纂輯して十六卷に編成して三篇の法典成れり、

三法典

羅馬法學の變遷

人文の進まざるや記述の法精しからず、公私の施行に目證多し、上世羅馬の法は科作を以て言辭に代ふ、例之ば婚姻の約には火水を以てし、離婚を證するは鍵

鑰を交讓し、兒童の自立、奴隸の放釋には類を叩き、石を投ずれば業を休め、技を折れば時効を已め、拳を固むれば付托を證し、司直の庭に原被兩造は決鬪者の如く互に相扼し、地を爭へば土塊を呈して其意を示す等のことありしも、ヌマの法、十二銅表等出でゝ科示の風漸く少く、之より法制律令の進歩を爲し、ユスチニアヌス帝に至るまで略一千年間、學風の隆替變化によりて自三期に分つ可し、第一期は紀元前四百五十一年乃至仝百六年にして、法學は一部人士の間に止まりて、法家は自高く標致し公會の日は公場に出でて市民を指導し、年熟し名聲揚れば、足戸を出でずして四方賴依の客門前に市を爲し、羅馬法學士（ユリス・コンスルト）Juris Consult の一家言を立てゝ門下の諸生、同族の子弟に傍聽をゆるし、子孫業を繼ぐ、ムキアヌス家の如きは奕世羅馬私法の名家なりき、然るにキケロ出でゝより風潮一變し、二百三十五年阿歷山セルヰウス帝に至る迄、法學の隆昌は學系生じ學聲起り法典の編成ありて現行古代法ともに研究せられ、カッスの綽號をうけしアエリウス・パエッスの三分法は斯學の最古き者にしてカト父子また益を開き、ムキウス・スケヴラ名を法界に垂れしも之を完成せしはセルヰウス・スルピキウス師弟の一派にして之を結びしはパピニアヌス・パウルス、ウルピアヌス等なり、之を第二期とす、之に次ぎて阿歷山、ユスチニアヌス兩帝の間約三百年は野人繼族四方より起り、僭主政を私し、教法共に廢れたれば、羅馬コンスタンチノポリスの主はたゞ前期祖先の遺法を守るにすぎず法學暗黑の時代と謂つ可し、

哲學法學の關係

羅馬の古法に法理の起りしは希臘哲學傳來の結果にしてスルピキウスが眞僞正邪を分つために、アリストテレスの論理法を用ひ、汎漫なる法律に生命修理を與へんために畫廊派の哲學を用ひしに始まる、假令此哲學の逆說、所論の固執、用語の言質等の弊習を受けたりといへども、實質よりは形式を重んじ罪同じければ被害の大小によらず罰を同うする如きはトレバチウスの學說より出でたり、而して法家の論を以て益ありとなすはアウグスツス、チベリウス二帝に防まる、然も帝は之を利用して法學を上流に限り學識ある者も其家に非れば納るゝ能はざらしめ、ハドリアヌスに至るまで此禁解けず、而して司直は師說によりて獄を斷じ法官は法の正文と同じく註疏を重んじ、アウグスツスは遺言添書の有功を認め、法家、皆說を一にする時は帝命といへども動かす能はず、蓋し羅馬法家

法家の流派

にサビヌス、プロクルス二流あり、アテイウス・カピトはサビヌス流の祖、アンチスチウス・ラベオはプロクルス派の祖なり、ラベオはアウグスツス帝に重用せられて帝政を皷吹し温和中正の說を立て、カピトは帝に反して共和の精神を主張して改革の異見を持し、一は帝政派、他は共和政派と目せられて朝野に對立す、次でカッシウスベガス、亦其流をうけ、ベガス、はドミチアヌス帝の順臣たるも名聲を民間に得、カッシウスは弑君の後なるも却つて帝王に尊重せられ、ハドリアヌス帝はサビヌス流を用ひしも、サルヂウス・ユリアヌスの温厚なるにあひては此流の特遇を失ひ、アントニヌスの世は哲學界と同じく法學界にも卓秀の士は流派を問はずして用ひられしが、法令繁多、異同重複、司法の事、雜冗にして裁決擧らず、少テオドシウスの世に及びガイウス、パピニアヌス、パウルス、パルピアヌス、モデスチヌスの五法家をして法令を司らしめ、所決をパルピアヌスに採らしめたり、勢此の如くなれば歷世法繁くして定書なく、司直判官家貧く通覽宏索の便缺け、朝廷東遷して羅馬希臘言文を異にし、ユリアヌス帝位に即きて法典完成の急務を認む、帝よりてパムフィリアの偉材トリボニアヌスを拔擢して總裁と爲し此大

ユスチニアヌス帝の法典纂輯の業

任を委托し諸法家を徵して法典を協修せしむ、トリボニアヌスは當代諸般の學に通じ希羅兩語をよくし殊に今古の法學に精しく、多く典籍を藏し、身を司直に起して累進す、法典修輯の適任者なり、

ユスチニアヌス帝即位の元年トリボニアヌスは九委員と與に、グレゴリアヌス、ヘルモゲニウス、テオドシウスの三法典に就きてハドリアヌス以來歷世の法令を重修刪定して、十四ヶ月を經て、五百三十九年十二卷の欽定法典成る、名けてユスチアヌス法典と曰ひ、書寫して國內の諸州に頒つ、則コルデキスなり、次で諸法家の註釋家說を類纂して法文の精華を摘抉するため、トリボニアヌス以下十七員修定に從ひ、著名なる四十法家の書を撰拔し、その二千篇を剪約刪修して、三百萬節を僅に十五萬節となし、五十卷あり、五百三十年十二月に業を起し、三年を經て五百三十三年十二月十六日に成る、ヂゲスツム則パンデクテ是なり、然れども斯書尙浩瀚初學に適せずとし、トリボニアヌスを長とし三委員に命じ、要を摘み粹を拔き、階梯四卷を作らしむ、ヂゲスツムに先つこと一ヶ月、五百三十三年十一月に成る、インスチチュチオネスといふ、三典既に成りて專法院に用ひしめ、獨羅馬

其評

コンスタンチノポリス、ベリツスの學校に於て教授せしむ、

ユスチニアヌス帝の法典は前朝法令の類纂にすぎず、其撰擇編修刪定の功を功とす可きのみ、然るに帝は公平に諸皇の令を按じ、且ハドリアヌス帝以外に出でざればテオドシウスの目せし基督教異宗の別の如きは之を認めず、唯バンデクテは永定法令以下アレクサンドル、セエルスに至る百年間を出てず、帝政初代法家の說甚少く、共和時代に至りては唯三家の說を採るのみ、故に自由共和の精神を排したりと爲す者あり、蓋し當世制法の用は治國の爲にして學問の材と爲すに非ず、古羅馬の法令を焚き、帝政の爲に克上の災を除きたりとの說を信ぜざるも、印刷公刊の術開けざる當時、無味なる法典の價廉ならずば、孰か好んで之を藏する者多からん、上世の遺法用ひられざるに從つて亡びしや論なし、バンデクテの如きすら、殆んど散逸亡失の災を免れざらんとし、今存する所は七世紀の始、コンスタンチノポリスにて謄寫せしもの、戰亂通商の事變に遭ひて、アマルフィ、ピザ、フィレンツェに傳はりしなりといへり、況や其の他をや、帝既に法典を定む、後來改削の起るを恐れしかば、所定に違背せる諸家の說は僞闢を以て斥けしと雖も、帝

インスチチユチオネスの概人

自時に其禁を犯さゝるを得ず、治世久しくして諸法纂出し、間もなく同法典を增補再修し、別に單行法として出せしもの、改正せしものあり、五百三十四年より五百六十五年に至る間に十六勅令百六十八條のノヴエル・コンスチチユチオネス Novelle constitutiones あるに至れり、

ユスチニアヌス法典のインスチチユチオネスは四部に分れて、人、物、行爲、私犯及び刑法より成れり、人は始公民奴隸の別ありて生母によりて決し、奴隸一び放釋せられて自由の民と爲るも直ちに公民の班たるを得ざりしに、こゝに至りて此別なく、家長權最大にして子は奴と與に家產に等しく賣買死生皆父權にあり、高官と雖も免れず、三び釋るされて初て獨立するは更に奴に劣れり、後父權稍衰へて子を罪するは判官の手を經るに至る、コンスタンチヌスの時始めて弑父の法あり、妻も初は夫の手に養はれその下に屈せしがポエニ役後漸く地位を高め、婚嫁の自由生じたり、但基督教の盛なるや神媒となせしも、羅馬法典は宗教外に卓立して僧侶寺院の容喙を許さゝりき、離婚は夫は父として妻を女として賣買し奴として之を棄てしも後對等となり、嫁資返償の法すら起れり、血族結婚相奸は

物

行爲

羅馬人の忌むところにて外人との雜婚をも斥けたり、後見は父之を定めざれば近親、々々なければ司直之を定む、所有權には法律の所定若しくは占有の實行によりて公認されし完全の所有權(Mancipium jus Quiritium)と、然らざる不完全の所有權(in bonis habere)あり、公認には證人又は吏員の面前にて引渡すもの(Mancipium)司直面前にて引渡すもの(In jure cessio)判官の分つもの(Adjudicatio)特に法令の所定に基きし引渡(lex)動産は一年、不動産は二年を限りて有するもの(Usus)あり、然るに商業發達し國富增加するに及び嚴正の引渡を經しものと單に引渡により て得し物の區別を爲す要起り、上記の手續の何れかを經たるを res mancipi 然らざるものを res nec mancipi といふ、素より學者の說區々たり、相續は諸子孫平等に分配して長子の特權なし、遺言讓與は初は嚴正なる儀式を要せしも後之を要せず、其の他遺言添書のこと、信托(Fidi Commissa)あり、契約は如何なる確約盟誓も正式の約定によらされば功なく貸借は一時貸借にて直に其の物品を返戻すると(Commodatum)代償物を以てすると(Mutuum)の別あり、土地家屋勞働の約は最繁雜を極めて其利益を保護し、奪畧盜難等の損害は飽くまで之を追求し、一び盜まれ

犯罪

し者は幾度轉々人手に渡るも三十年間は原主の復回をなすを得、罪の死に抵る者九、國賊公敵、夜陰の會合、府民を殺害せし者、放火人、法律上の僞誓、收賄の法官、讒書落首を爲す者、夜盜邪術妖法を用ふる者、是なり、後世宗門の法に存する重姦罪は羅馬法になきところ、私盜は私犯として取扱へり、裁判權は初君王に在りしも後人民の手に移りしが、人衆く事繁くして審官 Guesitors を置き、後四司直(プレトル)を常置し、シルラ以下其數を增加せり、然れども實際は士民より撰ぶ多數の判官の議によりて宣告を下すにすぎず、若し罪を知つて自外國に脫し或は自殺する者は、罪惡の名を清うするものあり、

以上はユスチニアヌス帝輯修の法典に規定せる法制の概要のみ、若し夫れ羅馬法の詳は別に學者研究の書と道とありて今贅せず、請ふ章を改めてユスチニアヌス帝後の史實に移らむ、

第九章　薩賛朝の盛世及ロムゴバルド

東羅馬と突厥の交通、ロムゴバルド王アルボイン、ロサモンドの末路、チベリウス帝、伊太利のロムゴバルド王國、羅馬教皇興起の源、波斯

のホルマヅド王、コスロエス二世の即位、マウリチウス帝の晩年、フォカスの簒奪、コスロエス二世の西征南伐、薩賚王朝の極盛、東羅馬の危機、ヘラクリウス帝の奮起、ニテヂ府趾の戰、コスロエス二世の末路、東羅馬と波斯の和、

東羅馬と突厥の交通

五世紀の中葉以降中央亞細亞に起りて東西文明國の間に昌運を開きしは突厥なり、突厥は土耳古種の一、初金山の麓に居りて阿史那姓を稱す、其大にして東の方拓跋魏に通せしは五百四十五年(魏の大統十一年)にして、西の方羅馬に通せしは稍後れてユスチニアヌス、ユスチヌス兩帝交替の際に在り、蓋し東征西伐連に地を拓き、魏に通ずるの後十年を出でずして、其領土東は遼海より西は青海に及びしかば、土耳古の一種アヴル鉾を避けて西に奔り、カウカスヽ嶺下に至り、五百五十八年使をユスチニアヌス帝に遣はして保護資給を求め、ダナイス、ボリステヂスを横り、中部歐羅巴を蹂躪し、ブルガリア、スラヴ諸族を屈す、帝之をバンノニアに置きて新興のロンゴバルドと均衡を保たしめんとす、突厥可汗の使後を躡みて西し、コンスタンチノプルに至りて好を修め、其敵を庇護する勿れと請ふ、帝之を許るし、羅馬の使金山の下に至りて可汗に謁し、羅馬突厥始めて通ず、然るにフンのアッチラ大王殂して以來ゲピト族ダニヴ河外、上ウルガルン地方を占有し、此に至りよく長槍を用ひてロンゴバルド(長槍)の名を得し一族、帝の許可を得てバンノニアに入るを得、遂にアドリア海邊を侵略す、其酋アウドインの子アルボインは驍武善く鬪ふ、フランクのクロヰス王の女を納るゝの約ありしも、嘗てゲピド王クニムンドの女ロサモンドの美を見て之を求め拒まれて戰端を啓く、羅馬帝ゲピドを助け、アルボイン志を得ず、利をアヴル可汗に除はして援と爲し、五百六十六年クニムンドを破り殺し、女ロサモンドを奪ひてゲピドを滅ぼす、羅馬帝ユスチヌスはユスチニアヌスの姪にして、新に帝位に即きしも之を救はず、アルボインの名聲頓にテウトン諸國の間に高く、翌年日耳曼以下の諸族を合同して伊太利を征す、時にラヱンナの外藩王ナルセスは誅求急にして民畔色あり、ユスチヌス帝乃新にロンギヌスを以て代ふ、ナルセス憤りてナポリに退き、ロンゴバルドを招き、次て暴に逝く、アルボインはユリア嶺より北伊太利に下るに、沿海の士氣尚銷せざるも伊太利內地の民は外人到底抗し難しと爲し、一人も起つて爭ふ者無く、外藩王は日に領土の蹙まるを奏し、アルボインは勞せずして半島を

ロンゴバルド王アルボイン

ロサモンドの末路

風靡しパヴィアに都してロムゴバルド朝を起し意を民政に用ひて治平を致し、是より後其地ロムバルヂアの名を生じ、其民商業に力め理財に長じ、中世に至り西歐を通じてロムバルドは銀行金貿の汎稱と爲れり、然るにロサモンドは始よりアルボインと好からず密に侍臣ヘルミキスに通じ、エロナ宮中に宴あるに乘じてアルボインを刺して父の讐を報ゐ、故のグビドの餘衆を領して其地に君臨せんとす、ロムゴバルドの諸將はアルボインの爲に怨を報せんとし民も亦服せず、ロサモンド、ヘルミキスとゲビド兵を率ゐポ河に浮びて下り、ラヱンナに奔りて外藩王ロンギヌスに投ず、ロンギヌス其美と富とを見て喜び迎へ、ロサモンド亦之れを迷はさんまづ毒を進めヘルミキスを除く、事忽發れ身亦毒を仰ぎて斃ず、ロンギヌス乃その公主及財貨を帝に上つる、時に五百七十三年なり、國人よりてパヴィアに會し、將軍クレフォを立てしも、一年を經て之を廢し、其子アウターリスは幼冲にして威令行はれず、伊太利亂れ僭主紛々として起り、十年間殆んど寧日無し、

ビザンチウム帝國はかく外難相踵ぎ內亦治安を得ず、暴官貪吏秕政多く民庶怨嗟の聲下に沸ち、ユスチニアヌス帝病を得て大政を總ぶる能はず、五百七十四年后ソフィアの言を納れ、禁衞の長官チベリウスを擧げて政務を視せしめ、四年を經て五百七十八年に殂し、チベリウス二世位に即く、ソフィアはチベリウスと婚して后位に在らんとせしに、チベリウスの私配アナスタシア皇后となりしかば、志成らず、よりて東征の將軍グルマヌスの一子ユスチニアヌスと與に廢立を謀り、事現はれしも、チベリウスは寛仁、措て罪を問はず、帝位に在ること四年、五百八十二年位を東征の功高きマウリチウスに讓りて殂落す、

チベリウス帝

伊太利のロムゴバルド王國

時に伊太利ロムゴバルドのクレフォの遺孤アウターリス既に長じて衆を領し、五百八十四年以后北伊太利に君臨し、三びクロヴィスの孫フランク王キルデベルトの師を破り、南はカラブリアに至りて、レギウム海岸の圃柱を王國の南境なりと揚言せしも、皇帝民庶皆爭ふ能はず、五百九十年殂して嗣無く、妃テオドリンダはツーリン公アギルフを撰びて後と爲し、アリウス派より加特力派に改歸せしめ、教皇グレゴリヨより有名なるロムゴバルドの鐵冠を得たり、冠は圓冠にし

て黄金珠玉を飾りたるも、技術の精巧は名の顕著なるに及ばず、蓋しロムゴバルドの技巧建築は總て羅馬式の舊套を襲踏して稍國風を混ずるのみ、其純粋の國風を見る可きは交叉穹廬式なり、かくて初半島に入りしロムゴバルドの數は多からざるも、よく北方に蟠踞して散せず、力を協せて國人を制御しパヴィア附近に國會を開きて王國の基礎を立てたれば、假令爾後二百年外ラヱンナ駐在の皇帝領外藩王と半島の主權を分ち、後のロマニヤ、フェラヽ、コムマキオの谷、リミニ乃至アンコナの五市、アペンニニ山アドリア海間の五市羅馬ヱネチア、ナポリの三領地は皆外藩王と進退を共にし、サルヂニア、コルシカ、シキリア三島亦帝命を奉じたりと雖も、地四方に離隔散在して團結强固ならず、幾ならずしてナポリは公國と爲り、アマルフィは商業地として獨立しヱチチアは自立の實を具へて共和府の源を開きしかば、ロムゴバルド王國は半島の覇長たりき、

羅馬府は上世の大帝都たり、然れども帝國亡び半島亂れ數戰亂の區と爲りてより資積盡き戸口凋落し、今や衰微の極に陷れり、唯そのテーベス、バビロンの轍を踏まざるは基督教のその命脈を保持すればなり、其漸く復興するは教皇の勃興に頼るなり、マウリチウス帝の世、聖ピエトロの法位を繼ぎし者をグレゴリと爲す、グレゴリは府中の名族に出て、身を法門に寄せ、ロムゴバルド侵入の時コンスタンチノプルに赴きて東方の狀況を視察して歸り、五百九十年ペラギウス二世の後をつぎて、西方の教主と爲り、自奉ずる儉素、事に臨んで果決善く斷じ、帝都の教主が自世界大僧正と稱するを刺り、自羅馬の僧正半島の教正、西方の使徒を領して、新に禮拜式を制定し伊太利西班牙のアリウス派を教化し、宣教師四十人を遣はして二年間に英國にケント王已下一萬人を教徒と爲し、職に在ること十三年、當時なほ教皇の名あらざるも其事業は優に他に超絶して、斯に中世歐南に權勢嚇々たる教皇興起の源を開けり、

羅馬教皇興起の源

之より先波斯は五百七十九年コスロエス一世(アヌルシルワン正王)殂し、突厥種の妃ファキムの出ホルマヅド(ホルミスダス)位に即き固より父王の英偉に及ばざるも、始は精を勵まし治を圖り國内無事なりしが、後漸く民心を失ひ、バビロン、スサ、カルマニア諸州畔き、亞剌比亞印度、スキチアは貢賦を輸せず、羅馬帝は西よ

波斯のホルマヅド王

コスロエス二世の即位

りメソポタミア、アッシリアを侵し、突厥可汗の衆三十萬東よりオキスヽ河を渡る、王の將軍バーラム・ショベエン軍破れて黜けられ、憤りて叛き、部下に擁せられて王號を僭す、王師之を征して王に叛き、別に、王子コスロエスを立て、其外叔父ビンドエ、ボスタム貴族と謀りてホルマズド王を幽し、尋で之を殺す、コスロエスの此謀に參りしや否やは明ならざるも、父王弑にあひしかば、五百九十年夏位を正し、使をバーラムに賜ひて之を徵せども、バーラム應せず王乃之を征し、ホルワンに戰ひて利を失ひ、クテシフォンに退き、妃妾諸父と從騎三十を率て夜に乘じて西奔し、キルケシウムの羅馬壘に投じ、書をマウリチウス帝に上つりて救援を需む、帝ベルサルメニア、メソポタミアの一部、ダラの壘を得るの約を結びて、將ナルセスに兵七萬を授け波斯を救はしむ、時にバーラムはクテシフォンに在り、法を發し政を聽き全國反く者無かりしに、コスロエス大兵を得てかへるに及びて勃王の師所在に蜂起しバーラムの先鋒ブリザキウス、エウフラテス河畔に敗れ、クテシフォン陷り、殘兵六千悉く敵に赴きて死し、バーラム・ショベエンは突厥に奔りしも、コスロエス黨の爲に毒殺せられて亂平ぎ、五百九十一年コスロエス二世復祚す、波斯人

マウリチウスの晩年

フォカスの簒奪

の所謂バルエエズ(勝利の義)王是なり、

羅馬は波斯の危機を利用して地を東に拓きしも、北アヴルの災あり、ロムゴバルド伊太利に去り、ゲピド衰へてよりアヴルは西アルプス山麓より東黑海に亘り、五百七十年以後バイアン可汗の世勢益强く、シルミウム、シンギヅヌム(ベルグラデ)を陷れ以てコンスタンチノプルに至る二百五十里馬蹄の蹂躪に委す、皇弟プリスクス之を攘ひ、可汗の四子を斬り六萬人を殺し、一萬七千を虜にし、備無きをうちて大にゲピドを破り、トラヤヌス帝以後絶無の北征を爲せしが、バイアン可汗都城を脅すに至りて急に南に蹄れり、然るにダニヴ河畔の鎭兵は一編將フォカスを奉じて反し、急に都城に迫る、城中內應して火を放つ者あり、帝は后妃諸子とカルケドンに遁れ、聖アウトノムス殿下に隱れ、長子テオドシウスをして電馳援を波斯王に諸はしむ、三日にしてフォカスの追騎至り、まづ五皇子を殺し終に帝を弑す、時に六百二年十一月廿七日にして、帝は在位二十年、年六十三フォカスまた急にテオドシウスを追はしめて之をニケに殺す、唯后妃公主を害せず、后乃帝の爲

に仇を復せんとするもの二回、事發はれて諸公主と與に亦カルケドンに斬らる、フォカス帝位を得しも文武ともになく政法軍事一も通ぜず、放情肆欲荒淫にして國事を念とせず、横虐カリグラ、ドミチアヌスに比せらる、女婿クリスプスは天下の亂久しからずして生ぜんと思ひ、先づ亞非利加の外藩王ヘラクリウスを招きて義を唱ふ、ヘラクリウス急に起ちてコンスタンチノプルに至り、フォカス帝を弑し、議院人民に歡迎せられ、六百十年十月天位に登りたり、

コスロエス二世の四征南伐

始マウリチウス帝の時コスロエス二世は復位の恩に感じて互に交を修め好を通じ、羅馬波斯の邊境烽火驚かざると十二年、マウリチウス弑に遭ふや、コスロエスは復仇の師を起し親西征して羅馬の將ゲルマヌスを斬り、敵の大軍をアルクサムスに降し、ダラスを圍むと九月にして之を陷れ、六百九年志利亞に入り、ヘラクリウス立つに及びアンチオクを陷れ、後六百十四年波斯の名將シャール・バルズはダマスクスを取りエルサレムを圍むと八十日にして陷れ、聖殿廟宇兵燹に罹り、三百年來の蓄積一朝に蕩盡し、死者五萬、捕囚三萬五千、高僧ザカリア亦其中に在り、聖傳の十字架はクテシフォンに輸せられて、基督教に熱心なる王妃シレエンの手に落ちたり、次で六百十六年シャール・バルズは更に進んで九百年前波斯に叛き去りし埃及に入り、旗をニル河畔に樹て、アレキサンドリアを陷れ、ヂオクレチアヌス帝の親征以後内外の兵革を見ざりし地を下しキレチの希臘殖民を盡くしてエチオピアの境に抵る、之と同時にコスロエス・バルエエズ王の別軍は小亞細亞を西し、將軍シャヘーンの鐵騎ボスポルス峽に至り、一葦水を隔てゝコンスタンチノプルを俯瞰し、包圍數ヶ月、六百十七年カルケドンを陷れ、ボンツスの沿海アンキラ市、ロデス島皆風を望みて降り、カエサル、ポムペイウス以下羅馬の幾英主が尺寸を爭ひて數百年間に克ち得し地は、コスロエスが十五年間の征畧により復寸地を剩さず、埃及、亞剌比亞、パピロニア、志利亞、小亞細亞、メソポタミア、コルドイチ、アルメニア、メヂア、バルチア、ヒルカニア、ベクトリア、ソグヂアナ、アラコシア、ゲドロシア、カルマニア、ペルシス諸國悉くコスロエス大王に朝貢し、波斯版圖の廣大此に至りて極まり、大王は多くはクテシフォンに入らず、アルテミタ(ダスタゲルド)王宮に居り、宮殿樓臺亭榭園囿の美麗目を驚かし、帷帳三萬、銀柱四萬、屋上に金塊千個を懸けて星宿に擬し、後宮の佳麗三千人、女孺萬二千、近衛の從騎六千、

薩賀王朝の極盛

香象一千、白駝萬二千、馬驢五萬、宏偉雄大の面目想見するに餘あり、薩賛王室の隆昌前後に絶せり、

東羅馬の危機

然るに羅馬帝國の形勢を視れば、志利亞、埃及、亞細亞は波斯に陷り、イストリアよりトラキアに抵るまではアヴルの蹂躙する所となり、伊太利は亂離既に久しく、殘すところは希臘、伊太利の領、チイルス、トレビゾンド諸港にすぎず、都門の外一帶水を隔てゝ目睫の間に大敵國を望む、豈啻に累卵の危といはむ、コンスタンチノプル爲に震駭し帝色を失ふて唯々大王の命を奉せざるを得ず、たゞ波斯水師無くして、六年帝都を陷るゝ能はず、歳毎に金銀絹絶馬匹婦女各千數を貢せしむるに過ぎず、初へラクリウスは船を艤して遠くカルタゴに遁れんとせしも都民に抑留せられて去る能はず、進退茲に谷まり意を決して戰端を啓き、六百二十二年戰船若干を以て都城を發して東南に航し、志利亞、キリキアの境、スカンデロン灣に入りイッスゝに上陸す、蓋地理大軍を動かすに利無く、少兵に便なればなり、シャール・バルヅ來り伐つ、帝親衆と與に奮鬪して之に勝ち、羅馬の士氣始めて稍振ひ翌年帝更に精兵を擇ひ、トレビゾンドにゆき、突厥族を集めて裏海に向ひ、メ

ヘラクリウス帝の奮起

ヂアの古市タウリス(ガンザカ)に至る、コスロエス王はカルケドンよりシャーエンを、志利亞よりシャール・バルヅを徵して之に當らしめんとせしも及ばずして退き、帝も敵の大舉して至らんとを恐れて急に退く、時に六百廿三年なり、翌年羅馬帝は小亞細亞に轉戰したりしかば、コスロエスはアヴル可汗に通じてコンスタンチノプルを襲はしめ、シャール・バルヅをして帝を小亞細亞に控制せしむ、六百廿六年七月アヴル兵三萬、ゲピド、ルス、ブルグンヂア、スラヴ諸蠻とコンスタンチノプルに迫りて攻擊十日、下す能はずして退き、シャール・バルヅの大軍はカルケドンに集りしも、敵の水師の爲にボスポルスを扼せられて至り救ふ能はず、帝之を見て大に安んじ兵を皇弟テオドルスに與へて小亞細亞の波斯軍を伐たしめ、自皇女を突厥に與へんと約し、カーザルの帳をゲオルギアに移さしめ、其大衆を會してテフリスを圍みしも拔く能はず、六百二十七年遂に大舉してクテシフォンの北より、急に波斯王の居城ダスタゲルドを攻め根據を拔かんとす、波斯の將ラーゼテス之をチグリス河東モスル橋畔のニネヱ府趾に邀へ、拂曉より戰ひ午晌に至り、ラーゼテス以下戰沒せしも、隊伍崩れず、晡に至つて退き、次で援軍を得て復進

ニネヱ府趾の戰

コスロエス二世の末路

みしも、ヘラクリウスは避けて戰はず、一晝夜に廿里を馳せて直ちにダスタゲルドに至る、コスロエス急使を馳せてシャール・バルズを招き、溝渠の橋板を撤して帝師を拒せしも及ばず、乃密に城を捨てゝ奔る、ヘラクリウス城に入りて蓄積を收め、羅馬の旌旗三百旒を復し、火を市街に放ち、進んでクテシフォンをつかんとせしもシャール・バルズの大軍至ると聞き、且天寒く雪大に降るを見てザラ山を超えて北に退きタウルスに入れり、

蓋しシャエンの敗、ラーゼテスの死、コスロエスの退却、皆天時の否にして戰の罪に非らずといへども、此よりコスロエス王の運漸く傾けり、然もヘラクリウス帝も敢て戰を好むにあらず、侵地を復へして和を爲さんことを求め、波斯は素より奔命に勞れて之に應ぜんとす、獨コスロエス王可かず、飽くまで西軍を攘はんとして諸民の望に背く、偶王は讒を信じてシャール・バヌスを除き、且太子シロエスを捨てゝ、寵妃シレエンの出メルダセスを儲位に立てんとす、シレエンは基督教信徒にして國人始より之を忌む、此に於て王を併せて難し、クテシフォンの總管クアダナスバ以下貴族二十二人シャール・バルズの二子と黨を結びてシロエスを奉じ、

東羅馬波斯の和

コスロエス王を獄に幽し、メルダセス已下十八皇子を其眼前に戮殺し、遂に王を弑す、時に六百廿八年にして、コスロエス二世の在位は實に三十八年なりき、シロエス波斯王と爲りて、コバード二世と號し、和を羅馬帝に結び、父王コスロエス征略の地を捐てゝ兩國の關係、形勢舊に服したれば、ヘラクリウス帝はタウリスよりコンスタンチノプルに凱旋せり、然れども、戰役連年國內疲弊し、東方に得たる利品は悉く軍備に靡し、戰士に頒ち、或は風に遭ふて海に沈み、課賦重くしてさなきだに波斯の掠略に苦しみし民益困厄に陷り、士を失ふと二十萬、農耕廢れ技工、絕え戶口凋落し幸に東强を制し得たるも損失相益はず、而して此時亞剌比亞半島に一偉人生じ自天下の豫言者と稱して劍に仗りて教を布き、其徒既に志利亞の境をを侵かしヘラクリウスが波斯に克ちて得し地は、更に他の東人（サラセンの爲めに奪はるゝに至れり、此に章を改めて此徒の由來を敘せん、

第四　サラセン時代

第十章　麻謌末、大教國

亞剌北亞半島、亞剌比亞の神異譚、メッカのハシム、オミア家、香象時代、麻謌末の新教、その概要、エル・ヘジュラ、「利劍は天堂地獄の鍵鑰」、亞剌比亞の征服、サラセン、麻謌末の入滅、其後嗣、シア、ソンナ兩派の起、哈利發アブ・ベケルの世、波斯シャール・パルズの亂、哈利發オマルの東伐、波斯伊蘭侯王の敗寇、大食唐に通ず、哈利發オマルの四征、サラセン、エルサレムを陷る、アムル埃及を取る、ヘラクリウス帝の晩年、オマル、オトマンの繼承、隋賛王朝の滅亡、オトマンの死、アリ繼承の亂、モアヤアの崛起、三刺客、オミア家の起原、コンスタンチノプル攻圍の一、ホセインの慷死、アブダルラの反、其死、オミア朝の極盛、サラセン帝國の封域、

亞剌比亞半島

紅海の東に一大半島あり、南は印度大洋に面し、東は波斯灣に臨み、北は則黃砂遠く連りて西亞細亞上世文明の地を限りたれば、南方エメン(エマン)の地豐饒にして亞剌比亞樂土(フェリックス)の名を擅にし都城サバ(サナの東北二日程に存せしマレヲ)は

亞剌比亞の神異譚

セム族ヨクタンの開市に起り、ソロモン王の世行旅紅海の濱に沿ふて南し、其女君バルキスを見たりと傳ふるも、月大漠を照らし風椰樹を亘ると幾百千年、漠中の人多く史上に見はれざりしが、麻謌末出でゝ此民始て起れり、

漠中の民以爲く、アダム出世の前二千年、天神アラーあり、純火精を以てヅン(ゼニー)を作る、ヅンは世界を包圍せる大寶山カフに居り、昔說教主の言に服し教を奉じたるも、後漸く惡く、アラー乃純光を以て作りし天使を派してヅンを四方に追ふ、漠中大風起るはヅン飛行暴を爲すなり、星夜飛ぶはヅン天使に逐はるゝなり、天使は昔アラーに服して善く人間を敎ゆ、神意を宣傳するガブリエル、死を司るアヅラエル、勝利を守るイスラフィル等皆此天使の一なり、ソロモン天より指環を受けてよくヅンを封ずと爲す、又天は美天、和天、寧天、樂天、常住天、快樂天、最高の淨天の七天、地獄はゲエナ、猛火、烈火、炎火、焦熱、苦熱、無間の七地獄ありて人種宗教の異によりて墮境を異にす、又傳へて曰くアダムの天より降るや純白石降ると、乃其地をアラーの神殿と稱し、方殿(カアバ)を造りて之を圍み、石側別に靈泉ありてゼムゼムと名く、蓋し皆鴻荒より傳はりて、基督降誕の前既に久しく人間に拜崇せら

メッカのハシ・エムオミア家

れたり、是原始亞剌比亞の神異談なり、

羅馬アウグスツス帝の世埃及太守アエリウス・ガルス兵を率ゐて紅海を渡り半島に入り、縱横其地を極むる六ケ月サバに達せしも、炎天熱地瘴氣多く陣中疾疫起り征旋功無くして還る、ストラボ軍に從ひて記あり、漠中の民の消息始めて世に知られしも、尙久しく外國の交渉史上に絕えたりしが、後エメンは百兒士亞に歸屬す、而して方殿を中心として起りしメッカ市はアカバ灣よりサバに至る中途、紅海の濱より二十里、東綠野豐林の天府を限るゼベル・コラ山を距ること十餘里、崩岩四方を繞れる嶢峭不毛の地にして、自粗朴剛健の氣を養ふに足る、唯其靈境たるの故を以て夙に四方巡拜の徒此に詣集し、名けてヘラヅ(巡拜の地)と曰ひ、從つて互市商業起り、四百四十年頃に至り、コレイシュ家コッサイなる者、市中の主權を得て宮殿を營み、隊商を掌り、方殿の鎖鑰を司り、ゼムゼムの靈泉を守りて政教の全權を總攬してメッカ市始めて起る、然れども、コッサイの後獨此權勢を私する能はず、アブド・メナフの子ハシェム詣徒を令し、其甥ヲミア之を爭ひハシェム、ヲミア兩統の確執夙に此に起れり、

香象時代

麻訶末の新教

ハシェムの子アブドルモタレブ(アブダルムタレブ)のメッカに威權を用うるの時は南エメンにアビシニア代王アブラハの香象時代に當れり、アブラハはサナに都し、波斯アビシニアと通商貿易を開き、基督教を奉じて聖堂を建立し、以て方殿參拜の異教徒を風化せんとし、事成らずして武を用ひ、兵を起して北上す、サナはメッカを距る約四十日程、進んでターエーフに至る、亞剌比亞の衆其象軍を望んで震駭し、アブダルムタレブを使者として之を拒ましむ、アブラハは方殿を毀つにあらざれば兵を止めずといひて聽るさず、アブダルムタレブ乃方殿に詣りて神を祭り、メッカ市民と與に郊外に退く、エメンの軍中疾疫流行して士多く死し、アブラハは急に退きかへりて病卒し、メッカ以て神冥の祐助と爲し、アブド・メナフの苗裔是より推重せらる、此時代を稱して香象時代といふ、

アブドルモタレブ家富みて子女太多し、中に就きて最少子アブダラ(アラーの使徒の義)を愛す、アブダラはコッサイの支流アミナを娶り、五百六十九年ムハメッド(麻訶末)を生む、實に羅馬のユスチニアヌスの殂後四年、陳の宣帝の大建元年なり、麻訶末生れて幾もなく父母を失ひ、祖父アブダルムタレブに育てらる、尋でムタ

レア亦卒し、諸父多く強頑にして、麻訶末は唯一婢五駱駝を得しのみ、族中最名聲ありて内外の事を處決し征戰通商を掌れる叔父アブタレブに從ひ、駱駝をひきて、勞役に服す、容儀端正にして眼光鋭く髭髯甚美に辯論最巧なりしも、狂熱にして稍もすれば厭世出離の念動く、年廿五にして豪富の寡婦カヂアに寵せられてその夫と爲り、資産を作りしも初念變せず、郊外の山中ヘラの洞窟に入りて默座思惟し終に大頓悟を得て、「天地唯一神あり、麻訶末はその豫言者なり」といひ、始てイスラムの教を說く、イスラムは和平の義なり、蓋し亞剌比亞の偶像は素より、波斯聖師(マギ)の教もサバの拜星教も兩義を立て統一を缺き物象を崇拜し、當時の基督教は儀典の末を重んじ、殉道使徒を神として偶像崇拜に近肖し、東方の諸教皆雜糅晦噬にして健實なる信仰を繫ぐに足らず、麻訶末悉く目して異端と爲し、出者は沒し生者は滅し壞亂者は盡滅すとの眞諦を立て、表形なく居處なく所出なく肖類なく萬能具足常住不壞なる唯一神アラーを拜す可しと說き、阿當よりノア、アブラハム以下基督に至る古哲を悉く先達と爲し、基督以來星霜茲に六百年教徒は教祖の遺法を破却し神聖を冒瀆するを以て猶太基督兩教徒の非を鳴らし、

新教の概要

自最後に出でし最大の神使にして、新に聖神の靈約を人間に宣傳すと稱せり、時に六百十年、麻訶末時に年四十、

麻訶末の平和(イスラム)の教は聖典アル・コラン(可蘭)に在り、天神光焰の筆を執りて恒常不易無始無終の神意を記せし神書あり、天使ガブリエル直寫して月界に下り、ヘラ洞中にて其意を麻訶末に傳へしより後、每年の聖夜其默示を編みて經典と爲し、讀誦の義によりてアル・コランと名くといふ、然れども實に麻訶末が十餘年の說法を神意に假托したるものを、その滅後オマルが取捨したるに出づ、故に所說一として麻訶末の情思理想の發現ならざる無し、その教素猶太基督兩教より出て、教義は大同小異にて、要するに唯一神、天使、可蘭、豫言者、蘇生及び天裁、恒常不易の天意神明に對する信仰を奉じ、祈禱は半天神に近つく可く、斷食は神殿に達し、施與は神殿に入るを得可しとて、巡拜と與に四事の實踐を重んじ、此信條と行事との如何によりて賞罰を附し、皷角一吹して死者中より天神、天魔、人間或は天に生じ或は地獄に墜すと爲す、是麻訶末教の概要なり、

麻訶末の新教を立つるや先づ妻カヂェを說き、奴僕ゼイドを教化し、アブ・タレ

ブの子少年アリを服し、巨萬の富を擁せる温厚の君子アブ・ベケル歸依し、其勸誘によりてオトマン、アブダル・ラーマン以下メッカ第一流の士民十人のイスラムを奉するに至り、三年の間に新教興隆の基成れり、よりて宴を開きてハシェムの一族四十人を招きて其教を說く、久しく雌伏してハシェム統の隆昌を羨怨せしコレイシュ族麻訶末を除かんとし、教徒多くエチオピアに逝る、既にしてアブ・タレブ卒しカチェ亦沒し麻訶末は內助外援を失ふ、オミア統の領袖アブ・ソフィアン權柄を掌にし、一族黨與を會し國教の敵麻訶末を殺さんとす、謀漏れアリ師に代りて留まり、麻訶末はアブベケルと夜に乘じて遁れ、トルの洞穴に潛むこと三日、始ヤトレブの民メッカに至りて新教に歸し豫言者故鄉に納れられざる時は之を助く可しと約せしを思ひ、遂にヤトレブに奔る、時に六百二十二年七月十六日(或はいふ四月十九日)にして、麻訶末教の興亡運命洵に此遁走に繫るを以て、後來オマル哈利發の朝、立てゝサラセン帝國の紀元と爲しエル・ヘジュラ(移轉の義)といひ、之より後ヤトレブをメヂナト・アル・ナビ(豫言者の市)と稱し、後省略して單にメヂナ(市)といふ、麻訶末時に年五十三、

エル・ヘジュラ

利劍は天堂地獄の鍵鑰

敎主メヂナに入ると聞き敎徒追ひ至る者多し、麻訶末乃從奔者(ムハジリアン)とメヂナの救敎者(アンサル)とを同胞の交を爲さしめ、先二孤の遺地を得て小觀(モスク)を築き、金銀の神璽を鑄て使徒の號を刻せしも、なほ椰子樹下に祈り、久しくして後始めて榻子祭壇を作り儉素下に臨み、力めて民心を收め、遁殘の民を以て君王の位を占め、神人敎俗の兩權を併有し、揚言して曰く「利劍は天堂地獄の鍵鑰なり、一滴の鮮血、一夜の舍營は一月の齋戒祈禱に優り、戰死は罪障を滅し、天裁の日痼疾は銀朱の如く耀き闌廚の如く薰り、失脚者は天使の翼を生ぜん」と、勇武にして不利の地に生れ、隊商行旅の苦を喫して草寇に等しき亞剌比亞の浮浪は之を聞きて四方よりメヂナ城門の白旗の下に集り、武力を以て新敎を宣傳するの端を發したり、六百廿三年麻訶末は一びベデルの谷にコレイシュの軍を破りしも、再びメヂナの北オウド山に戰ひて痍を蒙りて師潰ゆ、六百二十五年アブ・ソフィアン諸方の師を會し兵一萬を得て進んでメヂナを圍む、摩訶末堤坊を策き、敎徒三千を以て固く守る、對峙二十日にして同盟軍倦怠解崩し、一夜大雷雨に逢ふて退く、初麻訶末はエルサレムを以てケブラ(禮拜の時向ふ方角)となしたれば、若し猶太人麻訶末の神約の豫言者

亞制比亞の征服

サラセン

たるを認めなば侵害を免れしならんに、執拗頑冥にして之を拒みしかば、メッカ同盟軍の退くや麻訶末は猶太人の本據カイバルを陷れて其徒を下したり、然るに麻訶末は一ひ逐はれしメッカに入るの念日夜動きて已まず、敵の勢太昌なるを視、十年の休戰を約し、方殿巡拜の允許を得しが、連りに四方を攻伐して勢漸く強大なるや兵一萬を得、急にメッカを襲ふ、アブ・ソフィアン驚き出で降り六百三十年麻訶末遂に故市を得て方殿の偶像六百三十軀を毀ち神殿を淨祓し異端外道の徒を市外に放つ、是に於て亞剌比亞國中風靡し、到る所偶像を毀ち舊教を排し、悉く麻訶末の新教に歸依し、その方殿に詣づるや、從者十一萬に上れりといふ、サラセン帝國の基此に始て興る、サラセンの語源に就きては諸説紛々として決せず、或はサーラ（砂漠の義）といふも、サラケーン Sharkeyn 則ち東方の民といふもの歐洲の稱呼として眞に近きが如し、麻訶末教國を呼ぶにこの名最著るを以て今假用する耳、

羅馬帝ヘラクリウスの波斯に勝ちて還るや、エメサに至り始めて麻訶末の使者を引見す、次でモスレム（イスラムの教を奉する者をいふ）パレス、チナを侵畧し

「神劍」カレド

麻訶末の入滅

麻訶末の後嗣

大に羅馬軍とムタに戰ひ、旗手ゼイド奮鬪して死せしもメッカのカレド善く戰ひて敵を破り師を完うして退き「神劍」の號を得たり、麻訶末は更に騎一萬歩二萬を徵し、六百三十一年メヂナを距る十日程タブクの森に至りしも進まず、而もカレドの威名四方に奮ひエウフラテスより紅海の濱アイラーに至る間、諸族諸市悉く風を望みて降れり、然るに麻訶末齡六旬を超えて身神漸く疲勞せしが、六百三十二年北征屢利なきを恨み、ゼイドの遺子オサマを擧げて總督と爲し志利亞を侵畧せしむ、師發するの夜麻訶末熱を病み、自起たざるを量り、奴僕を放釋し葬儀を遺命し祈禱を爲し後事をアブベケルに托し、病むこと十四日にして、六月八日アブ・ベケルの女、愛妃アエシャの手に擁せられて示寂す、之をメヂナに葬る、年六十又三、

麻訶末の事業は雄大なりしも、自處る細心にして、親火を焚き床を掃ひ乳を搾り衣履を繕ひ飲酒を禁じ食ふところは波斯衆にすぎず、唯平常妻妾十餘を養ひ後嗣を意とせしにカヂェの四子三女、マリアの所生皆夭折し、今や僅にアリの妻たるファチマを殘すのみ、此に於て繼承の事起るや、アエシャの父アブ・ベケルは教主

シア、ソンナ兩派の起

と艱厄を共にして最重望を負ひ、オマルは歸依の際神異ありて武功第一たり、オトマンは教主の二女を得て其信任を受けたりしも、メッカ方殿の主宰アブ・タレブの子にして教主の弟と稱せられ現にその女婿たるアリに如かず、然るに教主の逝くやアリの對敵たるアエシャ事を執りたれば教嗣を定めず、父老はアリの門閥を憚り、コレイシュはハシェムの強きを忌み、メッカの從奔者はメヂナの救教者と功を爭ひ、朋黨各好む所を奉じて教嗣とせんとし、教國なほ甚盛ならずして早くも分裂決潰せんとせり、オマルよりて温厚の老君子アブ・ベケルを立てゝ哈利發(教嗣)と爲す、皆之に服す、獨ハシェムの一族悅ばず、其首長アリは門を閉して出でず、自教主の後嗣を以て居る、アリと教祖との關係は教國の大題目にして、ながく宗教上の反目を來し、波斯土耳古の對抗と爲り、波斯のシア派は教祖の金條に新條を追加し、麻訶末神の豫言者なれば、アリは神の宰臣なりと爲し、居常アブ・ベケル、オマル、オトマンを誹議して三僭賊と爲し、就中オマルを重惡の凶徒と罵り、之に反して、自麻訶末の正法を傳へたりと爲すソンナ派はアブ・ベケル以下アリを以て最劣れりと爲せり、然れども教祖入寂後六ケ月を經てファチマ沒せしかば、アリも始

哈利發アブ・ベケルの世

めてアブ・ベケルの哈利發たるを認諾し其派の所謂三僭主廿四年の治を經て始めて教祖の繼嗣と爲れり、

アブ・ベケル哈利發と爲るや、直ちにヂサマをして北征せしめ、ヂサマ志利亞を攻畧して亡父の怨を雪ぎて還りしも、教祖新に亡びて諸黨相競ひ、或は教は奉すべし貢献は爲さゞる可しといふ者ありて、教國分裂の兆あり、アブ・ベケル全力を此救濟に用ひ、斷然不順不庭の徒を拒み、哈利發の位を得可きオマル、オトマン、アリ等を内に留めて自立を防ぎ、專勇猛武斷(神劍)の名あるカレドを用ひて征畧に任ぜしむ、六百三十三年メッカの東エメン領に麻訶末の教に模擬して新義を唱ふる者ムセリマあり、カレド大に之をアクラバに擊破して東南方を風靡し、更に波斯灣邊オマン、マアラよりエメン、ハドラマウドに至りしかば、未一年を出でずして人また教國分崩の鬼胎を懷く者なし、

かくてカレドはヒラに波斯兵を破り、連りに附近の地を略し、六百三十四年一月廿一日、メソポタミア、イラク、志利亞三州の交會地エウフラテス河の東岸フィルダーに戰ひて克つ、之に反して羅馬軍と志利亞に對抗せるアブ・オベイダーは數

利を失ふて征討の志成らず、アブ・ベクル爲に救援を發し、其功無きを視るや、カレドをイラク方面より召し還へして赴き援けしむ、羅馬帝ヘラクリウスは一舉して亞剌比亞人を攘はんと欲し、將エルダンを遣はし、七月バレスチナの南アイヂナヂンに戰ふて破れ、次でエルムク河邊に相遇ひ對峙溯久戰はず、蓋し亞剌比亞軍はカレドの至るを待つなり、カレド乃急にタドモル(パルミーラ)を屠り、ボストラを陷れ、九月大にワクサの野に戰ふ、野は三面斷崖峭壁にして、一面途を開き、羅馬軍甚衆きもカレド奮鬪して之に克ち、多く器械資糧を得て遂に志利亞に勝てり、而も恰も此時アブ・ベケルの訃音至り、オマル代り立ちてカレド征畧の進路忽一頓せり、

ユスチニアヌス帝の時法典の纂輯燦然たる光を後昆に垂れしも、コンスタンチノプルの帝威凌夷してサラセンの侵畧を防ぐ能はず、波斯の薩贊朝また昌榮久しくして傾倒に滾し疫癘流行して民多く亡び、コバード二世父兄を弑して大王の位に即きしも、一年を出でずして六百廿九年に殂落し、嗣王アルタクセルクセス(アルダシール)三世生れて一歲、ミール・ハヅズ貴族に推されて政を攝し、政令

波新シャール・パルズの亂

宜きを得て內に不順の民なきも、將軍シャール・パルズは兵を擁して小亞細亞、志利亞方面を督し、陰に羅馬帝ヘラクリウスと結び、巨額の金帛を貢し、其援を假りて王位を簒はんと欲る、ヘラクリウスは乃皇子テオドシウスの爲にシャール・パルズの女ニケを納れ、皇儲コンスタンチヌスの爲にシャール・パルズの子ニケタスの女グレゴリアを納れんとを約す、シャール・パルズ乃六萬の叛兵を師ゐてクテシフォンを陷れ幼王を弑し攝政ミール・ハヅズを殺して波斯を簒ひ、嚮に侵畧せし羅馬の諸州を帝に返還し、可薩部族をアルメニアより放逐し、故コバード王の妹ピランドクトを冊立して妃と爲し、以て民望を繫がんとせしも、數百年來王室の餘德今に至りて尙地に墜ちず、近衞の兵蜂起して之を弑し、ピランドクトを立つ、實に波期女王の始なり、幾も無くして女王殂し、王妹アゼルミドクト繼ぎ、不幸にして刺客の手に殪れ、諸雄四方に紛起して王位を爭ひ、上政令無く天下騷然たり、然るに故コスロエス・パルヅズの王孫國難を避け禍害を恐れ、自韜晦してイスタクルに遁れしが、時に年既に十五、國中の貴族薩贊王朝の血統を索めて之を隴畝の間に得、推戴して王位に即かしむ、イスヂゲルド(伊嗣俣)三世是なり、時に六百三十二年

哈利發オマルの東伐

六月十六日なり、

伊嗣侯王は天資英明なるも世下り時利あらず、數サラセン族の入寇を防ぎしも、宿將老臣多く亡びて邊境連りに動亂す、將バーマン一び大に敵を破り、アブ・オベイダを斬り敵を殺すと四千人、波斯の爲に最後の一掉を爲せり、實にサラセン軍ワクサに勝ちし後五十日のみ、オマル哈利發と爲りて直ちにカレドの兵權を奪ひイラク方面の衆を增さんとして時に及ばず此敗ありしが、翌六百三十五年モタンナの軍クファ附近のボエイブにて大に波斯軍を破りて後サラセンの勢復振ふ、波斯第一の名將ルステム國中の衆を盡くして十二萬を得、エウフラテスを渡りてサアド・イブンヴカスのサラセン軍とカデシエーに會し、激戰三日に亘り、サラセンの衆日に加はりしも勝敗決せず、第四日に至り大風砂塵を捲きて波斯軍利あらず、ルステムはアルカマの子ヒラルに斬られ旌旗敵手に落ちて軍大に敗る、時に六百三十六年なり、而もサラセン亦衆數千を失ひて急に出る能はず、翌年サアド衆六萬に將として至る、波斯の諸將王に勵め都城を出でゝ山地に潛幸せしむ、サアドの衆乃クテシフォン(マダイン)に入り、歷世の蓄積を發し、メヂナの

伊嗣侯王の敗亡

大食店に通ず

哈利發朝に送り、オマル之を受け、令を下してエウフラテス河の西岸バビロンの南約廿里に新都クファを營造して政廳を此に移さしめ、波斯灣北廿里にバッソラを起す、時に伊嗣侯王は兵十萬をホルワンに集めて恢復を圖り、亞剌比亞の將ハシェムとヨルラに戰ひて敗れ、退きてレーイ(古のラーゲス)に據り、諸將をしてホルワンを守らしむ、幾も無くしてホルワン陷りしも、サラセンの勇將サアド・イブン・ヴカスは哈利發に忌まれて徵しかへされしかば、伊嗣侯王奮勵して、東北諸州の衆十五萬を悉くしフィルザンを總督に任じ、六百四十一年メヂアのネハヴンドに出づ、サラセンの將ノマン數萬の兵を以て之と對峙すること二ヶ月、力爭の難を知り、哈利發殂落すと詐り退きて波斯軍を誘ひ、反擊して大に勝ちフィルザンを斬り、勝に乘じてハマダンを陷る、伊嗣侯王乃東方に遁竄す、實に六百四十三年なり、是に於てオマルは波斯の東に走りて當時東方世界の大帝國として威令遠く中央亞細亞に蒙れる唐朝に依らんことを恐れ、六百五十一年(高宗の永徽二)使を遣はして好を唐に通ず、爾後サラセン哈利發の使節數唐朝に通交來往する此に始まる、東史に所謂大食國これなり、

哈利發オマルの西征

サラセン、エルサレムを陷る

哈利發オマルは東波斯と戰ふとともに西境の拓植經畧を怠らず、六百三十五年上世より東西通商の衝區たるダマスクスを攻めて之を陷れ、進んでホムス(古のエメサ)を擊たんとせしも、後にフィール(古のペラ)あるを以て、一ぴメヂナにかへり、轉じてヨルダンに向ひて再びエルムクを渡り、夏フィールを陷れ、中部志利亞を風靡し、守將をダマスクスに置き、兵を分ちてパレスチナを徇略せしめ、本軍はエルムクを横きり、ガダラの古市を過ぎ、レバノン山を左にし進んでホムスを擊つ、羅馬のヘラクリウス退きてメソポタミアの北境エデッサに據り、ベドウヰンを煽動して敵に當らんとせしも事成らず、六百卅六年春ホムス陷り、バアルベク(古のヘリオポリス)キンニスリン(古のカルキス)等相次で降り、志利亞の險要アレッポも下り、羅馬帝國東徼の重鎮たる古都アンチオクの堅城も支ふる能はず、ヘラクリウス帝は刺客をメヂナに遣りて哈利發を謀らしめしも成らず、アムルよりてエルサレムの西アヅナヂインの羅馬軍を擊ち奔らし、ヨッパ、ガザ以下諸市を畧してエルサレムに迫る、羅馬の將軍膽落ち氣萎え、エルサレムを救はず直ちに南走して埃及に入る、エルサレムの高僧乃亞剌比亞の將軍を迎へて和を乞ひ、哈利發オマル弊履麁服駱駝に騎りて北上し、エルサレムに入り、新に基督教會を建つるを禁じ從來の教會を以て麻訶末教の寺觀と爲し、猶太人は他の改宗に容喙するを得ず、麻訶末教徒の前に起立するを得ず、服裝姓名言語を共にし劍を佩び酒を沽り儀式を行ふを得ずと約し、寺觀建搨の地を撰ト し、志利亞の治制、埃及の征案を定めて後メヂナに還り、カレドをキンヂスリンの守と爲す、後六百四十三年カレドはホムスに沒す、此間羅馬は切に志利亞の克復を謀り、六百卅八年兵を出せしも、哈利發の親征に逢ふて功無く、唯黄金三十萬片を以てアンチオクを購ひしも、パレスチナのケサレアはアムルの掌に落ち、ポムペイウス之に克ちて後七百年を經て羅馬帝國は遂に志利亞を失へり、六百三十九年亞剌比亞に大風起りて黄砂空に滿つ、稱して「砂灰の年」といふ、メソポタミア河谷の地に疫疾流行して新府バッソラに及び死者相枕す、オマル乃諸地を巡視しアブ・ソフィアンの子モアヰアの器畧を多とし、此地の政令を托してメヂナにかへれり、

アムル埃及を取る

哈利發の還るや、アムル南征を始めファルマー(ペルシウム)を圍むと一ケ月にして之を陷れ、進んでニル河の西岸メムフィスに迫る、時にニル河口のルダ島は二船

橋を架して河口を横斷し、橋の東端にはバビロンの市羅馬の兵舍、橋西には埃及の市街あり、アムル之を取り、其舍營の地は後一新市と爲りてフォスター(陣營の義)といひ又アムル寺觀を造る、後のカイロ府は實に此地に起るといへども、カイロ(勝利の義)の名は寧ろ十世紀に拗めし新府の名たりしに似たり、而して亞剌比亞人の志を埃及に得しは實にコプト基督敎徒則ち、ヤコビトが羅馬皇帝の壓斥排除を怨みて、好をメムフィスを圖める麻訶末敎徒に通じ、屯在の吏員を逐ひ僧侶を放ち、蜂屯蟻集、糧を輸し道を開きてサラセンを迎へしによる、希臘兵制する能はず、但商業貿易を以て鳴りしアレキサンドリア府は海上援助の來るをたのみて下らず、アムル圍むと一年二ケ月、死者二万四千を出し、六百四十一年に至り遂に之を取る、此時有名なる圖書館の舊典古籍は「若し可蘭と同じくば不要なり、若し可蘭と違はゞ存す可からず」といへる哈利發の令によりて焚亡されしといふ、或史家はアムルが文學哲學を愛せしを以て焚書の擧なしとなすも、諸說紛々決せず、要するにビザンチウム帝國領たりし時なほ圖書館の盛なりしは事實にして、其後何時しか散逸亡失せりとせばサラセンの兵燹禍を爲せりとの說また偶然に

ヘラクリウス帝の晩年

非ざるなり、

羅馬帝ヘラクリウスの末年は其中世の盛に似ず、帝は一神敎主義を抱懷し、六百四十年の羅馬會議に反し、且后エウドキアの殂後、コンスタンチノプル僧正のクスッスと爲すや、マルチナは前夫の出ヘラクレオナスをして事を共にせしむ、況や帝位に在ると既に三十年神身衰弱し、殊にサラセン東南邊を略し、志利亞パレスチナ、メソポタミア、埃及相繼て割け、アレキサンドリア陷ると聞き憂樂まず、六百四十一年二月終に殂し、遺言してマルチノを帝とし、太子コンスタンチヌス、マルチノの子ヘラクレオナスに政務を分掌せしむ、議院聽かず、してコンスタンチヌスを立つ、ヘラクリウス二世是なり、然るに帝虛弱、在位三月に滿たずして殂し、ヘラクレオナス代りしが、先帝の暴殂は帝及び母后マルチノの毒弑なりしことを發はれ、帝は廢せられ、ヘラクリウス二世(コンスタンチヌス三世)の遺子コンスタンス二世登極す、年甫めて十一、

オマル、オトマンの繼承

羅馬帝室の變後三年、亞剌比亞哈利發弑逆の變あり、哈利發オマルは峻厲克己敬虔にして神に仕へ、教祖メッカを去りて後十七年にして始めてヘジュラ紀元を立て、西は羅馬帝領を併せ東は波斯大王を屈し、猶太、基督、拜火諸教徒を服し、征討宣教の大業を爲すこと十年に亘り、亞剌比亞の威大に揚りしが、此に至りチハヴンドの戰場より來りし波斯の蒼頭の爲に害せらる、時に六百四十四年十一月なり、オマル終に臨みアリ以下六人を擧げて後嗣を定めしむ、六人よりて教祖の祀室オトマンを擧げて哈利發と爲す、オトマンはオミアの冒孫にて、ハシェムの後たるアリと合はず、且アブベクルの細愼敦厚なく、オマルの峻厲に似ず、淺弱貪婪、負傲人望少く、加ふるにパッソラ、クファの民漸く自信して哈利發に背かんとし、前代の盛また望み難し、其在職十二年間に起りし重事は波斯薩贊朝の覆滅、アブダラーの亞非利加征服の開端なり、六百四十六年羅馬兵はアレキサンドリアを克復せしも、アムル再び之を取りフォスタト府を起し、翌年アブダラー亞非利加沿海の征討を始め、六百四十九年亞剌比亞の水師キプルス島を畧し、後三年を經て復アレキサンドリア克復を圖りし羅馬の海軍を破り、別に一軍は小亞細亞よりアルメニ

薩贊王朝の滅亡

アに出で、西南より裏海に進み、黑海の岸を極む、之より先波斯王伊嗣侯は東方に遁れ、阿母、西爾兩河の間にかくれ、突厥の衆を假りて復位を圖りしも成らず、六百五十一年突厥の爲めに害せらる、恰もサラセンの使唐に至るの年なり、王子フィルズ（卑路斯）地を以て唐に降り、後十年を經て唐の波斯都督と爲る、昔アルデシル百見士亞の故圖によりて起りしより、四百十五年にして薩贊朝茲に滅び、山河サラセン人の手に歸し、厥訶末教國はオキサスの流を隔てゝ境を土耳古人と接し、六百五十三年裏海の西岸に戰ふて敗れ、クファの衆を助くる爲、志利亞より援軍を發せしに、志利亞兵クファの將に服せずして後の禍根と爲れり、

オトマンの死

斯くサラセンの外征は着々歩武を進むれども、オトマン哈利發の地位は日に危く、クファ、パッソラの吏民服せず、亞剌比亞國中尚且怨嗟の聲あり、オトマン乃使を埃及、クファ、パッソラ、ダマスクス諸地方に遣はして民情を探らしめしも得る所なくして歸りしかば、六百五十五年諸地の太守を徵して探りしも亦實を得ず、然るに謀徒の畫策は益熟し、六百五十六年埃及、メソポタミアの謀徒巡拜者に混じてメヂナに至りて聚謀し、若し吏を易え法を改めずんば哈利發を廢立せんと迫り、オ

トマン讓歩して事平ぎしも、三日の後諜徒またかへり至り、六月十七日宮門を奪ふて入り、オトマンを斬り、埃及の衆はアリを、クファの徒はゾベイルを、バッソラの民はオマルの義弟タラーを擧げて後嗣とせんとして互に爭ひ、アリ、ゾベイル、タラーは皆オマル、オトマンの非運を見て辭して受けず、メヂナ市中鼎の沸くが如く最紛擾を極む、若し人一び四方に去りて、メヂナ主なしといはゞ敎國は忽分裂崩決す可し、アリよりて寺觀に入りて位を繼ぎ諸功臣を賞す、タラー、ゾベイルよりてクファ、バッソラの太守を求む、アリは前哈利發設置の諸官を更迭せんと欲して許るさず、敎祖の妃アエシャ之を見て二人を援きて助と爲し、與にアリを亡ぼさんと志し、志利亞太守モアヤアをしてオトマンの血痕ある衣を掲げてアリ弑逆の罪を鳴らさしめ、却て弑逆の魁首たる三人はオミア家以下の兵をメッカに募り、アエシャ其千騎を率て發しゆく〳〵兵を集めてバッソラに至り太守を廢す、アリ報に接し人を四方に派して入援を促がしその子ハッサン說きてクファの衆九千を得たり、ゾベイルは雷霆を思ひて和を欲し、タラーも又此擧の不正を知ると雖も、獨アエシャ固執して動かず、兩軍バッソラ附近のカリバに相對峙して久しく戰はず、十二月

アリ繼承の亂

に至りて初て戰ふ、アエシャ自駱駝に騎りて衆を指揮し奮鬪太力めしも、タラー、ゾベイル皆戰沒しアエシャ駱駝殪れて敵に獲られ、アリは之をメヂナに送りて幽居せしめ、新太守をバッソラに置き哈利發廳をクファに開き、波斯、メソポタミア、埃及、亞剌比亞、保羅珊を併領して繼承の亂茲に局を結びき、

モアヤアの崛起

然れどもアリの志利亞を顧慮せざりしは誤れり、モアヤアは麻訶末の勁敵たりしアブ・ソフィアンの子にて、オミア家の正嫡、時人稱してカエサルの勇、アウグスツスの大志、チベリウスの器畧ありとなす、オマルの時志利亞太守と爲りてオトマンの世に及び、六百五十一年にはキプルスを下しロデスを取り有名なる巨像を毀ち、東地中海を抑制して亞剌比亞人の雄名を擅にし、今又オトマン鮮血の衣を掲げて復仇の名を正し、五萬の精勇日夜涕を垂れて其擧に加はらんを誓ふありて、一び職を失ひてパレスチナの野に下りし勇將アムルに再び埃及を與へんことを約して與に兵八萬を擧げてアリに迫らんとす、アリ聞きて衆九萬を起しクファを出でゝ志利亞に向ひ、六百五十七年夏メソポタミアの北境バルミラの北エウフラテス河畔のシッフィンに至りてモアヤアの師に會す、對峙三月にして始て

戰ひ伏尸流血野を掩ふ、志利亞の軍殆んど危し、アムル乃モアヰアをして可闌を捧げて敵鋒を避けしめて退く、然れども是より兩派の反目日に激しく、六百五十八年アリ衆を會して西伐せんとす、適激烈なる改革黨カレヲト起りて哈利發の行動を難じ、チグリスの東、後のバグダッド附近チールワンに嘯集する者一万二千、アリ擊ちて之を破り勝に乘じて志利亞に出でんとす、皆可かず、アリ乃クファに歸る、カレヲトはまたモタヲリト派といひ、後世に至るまでシア派中の分派たり、その分離の兆は麻訶末の在世中に起りしもハシェムの世ワシル・ベン・アタに至りて始めて一派を爲せり、

アリは故アブ・ベケルの一子ムハメッドを埃及太守と爲せしに、アムル直に南進して之を捕へて焚殺したりしかば、アエシャ憤恚してモアヰアを惡む、六百五十九年ベッソラは一びモアヰアの手に陷り、アリ直ちに之を克復せしも、之より天運漸く傾き六百六十年モアヰアはメッカ、メヂナの黨人と結びて諸市を取り、エメンの地を奪ふ、然れども アリはクファの寺觀に在りてモアヰアの爲に所らざるなく、モアヰアのダマスクスに在る未嘗てアリ及び其二子ハッサン、ホセインの爲に膺ら

三刺客

オミア家の起原

さるなく、互に宗教上の正信を欠かざるなり、時にカレヲトの三狂徒あり、以爲く埃及のアムル、ダマスクスのモアヰア、クファの哈利發アリ皆狐狸の心を逞うす、此三者を除かば教國を清むるに足らんと、ラマダン聖月の十七日、寺觀に參會の式あるを期し、毒匕首を懷にし、各ゆきて三傑を刺す、アリは死しモアヰアは傷きしもアムルは免れ、三刺客は皆刑せらる、アリは天資寛厚にして幼より麻訶末に隨從し、教國の興隆に盡瘁し、瓦哈利發として長へに其名を傳ふ可きに此慘運に陷りしは悲む可し、アリ殂後子ハッサン其衆に推戴せられしも、器畧父に如かず、素よりモアヰアの敵に非ず、半年を出でずしてモアヰアの哈利發となり、後八年を經て六百六十九年ハッサンを毒殺せり、

麻訶末の教を唱ふるや故里メッカに納れられずしてメヂナに移り、アリに至りて更にメヂナよりクファに移りしが、モアヰア主權を簒ひてより哈利發の主廳はダマスクスに徙され、之よりオミア家哈利發を世襲し、教民信徒の撰擧推定を經ず、アリの世まで隆昌なりし亞剌比亞の二聖市はサラセン族の膨大哈利發廳の移轉によりて漸く衰へ、領域は年と與に大にして、其民其教の本地たる半島はま

た重をサラセン帝國に爲さず、地方の利害は益背馳し去れり、

モアヰアは殆んど教國を得しも、なほ恐る可き一敵あり、アブ・ソフィアンの庶子ヅヤヒド是なり、よりて之を厚遇優待し、連りにベッソラ、クファ、保羅珊、印度地方の太守に任じ遂に亞剌比亞、ペトレアに封ず、ヅヤヒド任に赴かんとして、六百七十四年脱疽を病みて沒す、年五十四、其子オベイダラ襲ぎてクファ、ベッソラ、保羅珊の太守を得、うちて不花剌にかち、保羅珊を伐ちて突厥人をサマルカンドに逐ひ、地を東方に拓き、モアヰアはコンスタンチノプルを襲ひ地を北亞非利加に拓かんと力む、是より先羅馬帝コンスタンス二世は皇弟テオドシウスを忌み殺して自都城に安んずる能はず、六百六十二年希臘に航し雅典に留り、翌年伊太利のタレンツムに之き、羅馬を訪ひシラクスに驛を駐め、六百六十八年反徒の爲に其地に弑せらる、變報コンスタンチノプルに達するや、皇長子コンスタンチヌス三世（ポゴナッス）位に即く、時に哈利發モアヰアは教祖の遺志を遂げん爲神聖軍を起し、老ソフィアンを總督に任じ、己の子ヱヅド、アリの次子ホセイン等を從へてコンスタンチノプルを攻しむ、惜む可し、當時の史記缺漏して戰況知る可らざるも、六百七十年サ

コンスタンチノプル攻圍の一

ラセンの戰船はヘレスポンドの峽を過ぎ、其兵は都城を距ること僅に二里餘へプドモン宮前に上陸したれども城壁固く帝師よく防ぎて攻圍利あらず、プロポンチスの沿海を剽略し、キジクスに退きて、冬を過ごし、時温なれば復進み、一進一退數年に亘りて拔けず、サラセンの師老い志酬ひず、戰船風浪の難に逢ひ陸兵離散し、六百七十八年に至りて和を講じ、金帛奴隸良馬を貢するを約して退く、是サラセン軍コンスタンチノプルを圍むの初なり、

モアヰアは羅馬帝都攻圍の失を亞非利加征服にて償ひ得たり、オトマンの世アブダラは亞非利加征討に着手せしも未事功の著きものなかりしに、此に至り哈利發の師急に志利亞に出でゝ行く〳〵衆を併せて直ちにアレキサンドリアに達し、勇將アクバ後のツニスの境に進伐し、六百七十七年古カルタゴを南に距る數十里、草莽を拓きてカイルワンを搬め、ケウタ、タンギエルを過ぎて西の方大洋に達す、然るにベルベル以下一ぴ慴服せし諸土族後に蜂起し、アクバ急に東に還りしも及ばず、テウダの峽に圍まれて破れ、サラセンの兵殆んど遺類なし

哈利發モアヰアは生前後嗣を確立せんと欲し、六百七十八年都城ダマスクス

ホセインの慘死

の民を召して忠誠を子ヤヤドに誓はしむ、國中皆誓ひしも獨アリの子ホセイン、ゾベイルの子アブダラ、アッバス、オマル、アブ・ベケルの子等誓はず、アブ・ベケルの子は盲にしてメッカに在り、他の四者は皆メヂナに在り、モアヰア言を巡拜に托しメヂナに赴き諭せしも皆應ぜず、六百八十年春モアヰア殂しヤヤドはエメサよりかへり直ちに哈利發となる、教國の民動搖し、クファの民速に密使をメヂナに遣はしてホセインを招き、書百五十通に及び、同志十四萬に上る、ホセインは諸友の諫を納れず、妻子兄弟從者百餘人と之に應じて東す、クファの太守ノマン情を具して哈利發に上り、兵四千を以てホセイン主從をクファの北十里ケルバラに圍み、エヤドは使を遣はして降を勸めしも、ホセイン屈せず、一家君臣悉く難に死し、末路の慘狀後人を悲ましめ、殉道聖者の名を得たり、然も尚アブダラあり、アブダラは雄辯の士、ホセインの慘死を見て大にクファ市民の不信を摘發し、エヤドが亞剌比亞聖市を捐てしを刺り、民心を皷舞して哈利發に畔きメッカに據る、エヤドよりてアクバの子メスリムに騎一萬二千、歩五千を授けて之を討たしむ、メリスム乃メヂナを陷れしも途に沒し、ハッサン代り進みてメッカを圍むこと二ケ月、矢石亂飛方殿

アブダラの反

兵燹に罹りしも市中善く防ぎて下らず、偶エヤド卅九歳を以て志利亞のハワリンに殂し、子モアヰア二世嗣ぎしも哈利發の器に非ず、ハッサン訃音に接して圍を解き、アブダラを伴ひてダマスクスに赴かんといひしも、アブダラ應ぜず、時に六百八十三年なり、モアヰア二世は自よく爲すなきを知り諸臣をして其哈利發を選ばしめ、自宮裡に隱れて出てず、翌年殂落せり、時にメッカにアブダラありといへども、ダマスクスの民はオミア家を奉せんと欲しアブ・ソフィアンの從兄ハキムの子メルワンを擁立す、クファ、バッソラ、亞剌比亞、保羅珊、イラク、埃及皆畔きてアブダラに應じ、年を出てずしてメルワン殂す、是に於てカレヂト黨はイラクを侵畧し、クファの民中ホセインの死を悼む者はソリマンを奉じて起り、其將モクタルはアリの庶子麻訶末を奉じて起り、クファを奪ひ、ホセインの敵を誅す、アブダラの弟ムサブ來りて之を圍み、モクタル食盡き奮鬪して死し、其衆悉く斬らる、時に六百八十七年なり、而して故モアヰア二世の遺子アブデルメリクもソリマンに從ふて起りエルサレムに據りしが、六百九十年從弟アムルを留守とし親イラクに出でヘアブダラ兄弟を除かんとす、アムル之に叛く、メリクかへりてアムルを誅し、再

アブダラの死

び出でゝムサブをバルミラ漠邊マスカムに斬りて、クファに入り、留ること四十日、善後の處分を爲し、六百九十一年ダマスクスに還り、ヘシャヅをしてアブダラを伐たしむ、ヘシャヅ直ちにメッカを圍みてアブダラを殺し方殿を毀ち市民を虐遇し最峻酷を極めたり、

然るに六百九十五年保羅珊の太守叛す、イラク太守ベシャズ東征しクファ、バッソラの民を威服し保羅珊の兵を擊破し、久しく暴威を東方に擅にせしカレシト黨も六百九十六年巨帥シェビブ溺沒してより漸く哈利發に服し、七百二年クファ、バッソラ間に新市ワシトを起して東方の要鎭と爲す、然るにダマスクス、メッカの相爭ふて敎國動搖せる間、その西南の領地亞非利加殆んど獨立せしかば、アブデルメリクは六百九十二年將ハッサンを遣りて之を伐たしめ、ハッサン乃北海岸に沿ふてカイルワンに出で、カルタゴを陷れ、更に西南の山地にベルベル女酋カヒナを破り三び亞非利加を服す、かくてオミア家哈利發の權再び重く、アブデルメリクの威令敎國に洽し、乃始めて鑄錢を擲めて羅馬帝への償金に充てしに、帝受けざりしかば貢輸を絶ち帝室と對立したり、哈利發の時亞剌比亞文學亦起り、有名なる

オミア朝の極盛

三詩人アクタル、ファラズダク、ジェリル出で、中に就きてアクタルは最哈利發の殊眷を蒙り金繡を衣、驕奢を街へり、

七百五年アブデルメリク殂し、子ワリド嗣ぎ、オミア朝の極盛時代至れり、蓋しオミア家以前の哈利發は厥訶末敎主にして祭祀を重んじ、質素寒朴の古風を存せしが、四方の經營盛に起り、地廣く人多く、都城ダマスクスに遷りてより、哈利發は帝王の實權を擁して漸く奢侈に流れ、世とともに其傾益甚しく、ワリドはカイロに黃金柱の觀宇を建て、前哈利發が起せしエルサレムの觀宇を擴張し、メッカの聖堂を改築し、ダマスクスに於て羅馬帝の手に成りし基督敎會堂に規り、數千の工匠を用ひて殿宇を起し、希臘波斯建築式を折衷して、後世ゴチク式の摸表たるサラセン式の基を定め、華美豪壯を極むると共に、諸將外經略征伐に從ひ、西は小亞細亞、東は保羅珊、南は亞非利加に、至るところに威令を耀かし、カッパドキア、アルメニア、ポンツス、ガラチアを剽略して、異材珍寶を得、其衆オキスヽ河を渡りて突厥種を逐ひ、不花剌を略しサマルカンド(薩末鍵)を圍みて之を屈して金帛奴隸を貢せしめ、クタイバは葱嶺を超え千寅を陷れて大唐の境に侵入し、カシムは印度

サラセン帝國の封域

方面を蠶食して五水地方に及ぶ、時に七百十年なり、而して勇將ムサは亞非利加に、ベルベル人を服し其壯丁三萬を簡拔して軍に用ひ、可蘭を布き、言語風俗を改め雜婚を奬め、西に進んでクウタに達しユリアヌス伯の扼する所と爲りしも、端なく西班牙の西ゴトと撞着し、三年にして半島を下し、サラセン帝國は西は太洋を極め東は亞細亞の中心に抵り、唐と接壤し東西の行程二百日を要し、フェルガナよりアデンに至り、タルスヽよりスラトに至り、南北數月程、封域の大當世に冠絶し、東薩末韃は西セヰレと略俗を同うし、メッカの聖殿には印度の士、ムーアの民肘をとりて談じ、チグリスの西、亞剌比亞語通せざるなく、教祖麻訶末、眇たる一商賈を以て起りしより僅に百年にして、聖典可蘭と利劍と相扶け、よく稀有の大業をなし、教國と李唐と東西に雄視して横さまに東半球の山河を斷つ、豈偉ならずや、

第十一章　麻訶末教國と基督教帝國の對峙

西ゴト王アタナギルド、その二公主とフランク王室、王子エルメヂギルドの亂、西ゴトの改宗、七十年間の十一主、ワムバ王、西ゴトの衰微、サラセン四ゴトを伐つ、西ゴトの滅亡、ユスチニアヌスの蒙塵、ヘラクリウス統の斷絶、サラセンのコンスタンチノプル攻圍の二、希臘砲火、フランクの形勢、サラセン、フランクの爭、シャルヽマルテルの勝、オミア家の衰運、アッバス家の興起、西班牙哈利發の起原、アルマンソル、縛逖の初始、バルメック家の起原、希臘帝國、レオ三世と殿像派、コンスタンチヌス五世、伊太利外藩王の滅亡、カロレンジャン王朝の起、ピピン少王と羅馬教皇、カール、カルロマン、ロムバルド王家の滅亡、カール王のサクセン征伐、フランク王國の隆昌、イサウリア帝統の末世、神聖羅馬帝國、皇帝と教皇と、カール大帝の內治、縛逖の盛世、ハルン聖主の末年、バルメック一家の滅亡、九世紀の始三强の內情、

西ゴトのアタナギルド

起仆常なし、東ゴトは麻訶末隆興に先ちて既に伊太利半島に亡びたるも、西ゴトは尙西班牙半島に據りてサラセンの征伐にあへり、オミア哈利發朝の極盛時代に先つ約百八十年、テウヂス西ゴトの王命を革め、カエサルアウグスツス(サラゴサ)攻圍のフランク王師を擊退せしも、姪東ゴト王ヒルヂバドの爲に東羅馬帝の師と爭ひて破れ、五百四十八年宮中に弑せらる、テウヂギセル亂に乘じて自立せしも、僅に一年半にして、亦賓客に弑せられ、北方諸市はアギラを奉じ、南方の諸

アタナギルドの二公主とフランク王室

黨は、アタナギルドを推立して、コンスタンチノプル帝室の援助を仰ぎ、南北の亂五年に亘り、アタナギルド遂に王位を得たり、假令來援の皇師諸市に據りて跳梁王命に應ぜずと雖も、十四年の治世小康を得て、エウリク以來一王は疆場に四王は兇手に殪れしも、王獨天命を以て、五百七十六年トレド宮中に逝けり、たゞ其二公主は終を善くせず、是より先、五百六十一年フランク王クロタル一世殂し、クロヰス王の諸孫國土を四分し、五百七十六年其一シャリベルト殂するや他の三王其遺領を分割し、シゲベルトは東アウストラシアを得てメッスに都し、シルペリクは西チウストリアを領してソアソンに據り、ゴントランは東南の方オルレアンを都城としてブルグンヂア(ブルゴンニ)を有し、フランク國を三分せり、西ゴトのアタナギルド王の長公主ゲレスヰンタはシルペリクに、次公主ブルニヒルドはシゲベルドの妃となりしが、シルペリクは女侍ブレデグンダを寵してゲレスヰンタを殺さしめしより、ブルニヒルトは夫王シゲベルドをすゝめて報復の師を出さしめ、シゲベルドの殂後自政を聽き事を用ひ威權を擅にして諸王公を殺戮せしかば、後遂にブレデグンダの爲に捕へられ、六百十三年クロタル二世の爲めに

エルメヂギルド王子の亂

慘殺せられたり、

西ゴトの諸黨は皆內訌私鬪の禍を恐れて、アタナギルドの殂後五ケ月相謀りて温厚の主レウヴ(リウバ)を擁立し、レウヴは大政を王弟レオヰギルド(リオベギルト)に委ねて自ナルボンに隱れ、居ること三年にして殂落す、レオヰギルドは有爲の主にて、西北スエヰ族を下し、羅馬皇師を逐ひて諸城市を復し、城を築き市府を搬め政令を革新し泉貨を鑄、ゴト人と土人とを融合して一國民と爲し、其主明君の稱あり、然るにゴト歷朝の禍根たるフランク王室との姻緣より、太子エルメヂギルドの亂作れり、王はエルメヂギルドの爲にアウストラシア(東フランク)王シゲベルトと后ブルニヒルトとの出イングンチスを納れて妃と爲し、後日の勢譽を得せしめんと謀りしに、王妃ゴイスヰンタは故アタナギルド王の妃にして深くアリウス派に歸依し、加特力派のイングンチスを嫌惡し、兩宮相軋る、王禍を恐れ太子エルメヂギルドをして南の方セヰレに治せしむ、エルメヂギルド治所に就き、妃及び叔父レアンデルの言を聽きて加特力派に歸し、羅馬皇師の殘留せるを糾合し、兵を擧げて父王に抗し、諭撫に應ぜず、セヰレ國を受くると二年にし

て陷り、エルメヂギルドはコルドヴに奔り、哀を王に請ふ、王罪を釋るして招きしも、癈してワレンチアに置き復國事に與らしめず、エルメヂギルド窃に近れて北の方フランクに奔らんとして追騎に獲られ、獄に下り、王が加特力派を捨てば再太子たらしめんといふをきかず、反つてアリウス派の高僧を罵りて、遂に誅せらる、妃イングンチスは幼子を携へコンスタンチノプルに遁れんとして途に薨ず、亂後王は異教の人心を害する甚しきを視、アリウス加特力兩派を調和せんと力めしが、民加特力派に屬する者多く、五百八十七年王の殂するや教亂將に作らんとす、王子レッカルド半島に君臨し、國家治安の爲に改宗を企て、國中兩教の高僧名士を徵して論議せしめ、去就を明示し、親率先して加特力派に歸依す、アリウス派のゴト人も勢微々として振はざるを見皆王に倣ふ、只王威及び難き南ガリアにはアリウス派の僧正アタロク反を謀り、王の繼母ゴイスヰンタも改宗を悅はずして異圖を畫せしも皆成らず、王乃五百八十九年五月、六十七僧正をトレドに會して西班牙教會法を制定し、嚮にレオヰギルド王は民權の別を沒せしも、王に至りて、其宗教の差をも亡ぼし、半島の民を合一して、斯に近世西班牙國民の根底を

四ゴト七十年間の十一主

固くせり、時にフランクの兵六萬ナルボン地方を侵し、カルカソヂを圍みしも、將軍クラウジウス之を擊破し之より後、フランク復南侵せず、王の世は半島罕觀の良治と稱せらる、故に六百一年王殂するや國民直ちに幼子レウヴを推戴せり、

レウヴ以後西班牙のゴト朝は七十年間に十一主を代へしも、加特力教會の漸次興隆する外、殆んど記すに足る可き重事なし、レウヴは二年にして貴族ヰテリクに位を簒はれ、ヰテリクの在位七年間は失政多く、遂に其下に弑せられ、嗣王グンデマルの世短く、六百十二年シセブト撰まれて王位に登る、シセブトは國中に殘留せる羅馬兵を威壓して名聲を博せしも、刑辟を以て改宗を猶太人に迫りしより後の禍根を殘せり、六百二十一年スヰンチラ王之に代る、或はいふスヰンチラはレッカレド王の子なりと、善く希臘兵を服し、悉くバスク族を下し、民庶に敬慕せられしも、ゴトの貴族僧侶は權勢を削殺せられて平ならず、王の王子レッキメルをして政に參らしむるを見、シセナント魁首と爲り、フランク王ダゴベルの援を假りて叛き、サラゴサに自立し、簒奪の汚名を清うせん爲、六百三十三年、六十九僧正をトレドに會して登極の認諾を求む、僧正等乃爾後王位繼承は必ず貴族僧正

の議定による可く違犯せば教界より破門す可く、僧侶は租賦を免せらる可しと決せり、而してスペンチラ王一家の末路は終に明ならず、シセナント王の後キンヂラ撰ばれて位に即き、僧正會は復爾後國王はゴトの貴種に出で僧衣を着く可く、即位の始必ず異教禁遏の誓盟を爲す可しと決せしかば、六百四十年王殂し王子ツルが位を繼ぐや、ゴトの貴族キンダスヰンド反し、僧衣を着て位を簒ひ、峻厲酷薄を以て貴族僧侶に臨み、王室傾覆の罪を以て貴種右豪數百人を誅し、徒謫藉沒太多く、悉く不順の徒を除き、六百四十九年、王子レッケスヰント其後を承け、二十三年間、バスク一ぴ叛きし外、禍亂作らず、ゴトと土人の禁婚法を解除して、レオヰギルド王父子と與に西班牙國民の基礎確立の業を爲し、西ゴト史中昇平前後無比たり、六百七十二年王殂して國中哀悼せざるなし、宗室貴族以下老臣ワムバを强おて位に即かしめ、國民舉つてまた良主を得たるを慶せり、

ワムバ王

然るにワムバ繼承の報ガリアに達するや、ニーメス太守ヒルデリクはマグロン僧正グンヒルドの助を得、西班牙より遁れし猶太の衆を合せ、ラニメルを以てニーメス僧正と爲して自立を謀る、ワムバの將希臘人バウロは狡獪の徒にして、バスクを煽搖してワムバに叛かしめ、自ヒルデリクの黨を併せてナルボンに即位し、ガリア北西班牙を徇ふ、ワムバ王バスクを下し諸州を征し、ナルボンを陷れて賊將ヰチメルを捕へ、兵四萬を發してニーメスにバウロを攻めしめ、六百七十三年九月之を下し、衆議を排してバウロの命を釋るし、トレドに凱旋せり、後七年を經て六百八十年十月に至りワムバはエルヰグの詐謀に陷りて位を之に讓りて僧となり、西ゴト是より年を追ふて衰へ、また偉人を出さず、エルヰグはコンスタンチノプルを逐はれし波斯種の希臘人にてゴト族に非ず、且其位を得るや撰舉によらざりしかば正統の君王に非ず、詐略あるも器局狹小論ずるに足らず、唯當時の偉材トレド大僧正ユリアヌス其帷幄に參畫し、法令を改訂して、新王繼承の義を正うし、前王の姪エギカを後嗣と爲し王女を以て之に妻はし、家門の昌榮を期せり、六百八十七年エルヰグ殂し、エギカ位に即き、貴族僧侶を會し言を邦家の利病に托してエルヰグの托約を破る、ユリアヌス大僧正薨ずるに及び、シセベルト之に代り、放縱貪婪國事を私せんとせしも、エギカは前王の庸弱なるに似ざれば志成らず、乃諸豪と弑逆を謀りて露顯して罪せらる、

西ゴトの衰微

サラセンのムサ、タリク四ゴトを伐つ

然るに今や亞剌比亞の廐訶末教徒は既に亞非利加を服し、厚く猶太教徒を遇せしかば、僅に一海峽を隔てたる西班牙の猶太教徒は之を聞きて羨望に耐えず、大舉して君王に迫らんとす、エギカ乃令を發して猶太人を奴とし、其兒六歳以上の者は基督教徒の手に訓育せしめ、全く猶太教を撲滅せんとせしも、事成らず、七百一年エギカ殂し、王子ウチカ、西ゴトに君臨す、世にウチカを暴戾の主と爲すも、これ僧徒の評にして、國家民衆の爲には明君良主たりしが、事を以て故キンダスヰンタ王の孫テウデフリドを誅するや、其子ロデリク反し、七百十年王を弑して位を簒ふ、ウチカの二子幼にして敵する能はず、海を渡りて亞非利加のケウタに奔り、守將ユリアヌスに投ず、ユリアヌスはウチカの族にして、此時サラセンの勇將ムタと抗敵せしが、西ゴトに簒奪の變起り、且その女ロデリクの辱しむる所となりしと聞きて憤悲し、ムタを招きて與に西班牙を取らんことを勸む、方に是ダマスクスの盛世、オミア朝の哈利發ワリドの世に當り、サラセン始めて歐州の西端に入れり、

ムサはユリアヌスの甘言を聞きて俄に信ぜざりしも、書をダマスクスに致して征西の裁可をワリド哈利發に請ひて、先づベルベルの一編將タリクをして步四百騎一百を率て海を渡らしむ、タリク海峽を渡り、對岸の海角カルペにゼベラル・タリク（タリク山の義、後轉訛してジブラルタルと爲る）の名を殘し利品を載せて一ぴ南に歸り、復發して海を渡る、ゴト鎭南の將テウデメル大に愕き、急をロデリク王に報ず、時にゴトの貴族は敵の志剽畧に在りとして顧みず、獨ロデリクは國家の大事と爲し、前怨を捨てゝウチカの二王子と與に之を防ぎ、七百十一年七月サラセンの師とクリス、河（ガウダレテ河附近クセレス・デ・ラ・フロンテラに戰ふて敗死す、ムサ傳え聞き、兵一萬を以て峽を渡り、タリクの名太熾なるを忌みて進擊を止む、タリクはユリアヌスの言を聽きてムサの令を用ひず、兵を二路に分ち、一はエルヰラ、マラガ、エキシヂを陷れ、他はコルドヴを取り、別に自一軍に將と爲り都城トレドを陷れて珍寶を收め、北征二百餘里、ヂジョンに至りて還る、ムサも亦四方不服の徒を征し、テウデメルは死に至るまでムルキアに據りしも、その子孫遂に亡び、西班牙の民長く自ゴトの後苗たりと誇りしも、乾興の上此中世の偉族の爲によく後を存せしは、遙に東歐の一地角クリメア半島のゴチアの民ありし

西ゴトの滅亡

のみ、而も今や即亡し、斯くて初はフォイニケ、次に羅馬、次にゴトの有に歸せし西歐の大半島は斯にサラセン族の領土と爲り、千二百萬金の歲入は十世紀の諸基督教國の途に及ぶ能はざる所なりき、ムサ既に半島を平げ陸路歐南を横きりてコンスタンチノプルを陷れ、ダマスクスに還り、イスラムの教を地中海北に宣傳せんとす、哈利發ワリドはムサ、タリクの功を競ひ相忌みて征服の業中道に失墜せんを恐れ、急に之を徵し還す、タリクは星馳先づダマスクスに至り、征西の業を說きて大に哈利發の意を得たりしも、ムサは捕囚三萬、利品巨多を載せて東し、七百十五年ワリドは五十二歲を以てダマスクスに殂し、生前相見るを得ず、ワリドの弟ソリマン哈利發と爲りて、ムサ賞せられず、却つて寃を蒙り百征の功空しきを嘆じて已めり、

ユスチニアヌスの叛逆

之より先六百八十五年コンスタンチノプルのコンスタンチヌス・ポゴナツス帝殂し、子ユスチニアヌス二世(リノトメツス)嗣ぎしも、暴戾横虐臣民苦に耐えず、六百九十五年宿將レオンチウスを推戴して紫金を佩びしめ、ユスチニアヌスをクリムタルタリーのケルソニトの地に放つ、後三年アブシマルス反してレオンチウスの位を篡ひてチベリウスと稱し、ユスチニアヌスを求むること急なり、ユスチニアヌスよりてタナイス、ボリステネスの間に居る可薩の庭に奔り、大可汗の妹を妻として之に寄りしが、可薩部はコンスタンチノプルの重賄を受けて之を圖らんとす、ユスチニアヌス覺り、海に浮びて西竄し、ブルガリア王の援を假り、兵一萬五千を擧げて七百四年コンスタンチノプルを陷れ、嚮に都門を出でゝより十年を經て、帝位を復し、厚く金帛をブルガリア王に賜ひて遣りかへし、復横虐を恣にし盛に誅殺を行ひ、殊にケルソニトの不信を怒りて、悉く其民を屠らしむ、殘民兵を執りて起ち、可薩可汗亦帝に絕ち、諸州の亡民殘兵タウリスに集り、バルダスを立てゝフィリッピキウス帝と爲し、以て皇師に抗す、皇師鬪心なく民叛意を挿み、ユスチニアヌス帝刺客に弑せられ、ヘラクリウス帝の血統前後百年にして此に斷絕す、時に七百十一年なり、

ヘラクリウス帝統の斷絕

ヘラクリウス統絕え、イサウリア統興るの前六年は恰も哈利發ワリドの末年タリク西班牙を討つより、ソリマン帝都を侵すに至る、サラセン帝國極盛時代にして、フィリッピキウスは弑せられ、アナスタシウス二世は反軍と戰ひて敗れ、反賊

サラセンのコンスタンチノプル攻圍の二

にして帝位を得しテオドシウス三世は僅に一年に出でずして、イサウリアの人レオ三世帝に亡ぼされぬ、殆んど天下を席捲せんとせる摩訶末教國はソリマン哈利發クリドの後をうけて、レオ即位の初に直ちにコンスタンチノプルを撞かんとす、當時歐洲新興の國未盛強ならず、此地若し一ぴ擧らば基督教國は皆破れ歐洲の文明は地を拂ひしや知る可からず、世界史上の一大事變と謂ふ可し、七百十七年ソリマンの弟モスレマー、亞剌比亞波斯の兵十二萬を率てアビヅスを渡り、水師千八百艘をボスポルス海口に向はしめて、コンスタンチノプルを圍み、日を期して海陸並び攻めんとす、レオ三世江上の鐵鎖を解き火砲船を列ねて邀擊し、悉く敵の戰船を燒く、ソリマン親征して軍を勵まさんとせしも、志利亞のキニスリンに至りて暴に殂し、十月從弟オマル哈利發と爲りしも歲暮れて往援する能はず、冬大に雪り、亞剌比亞埃及の兵凍餓を疾み、翌春戰船武器糧食を載せていたりしも、砲火を恐れて都城に迫らず、加ふるにブルガリアの兵帝の請により、來りて脅かしたれば、サラセン軍は包圍十三ヶ月にして功無く、七百十八年モスレマー遂に引き歸りぬ、之をサラセンの第二コンスタンチノプル攻圍となす、第

希臘砲火

フランクの形勢

一征を去ると實に四十餘年なり、而して其志を得ざりしは、所謂希臘砲火の功にして皇師は固よりサラセン軍の敵にあらず、蓋し砲火の用は初へリオポリスの人カリテノスの傳へし所にて、石腦油、瀝青、硫黃を和し矢石輕舸に裝置して海陸の戰に用ひしものなり、其法秘して世に漏らさず、十一世紀に至り、麻訶末教徒始めて之を知り、十四世紀に至るまでサラセン砲火の名を專にせしが、此より硝石、硫黃木炭を混じて火藥の發明起り、遂に戰術に一大革命を生じたりき、

西の方西班牙を平げしも、東の方コンスタンチノプルに志を得ざりしサラセンは、また武を西に用ひてフランク王國の境を侵して中歐を併せんとす、七百二十年ソリマンの弟エヅド二世位に即き、呼羅珊太守イラクの衆を合せて叛き、バッソラに敗死し、アルメニア亦畔きしも、大局より見れば外フランクとの撞突に比す可くもあらず、抑もフランクは素フランキアと稱し、西北の方羅馬の風化をうけしケルト種族の地はフランキア・ロマナといひ其東フランク族發源の本地は他のチウトン諸族に隣りて、フランキア・チウトニカと稱す、則チウストリア、アウストラシアにして、東南ブルグンヂアと自三分の形勢を作す、故にクロヰス王後

サラセン、フランクの爭

屢分裂鼎立し其地は州伯の分治に委し、諸州伯の上に公(ルツオド)あり、王臣采地を受けてフィフを生じ采地世襲の風盛にして王權漸く輕く、公伯豪族皆自立の實を有するに至る、況んや王室の宰相(マヨルドムス) major domus は王の家事を總裁し王權を竊據して上を凌ぎ、君王遂に虛器を擁するにすぎず、就中此頃東にランデンのピヽンあり、メッスの僧正アヌルフと與にアウストラシアの大政を左右し、西にエルボアンありてチウストリア、ブルグンヂアの國事を擅制し、アヌルフを祖父とし、ピンを外祖父と爲せるヘルスタルのピヽンは公位を擁し、六百八十七年大にチウストリア宰相の師をテストリに破りて、自フランク公、チウストリア宰相を兼ね、是れよりチウトン則日耳曼種の勢力は羅甸ケルト種に克ち、尙フランク王を陽戴すと雖も、實は新王朝の基を開けり、七百十四年ピヽン薨じ、子シャルル父に代り、初はカムブライにて、次でソアソンに於て、チウストリアの師を破り、君王の實權を有し、サクセン、フリース諸種族を征服せり、然るに當時ブルグンヂア、アキタニアは殆んど自立し、ツールース公エウデスア、アキタニア王たり、七百二十一年西班牙のサラセン兵はアキタニアを侵畧し、ナルボンを圍みて大に破れ、西班牙太守アブデルラーマン至り救ひ、敗軍を收めて退く、七百廿四年哈利發ヒシヤム二世殂し、弟ハシェム職を襲ぐや西班牙のサラセン兵再び北侵し、カルカソンを取り、ニスメスを降し、これより所在を侵害してローン河よりライン河に及び、サン、リヨン、マーコン、シャーロン、ヂジョンを剽略し、一將去れは一將至り、フランク國中殆んど寧處なく、ヲブラルタルよりロアに至りて幾百里の地、悉く麻訶末教徒の蹂躪する所と爲る、七百三十二年アブデルラーマン大擧して北征す、エウデス敵する能はず、皆救をシャルヽに乞ふ、シャルヽ乃兵を集め、出でヽ之をツール、ポアチエーの間に邀ふ、アブデルラーマン大に驚きしも毫も屈せず、戰ふこと六日、大に勝つ、第七日に至りシャルヽ奮鬪し、アブデルラーマン戰沒し、サラセン軍破れ、エメン、ダマスクス、亞非利加、西班牙の諸軍潰裂各自引き去り、アキタニアは復せられ、シャルヽはマルテル(槌子)の號を得て歐洲諸國新興の先業を開き、基督教徒の爲に麻訶末教徒をピレナイ山外に退け、世界史上に一轉局を爲せり、實に七百三十二年なり、

シャルヽ、マルテルの勝

オミア家の衰運

假令ポアチエーの敗ありしも、サラセン族は尙捲土北上の志ありしが、偶亞非利加動搖して太守兵を西班牙に請ひ、且東には哈利發ハシェム三世コンスタンチノ

プルを侵さんとして成らず、ピチニアのニケアを攻めて拔く能はず、アルメニアに可薩起り、七百二十八年には可薩可汗メソポタミアのモスル門に至り、翌年哈利發の軍北征して深く其地に入りしも、七百三十一年可薩又南侵し、哈利發の世を通じて常に北邊の患を爲し、次てオミア家革運の緒を解き敎國東西ともに震驚して外を顧るに遑なかりしは、憐國の幸なりしなり、初モアヰアの哈利發と爲りしは亂に乘して頗起せしのみ、素より敎徒の意に非ざれば、オミア家は獨發祥の故國志利亞に尊ばるゝも其他心服する者少く、機を見て敎祖の後を推立せんと欲せざるは莫く、敎祖の叔父アッバス統を推さんとするアッバス黨は陰にアリ黨と通じ、檄を保羅珊地方に傳へて新にオミア家に代らんとす、故に七百四十三年哈利發ハシェム殂し、姪ワリド二世代りて失政非行多く、一年三ヶ月にして從弟エヂド三世(ワリド一世の子)に破らるゝや國內忽ち亂れ、ワリド二世の爲に仇を復すと號して、ホムス、バレスチナに起る者あり、エヂド三世在位五ヶ月にして病み、弟イブラヒム代りしも亦三月を經て、七百四十四年十一月メルワン哈利發の孫イラク太守メルワンに廢せられ、メルワンはホムス叛き、ダマスクスに叛徒起るや、ハ

アッバス家の興起

ランを退守し、爭亂相隨ぎたり、而も是なほオミア家の內訌に過ぎざりしに、アッバス、アリ兩黨の策此間に熟し、七百四十五年保羅珊太守變兆を哈利發に上りしも時既に晩く、アブ・モスレム兵を擧げて保羅珊太守を逐ひ、謀徒メルヴを取る、メルワン大に愕き、アッバス四世の孫イブラヒムを捕へてハルランに幽す、イブラヒムの弟アブ・アッビスこれを聞き、七百四十九年メルヴにアッバス家の黑旗を樹て、東信度河より西太洋に至る大敎國の主權を爭はんとす、蓋しオミア家は白色を徽號としファチマの後、則アリ黨は綠色を用ひ、アッバス家は黑色を用ひて相識別せり、メルワン乃東征し、七百五十年一月アッバスの軍とザブ河畔に逢ふ、地は昔て阿歷山ダラヤヴシュニ大王が相爭ひしアルベラを距ること遠からず、交戰二日、哈利發の師潰え、溺死殺傷算なく、メルワン妻子をハルランに誘ひ、都城ダマスクスに奔りて拒まれ、南の方埃及に遁れ、ニル河口に追騎の爲に斬らる、オミア家此に亡ぶ、モアヰアー世ダマスクスに據りて哈利發世襲を始めてより總て十四主八十九年なり、但此際綠色アリ黨の志を得ざりしは、其名正しきも其衆心アッバス黨に及ばざりしによれり、

西班牙哈利發の原始

アブ・アッバスはメルワンを滅して、悉く敵の枝葉根幹を斷剪してまた一人を剩さゝらんを希ひ誅除故舊交友の末に及び、廟を毀ち碑を踣し、陵墓を發き遺骨を碎き屍灰を散じ、酷毒至らざるなく、爲に鮮血哈利發（エル・ヒファ）の號を得たり、然るに故ハシェムの孫アブデルラーマン獨宗室の慘禍を遁れて江湖に流落し、亞非利加に入りて、ベルベル種に尊まる、アッバス、オミア兩朝の興廢は素東波斯より起りて西方の民與らず、故に西班牙の民は喜びて此オミア家の公孫を迎へてコルドヴに奉じて哈利發と爲し、以て二百五十年泰平の基を開き、アッバスは爲に西班牙、亞非亞利加を失ひ、敵國茲に先づ分裂を始めたり、然れどもアッバスは尚西亞細亞の大領土を掩有し、子孫をしてながく哈利發の地位を保たしめん爲、盛に宗室子弟を分封し弟マンスルをイラク（メソポタミア）に、諸父をエメン、志利亞、バッソラ埃及に、創業第一の功臣アブ・モスレムを呼羅珊に、二姪をクファとモスルとに樹立して、孤立の患を防ぎ、七百五十四年エウフラテス河上のアルバンに殂す、之をアッバス家の始祖となす、

アルマンソル

此年イラク太守マンスルはアブ・モスレムと與に巡狩してメッカに在り、アッバスの訃を得るや、モスレム直ちにマンスルを奉じて還り哈利發と爲す、マンスルの叔父志利亞太守アブダラは最先に黑旗を樹てゝ義を唱へしかば、創業の功を負ひて兵を起し、イラクに迫る、モスレム之をミグトニウム坡に破り、功を以て志利亞に轉移せらる、モスレム保羅珊の衆心を得て去るを欲せず、マンスルの疑を受けて誅せらる、マンスルは西班牙既に割けて西の方歐洲を侵すを得ざるを視て、東羅馬帝領を侵し、東カッパドキアのメリテヲ（マラチア）を陷れ、兵四千を屯し、キリキアよりパムフィリアに出で、メラス河畔に皇師を破り更に西征せんとす、適保羅珊のカレヂト派ラエンドより起りしかば、師をかへして、七百五十七年メッカに巡拜し、方殿を修しメヂナを過ぎて敎祖の陵に謁し、エルサレムを訪ひ、クファを都城とせんと欲し、附近ハシメヤに駐輦す、ラエンドの黨至りて嗷訴す、マンスル之を捕ふ、市民獄を脅かし哈利發の殿を圍む、既にして事已みしも、爲にマンスル、クファを厭ひ、新に地をチグリス河の東岸、メダインの北に相して都市を搬め、河水を引きて壕と爲し、一百六十樓を起し、當代の巧匠善美を盡くし、名けて平安城（ダルサラム）といふ、バグダッド（縛達）則是にして、猶オミア家のダマスクスに於ける如く、ながくアッバス

縛達の初始